有田・小田部

第 24 集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第471集

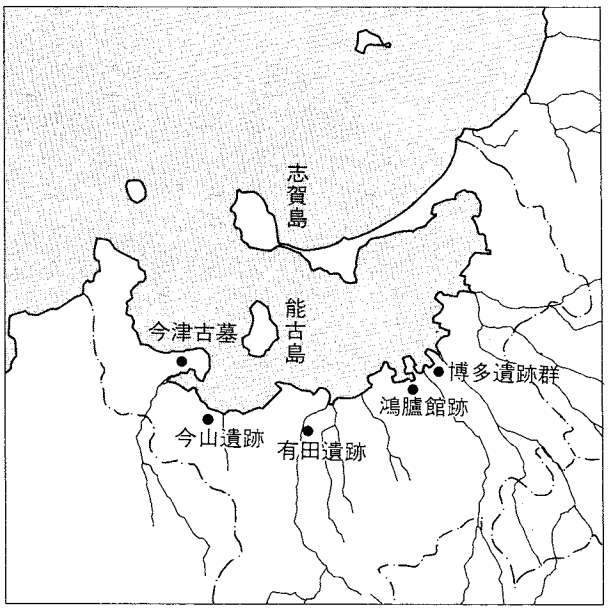
1996

福岡市教育委員会

有田・小田部

第 24 集

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第471集



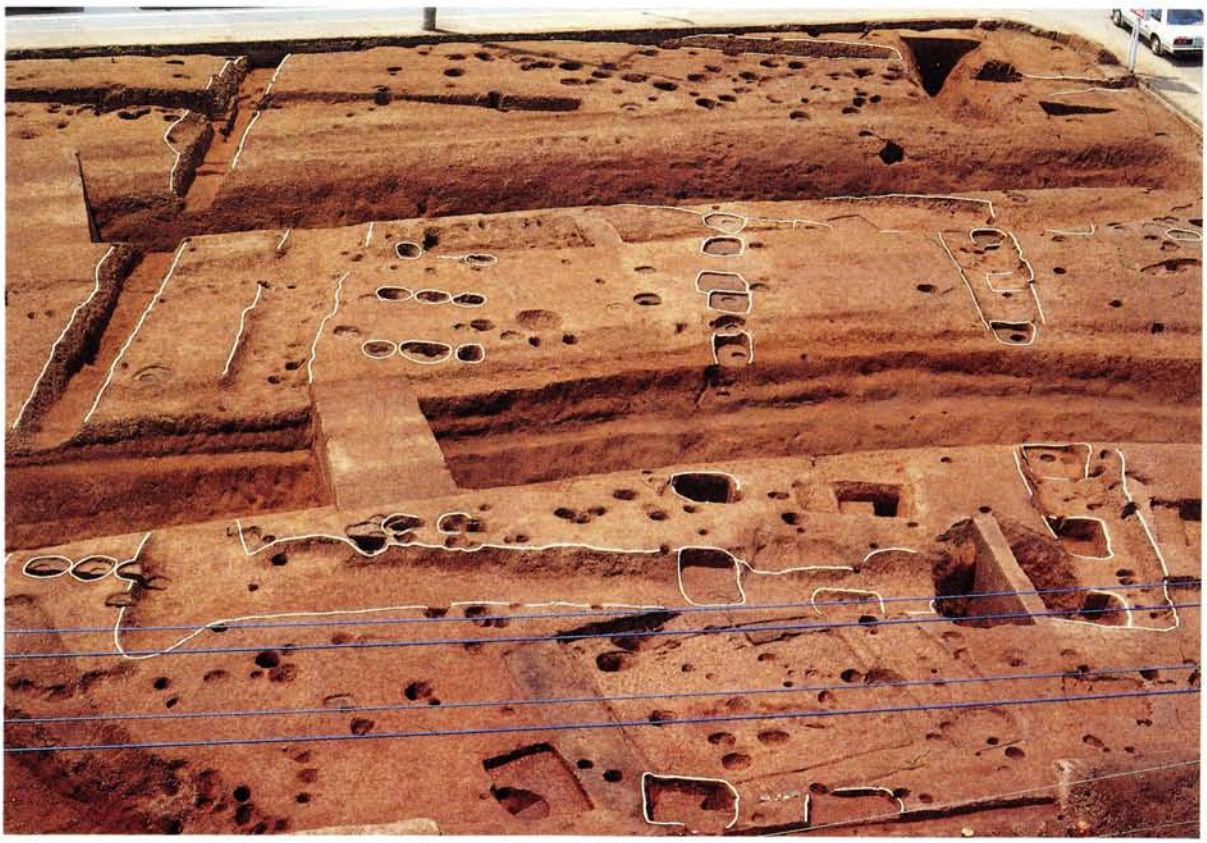
1996

福岡市教育委員会

井戸SE01内遺物出土状態（西から）

井戸SE02内遺物出土状態（西から）

第77次調査区全景（東から）



掘立柱建物SB01と溝SD11（北から）

序　　文

玄界灘に面した福岡市は、豊かな自然環境と歴史的な遺産に恵まれています。しかし、近年の福岡市は著しい都市化によってその姿を変貌しつつあります。

早良平野は大陸との交流の中で古くから栄え、そのために遺跡も多く存在している地域ですが、都市の市街地化の拡大と共にこの地域も都市基盤の整備がすすめられ、これに伴い埋蔵文化財の発掘調査も増加しているところです。

福岡市教育委員会では、この地域における各種の開発事業に伴い、失なわれゆく埋蔵文化財の保存と保護措置に努めているところです。

本書は昭和57年・58年度に発掘調査を行った有田遺跡第74・77・78次調査の成果について報告するものです。これらの調査地点は「有田・小田部」と呼ばれる台地上に立地しており、旧石器時代から江戸時代までの遺構・遺物を発見することができました。なかでも縄文時代晩期の環濠やその出土遺物は早良平野における稲作の始まりの時期を知る重要な手懸かりになるものと考えられます。

本書が市民の埋蔵文化財へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

平成８年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　尾花　剛

例　　言

(1)　本書は福岡市早良区有田・小田部・南庄地域内における住宅開発に伴い、福岡市教育委員会が昭和57・58年度の２ヶ年において国庫補助を得て実施した緊急発掘調査報告書である。

(2)　本書には昭和57年度の第74次調査、昭和58年度の第77・78次調査について収録する。

(3)　本書では有田・小田部台地上の遺跡を一連のものと見做し、広義の有田遺跡と呼称する。

(4)　発掘調査は井澤洋一、松村道博が担当した。

(5)　本書に掲載した遺構実測は、第74次調査を井澤、松村、渡辺武子、清原ユリ子が、第77・78次調査を井澤、松村、谷沢仁、辻哲也、清原が行った。

(6)　本書に掲載した遺物実測は、牛房綾子、池田孝弘、田中昭子、吉永祐美子が行った。石器、陶磁器については器械実測を行った。第74次調査は廣嵜香が行い、第77次調査は廣嵜、吉田扶希子が担当した。

(7)　遺構・遺物の製図は主に牛房、廣嵜が行い、石器の製図の一部を井澤が担当した。

(8)　遺構の写真撮影は井澤、松村が分担して行い、遺物の撮影は牛房が行った。

(9)　本書に掲載する遺構一覧表は池田、牛房が、遺物の一覧表は井澤、三浦明子が作成した。

(10)　本書作成にあたっては福田小菊、多田映子、西口キミ子、吉田扶希子、池田洋子の協力を得た。

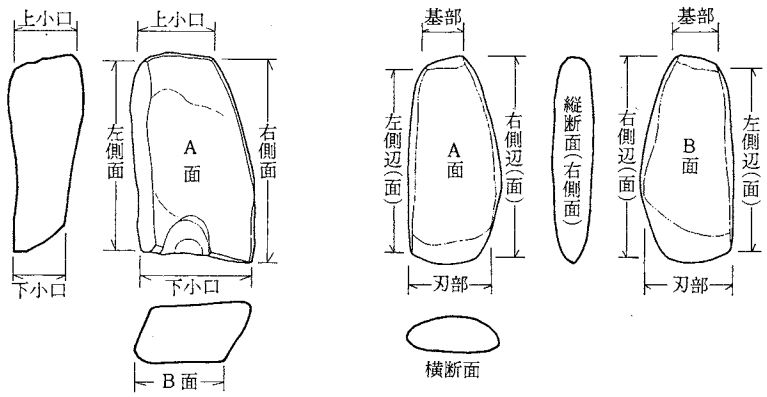
(11)　遺構番号は発掘調査中に於いて検出した順に番号をふり、本書では遺構略号を遺構番号の頭に付けた。遺構の略号として用いたのはSC（住居跡）、SE（井戸）、SK（土壙）、SU（貯蔵穴）、SX（構築物）、SB（掘立柱建物）、SA（柵）、SP（小穴）である。

(12)　本書の遺物番号は遺構の種類毎に通し番号で示し、挿図・図版番号に一致させている。

(13)　本書に用いた方位は磁北である。

(14)　本報告にかかわる図面・写真・遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

(15)　本書の執筆は井澤が担当し、編集は牛房の協力のもと井澤が行った。



本　文　目　次

第１章　はじめに ……1
　１．調査に至る経過 ……1
　２．発掘調査組織 ……1
　　(1)　昭和57年度の調査組織（第74次調査） ……1
　　(2)　昭和58年度の調査組織（第77・78次調査） ……2
　　(3)　平成７年度資料整理 ……2
第２章　有田・小田部の歴史 ……8
　１．立地・歴史的環境 ……8
　２．文献資料 ……8
第３章　第74次調査……11
　１．地形と概要……13
　　(1)　立地……13
　　(2)　概要……13
　２．遺構・遺物説明……17
　　(1)　住居跡（SC） ……17
　　(2)　井戸（SE） ……17
　　(3)　井戸出土遺物……32
　　(4)　土壙（SK） ……46
　　(5)　土壙出土遺物……51
　　(6)　製鉄遺構（SX） ……52
　　(7)　製鉄遺構出土遺物……55
　　(8)　掘立柱建物……55
　　(9)　掘立柱建物出土遺物……68
　　(10)　溝（SD） ……69
　　(11)　溝出土遺物……74
　　(12)　小穴（SP） ……81
　　(13)　小穴出土遺物……81
　　(14)　包含層出土遺物……81
　　(15)　遺構面出土遺物……81
　３．まとめ……86
第４章　第77次調査……97
　１．地形と概要……99
　　(1)　立地……99
　　(2)　概要 ……100
　２．遺構・遺物説明 ……104
　　(1)　住居跡（SC） ……104
　　(2)　住居跡出土遺物 ……118

(3) 井戸（SE）……121
(4) 土壙（SK）……124
(5) 土壙出土遺物……131
(6) 土壙墓（SX）……136
(7) 土壙墓出土遺物……137
(8) 掘立柱建物（SB）……142
(9) 掘立柱建物出土遺物……150
(10) 柵列（SA）……153
(11) 古代から近世の溝（SD）……155
(12) 古代から近世の溝出土遺物……168
(13) 縄文時代の溝（SD）……180
(14) 縄文時代の溝出土遺物……180
(15) その他の出土遺物……190
3．まとめ……191
第5章 第78次調査……207
1．地形と概要……209
(1) 立地……209
(2) 概要……209

挿図目次

Fig. 1 有田・小田部周辺の遺跡（縮尺1/25,000）……4
Fig. 2 有田・小田部台地と発掘調査地点（縮尺1/7,500）……5
Fig. 3 調査地点位置図（縮尺1/8,000）……9
Fig. 4 調査地点及び中世溝配置図（縮尺1/3,000）……10
Fig. 5 第74次調査地点位置図（縮尺1/600）……13
Fig. 6 第74次調査遺構配置図（縮尺1/200）……14
Fig. 7 第74次調査区周壁土層実測図（縮尺1/80）……15
Fig. 8 住居跡SC01～03実測図（縮尺1/80）……18
Fig. 9 第74次調査井戸配置図（縮尺1/300）……19
Fig.10 井戸SE01実測図（縮尺1/20・1/40）……21
Fig.11 井戸SE02実測図（縮尺1/20・1/40）……26
Fig.12 井戸SE03実測図（縮尺1/40）……28
Fig.13 井戸SE04実測図（縮尺1/40）……29
Fig.14 井戸SE08実測図（縮尺1/40）……32
Fig.15 井戸SE01出土遺物実測図（縮尺1/3・1/10）……33
Fig.16 井戸SE02出土遺物実測図①（縮尺1/3）……35
Fig.17 井戸SE02出土遺物実測図②（縮尺1/1・1/3）……36
Fig.18 井戸SE02出土遺物実測図③（縮尺1/3）……37

Fig.19　井戸SE03出土遺物実測図（縮尺1/4）……39
Fig.20　井戸SE04出土遺物実測図①（縮尺1/3）……40
Fig.21　井戸SE04出土遺物実測図②（縮尺1/3）……42
Fig.22　井戸SE04出土遺物実測図③（縮尺1/3）……43
Fig.23　井戸SE04出土遺物実測図④（縮尺1/3）……44
Fig.24　井戸SE08出土遺物実測図（縮尺1/3）……46
Fig.25　土壙SK04・05・07・10・11実測図（縮尺1/40）……47
Fig.26　土壙SK12実測図（縮尺1/40）……48
Fig.27　土壙SK07・10・12出土遺物実測図（縮尺1/3）……50
Fig.28　土壙SK12出土遺物実測図（縮尺1/4）……51
Fig.29　製鉄遺構SX03・06実測図（縮尺1/30）……52
Fig.30　第74次調査掘立柱建物配置図（縮尺1/300）……55
Fig.31　掘立柱建物SB01～06実測図（縮尺1/80）……57
Fig.32　掘立柱建物SB07～11実測図（縮尺1/80）……59
Fig.33　掘立柱建物SB12・13実測図（縮尺1/80）……63
Fig.34　掘立柱建物SB14～19実測図（縮尺1/80）……64
Fig.35　掘立柱建物SB20～24実測図（縮尺1/80）……65
Fig.36　掘立柱建物SB01・03・05・06・08・10～12
出土遺物実測図（縮尺1/3）……67
Fig.37　第74次調査溝配置図（縮尺1/300）……69
Fig.38　溝SD04・05・10実測図（縮尺1/30・1/40）……70
Fig.39　溝SD04・05出土遺物実測図（縮尺1/3・1/6）……73
Fig.40　溝SD05出土遺物実測図（縮尺1/3・1/1）……74
Fig.41　溝SD07・09・10出土遺物実測図（縮尺1/3）……76
Fig.42　溝SD10出土遺物実測図（縮尺1/3）……77
Fig.43　溝SD10・12出土遺物実測図（縮尺1/3）……79
Fig.44　SP出土遺物実測図①（縮尺1/3・1/4）……82
Fig.45　SP出土遺物実測図②（縮尺1/1・1/3）……83
Fig.46　包含層・遺構面出土遺物実測図①（縮尺1/1・1/3）……84
Fig.47　第77次調査地点位置図（縮尺1/600）……99
Fig.48　有田遺跡概要図（昭和41～43年）（縮尺1/300）……100
Fig.49　九州大学調査27街区発掘区域実測図（縮尺1/100）……101
Fig.50　第77次調査遺構配置図（縮尺1/250）……102
Fig.51　第77次調査住居跡配置図（縮尺1/400）……104
Fig.52　27街区第1号竪穴住居址〔転載、一部改編〕（縮尺1/60）……105
Fig.53　住居跡SC01・11実測図（縮尺1/60）……105
Fig.54　27街区第2号竪穴住居址〔転載、一部改編〕（縮尺1/60）……108
Fig.55　住居跡SC02実測図（縮尺1/60）……108
Fig.56　27街区第3号竪穴住居址〔転載、一部改編〕（縮尺1/60）……111
Fig.57　住居跡SC03実測図（縮尺1/60）……111

Fig.58　住居跡SC04実測図（縮尺1/60）……112
Fig.59　住居跡SC05～07・09・10実測図（縮尺1/60）……114
Fig.60　住居跡SC08実測図（縮尺1/60）……117
Fig.61　27街区第１～３号竪穴住居址出土遺物実測図〔転載、一部改編〕（縮尺1/4）……118
Fig.62　住居跡SC01・04～06出土遺物実測図（縮尺1/3・1/4）……119
Fig.63　第77次調査井戸配置図（縮尺1/400）……121
Fig.64　井戸SE11・15実測図（縮尺1/40）……122
Fig.65　井戸SE18実測図（縮尺1/40）……124
Fig.66　第77次調査土壙配置図（縮尺1/400）……125
Fig.67　土壙SK01～03実測図（縮尺1/40）……126
Fig.68　土壙SK04・06・12・16実測図（縮尺1/40）……130
Fig.69　土壙SK01出土遺物実測図（縮尺1/3）……131
Fig.70　土壙SK02出土遺物実測図①（縮尺1/3）……132
Fig.71　土壙SK02出土遺物実測図②（縮尺1/1・1/3）……133
Fig.72　土壙SK03・04・12出土遺物実測図（縮尺1/1・1/3）……134
Fig.73　第77次調査土壙墓配置図（縮尺1/400）……137
Fig.74　土壙墓SX05・08・09・13・14実測図（縮尺1/40）……138
Fig.75　土壙墓SX05・08・09・13・14出土遺物実測図（縮尺1/3）……141
Fig.76　第77次調査掘立柱建物・柵配置図（縮尺1/400）……143
Fig.77　掘立柱建物SB01実測図（縮尺1/100）……145
Fig.78　掘立柱建物SB02・03実測図（縮尺1/40・1/80・1/100）……148
Fig.79　掘立柱建物SB01出土遺物実測図（縮尺1/3）……148
Fig.80　掘立柱建物SB04・05実測図（縮尺1/100）……150
Fig.81　柵SA01・02実測図（縮尺1/50・1/200）……151
Fig.82　第77次調査溝配置図（縮尺1/400）……153
Fig.83　溝SD02実測図（縮尺1/40）……155
Fig.84　溝SD03実測図（縮尺1/40）……157
Fig.85　溝SD04・05実測図（縮尺1/40）……159
Fig.86　溝SD06・07実測図（縮尺1/40）……160
Fig.87　溝SD09～11実測図（縮尺1/40）……162
Fig.88　溝SD14実測図（縮尺1/40）……164
Fig.89　溝SD01出土遺物実測図（縮尺1/3・1/4）……165
Fig.90　溝SD01・02出土遺物実測図（縮尺1/3）……167
Fig.91　溝SD02出土遺物実測図①（縮尺1/3・1/4）……169
Fig.92　溝SD02出土遺物実測図②（縮尺1/4）……170
Fig.93　溝SD03出土遺物実測図①（縮尺1/3）……172
Fig.94　溝SD03出土遺物実測図②（縮尺1/3）……173
Fig.95　溝SD04・05出土遺物実測図（縮尺1/1・1/3）……174
Fig.96　溝SD06～09出土遺物実測図（縮尺1/1・1/3）……176
Fig.97　溝SD11・13・14出土遺物実測図（縮尺1/1・1/3）……177

Fig.98　溝SD12配置図（縮尺1/400）……180
Fig.99　環濠配置図（縮尺1/2,000）……181
Fig.100　溝SD12土層図・大型甕出土状況実測図（縮尺1/40）……182
Fig.101　溝SD12出土遺物実測図①（縮尺1/3）……185
Fig.102　溝SD12出土遺物実測図②（縮尺1/3）……186
Fig.103　溝SD12出土遺物実測図③（縮尺1/1・1/3・1/4）……188
Fig.104　SP65・88、No.3トレンチ、表土出土遺物実測図（縮尺1/1・1/3）……189
Fig.105　第6・19・47・77・101・107・113次遺構配置図（縮尺1/600）……193
Fig.106　第78次調査地点位置図（縮尺1/400）……209
Fig.107　第78次調査遺構配置図（縮尺1/200）……210
Fig.108　第77・78・100・107次調査遺構配置図（縮尺1/600）……211

表　目　次

Tab. 1　第74次調査住居跡一覧表 ……18
Tab. 2　第74次調査掘立柱建物一覧表 ……66
Tab. 3　第74次調査遺構一覧表 ……87
Tab. 4　第74次調査遺物一覧表 ……88
Tab. 5　第74次調査軒平瓦計測表 ……94
Tab. 6　第74次調査丸瓦計測表 ……94
Tab. 7　第74次調査平瓦計測表 ……94
Tab. 8　第74次調査鉄製品一覧表 ……94
Tab.9　第74次調査木製品一覧表……95
Tab.10　第74次調査石製品一覧表 ……96
Tab.11　第77次調査住居跡一覧表……117
Tab.12　第77次調査掘立柱建物一覧表……150
Tab.13　第77次調査遺構一覧表……194
Tab.14　第77次調査遺物一覧表……196
Tab.15　第77次調査軒平瓦計測表……203
Tab.16　第77次調査丸瓦計測表……203
Tab.17　第77次調査平瓦計測表……203
Tab.18　第77次調査桟瓦・道具瓦・瓦塼計測表……204
Tab.19　第77次調査鉄製品一覧表……204
Tab.20　第77次調査石製品一覧表……204

第１章　はじめに

１．調査に至る経過

福岡市は、昭和50年までに１市30町村が合併した都市で、面積は約336.81㎢を測る。平野部は大きく分けると福岡平野と早良平野からなっている。有田・小田部地区は福岡市の西部に広がる早良平野のほぼ中央部に位置し、台地上の面積は約70万㎡を測る。この地域はかつては福岡市近郊の農村地帯であった。昭和47年に政令指定都市に福岡市が指定された以降、九州経済の中核都市としてめざましく発展すると共に、人口の集中にしたがって福岡市の西部地域は道路網の整備や地下鉄の開通によって、住宅化が著しく進められているところである。有田・小田部地区も同様に過日の田園・畑作地域の面影はなく、現在では高層アパートが樹立している。

福岡市教育委員会では、昭和50年より有田・小田部地区のこれらの開発に対処し、発掘調査を実施しており、平成６年度現在までに177件を数える。多くは個人専用住宅であったが、近年は学校建設、市営住宅の改築などの公共事業や大型の民間開発事業も含まれている。本書では個人専用住宅及び、店舗付住宅など国庫補助の対象事業として発掘調査を実施した昭和57年度の第74次調査、昭和58年度の第77次・第78次調査の成果を報告するものである。

２．発掘調査組織

(1)　昭和57年度の調査組織（第74次調査）

調査主体　福岡市教育委員会
調査担当　福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第２係
調査責任　文化部文化課課長　　生田征生
　　埋蔵文化財第２係長　折尾 学
発掘担当　井澤洋一、松村道博
庶務担当　岡嶋洋一
調　査　員　山口勝己、池野尚昭、谷沢仁（現　佐賀県大和町教育委員会）、辻哲也（別府大学）
調査協力者　松尾和雄、岩城庄助、山下敏、結城茂巳、高浜謙一、渡辺武子、松井フユ子、佐藤テル子、金子由理子、清原ユリ子、真子昌子、西尾たつよ、松尾玲子、柴田幸子、土斐崎初栄、庄野崎ヒデ子、庄野崎チタカ、末松信子、砥綿千江子、堀川ヒロ子、中村千里、伊庭秀子、坂田まさ子、平井和子、後藤ミサヲ、柴田勝子、柴田春代、緒方マサヨ、山田悦子、筒井ひとみ、新香代里、久保順子、山田晶子
　　安部宏、明野隆、安連昌利、池田考弘、堺裕明、前田次郎、安岡洋二、西島健一、前田乱、松江宏文、萩原陽一郎、江見尚美、緒方希、北川智穂美（以上西南学院大学）
　　西南学院大学郷土史研究会
資料整理　宮嶋成昭、松尾正直、原秋代、青柳米子、石橋千恵、内尾トミ子、仲前智江子、永井和子、落合弥生、久保順子、池田洋子、山下仁美、当房純子、深堀博子

(2) 昭和58年度の調査組織（第77次・第78次調査）

調査主体　福岡市教育委員会
調査担当　福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第２係
調査責任　文化部文化課課長　　生田征生
　　埋蔵文化財第2係長　　折尾 学
庶務担当　岡嶋洋一
調査担当　井澤洋一、松村道博
調　査　員　谷沢仁（現　佐賀県大和町教育委員会）、辻哲也（別府大学）
調査協力者　松尾和雄、真子康次郎、高浜謙一、結城茂巳、座親秀文、西原達也、海田龍生、武田秀司、合屋龍介、松尾正明、下野敏夫、伊庭秀子、緒方マサヨ、金子由利子、清原ユリ子、坂口フミ子、佐藤テル子、柴田勝子、柴田幸子、柴田春代、柴田タツ子、庄野崎ヒデ子、土斐崎初枝、砥綿千江子、西尾たつよ、平井和子、堀川ヒロ子、松井フユ子、松井邦子、松尾玲子、有富いつ子、米嶋チズヨ、日野良子、末松信子、中村千里、後藤ミサヲ、吉岡田鶴子、宮原邦江、砥上志華子、木村伸子、吉田祝子、原花千代、江口洋子、合屋文子、坂田まさ子、結城律子、渡辺武子、森みえ子、浜口由美子、川日初、川田久子、吉川タエ、佐藤ヒサエ、島田まり子
　　西南学院大学歴史探求会
資料整理　原秋代、池田洋子、深堀博子、元田明子、内尾トミ子、仲前智江子、永井和子、友田妙子、小江英美子、大田けい子、久門みちよ、山下仁美

(3) 平成７年度資料整理

整理主体　福岡市教育委員会
庶務担当　埋蔵文化財課第１係　内野保基
整理報告　福岡市博物館学芸課主査　井澤洋一（前職　埋蔵文化財課）
調　査　員　池田孝弘、牛房綾子、廣嵜香、吉田扶希子
作　業　員　多田映子、西口キミ子、福田小菊、田中昭子、三浦明子

(有田第74次調査)

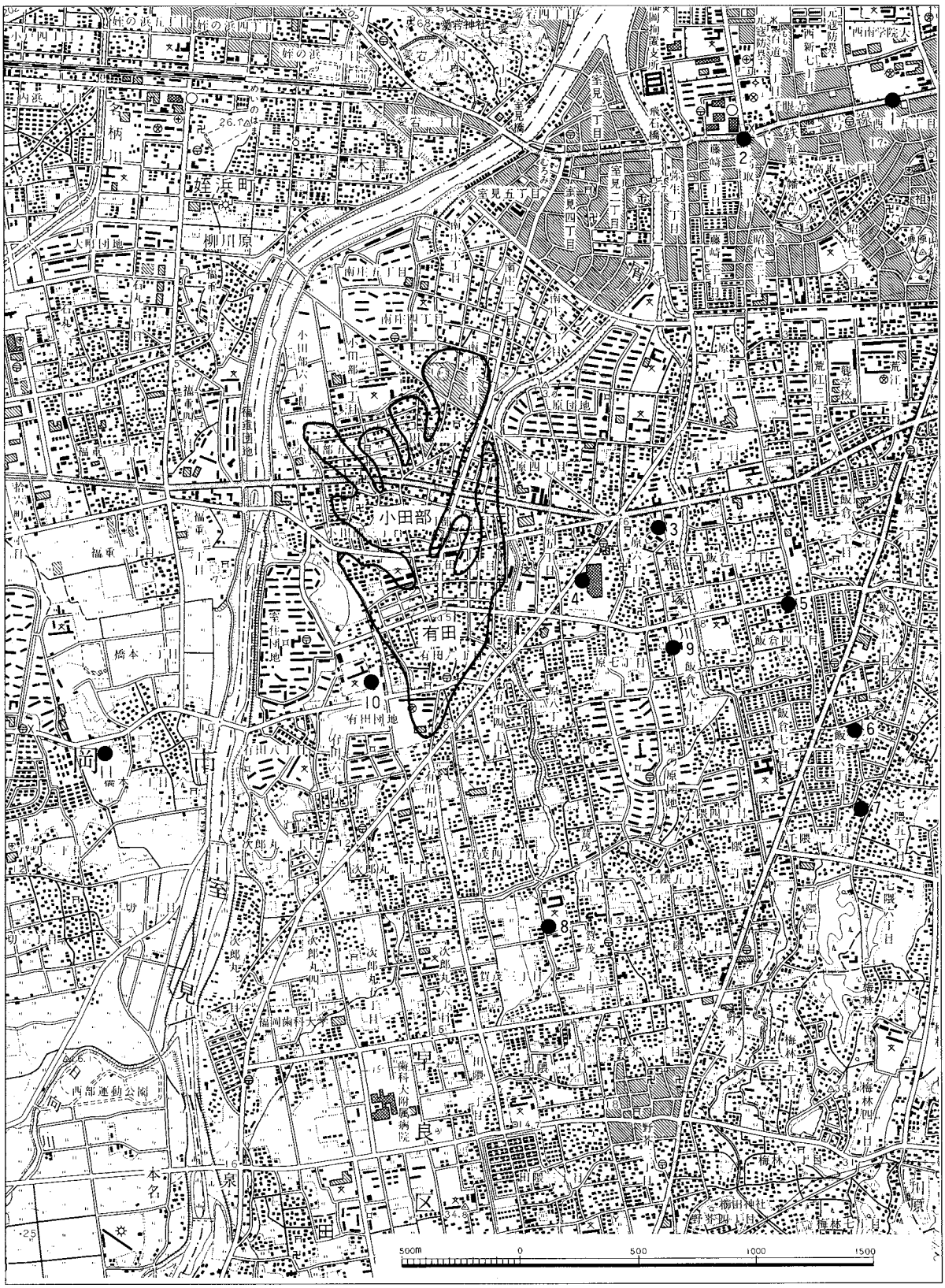
遺跡調査番号	8215		遺跡略号	ART－74
地番	有田2丁目7－80		分布地図番号	原82
開発面積	1,156㎡	調査対象面積	1,156㎡	調査面積	1,010㎡
調査期間	昭和57年10月12日～12月31日				

(有田第77次調査)

遺跡調査番号	8305		遺跡略号	ART－77
地番	有田1丁目30－1～3		分布地図番号	原82
開発面積	1,703㎡	調査対象面積	1,703㎡	調査面積	1,703㎡
調査期間	昭和58年4月8日～6月20日				

(有田第78次調査)

遺跡調査番号	8316		遺跡略号	ART－78
地番	有田2丁目20－2		分布地図番号	原82
開発面積	411㎡	調査対象面積	411㎡	調査面積	398㎡
調査期間	昭和58年5月23日～7月21日				



1．西新町遺跡　2．藤崎遺跡　3．原遺跡　4．原談儀遺跡　5．飯倉遺跡
6．飯倉原遺跡　7．千隈遺跡　8．鶴町遺跡　9．原深町遺跡　10．有田七田前遺跡　11．橋本榎田遺跡

Fig. 1　有田・小田部周辺の遺跡（縮尺1/25,000）

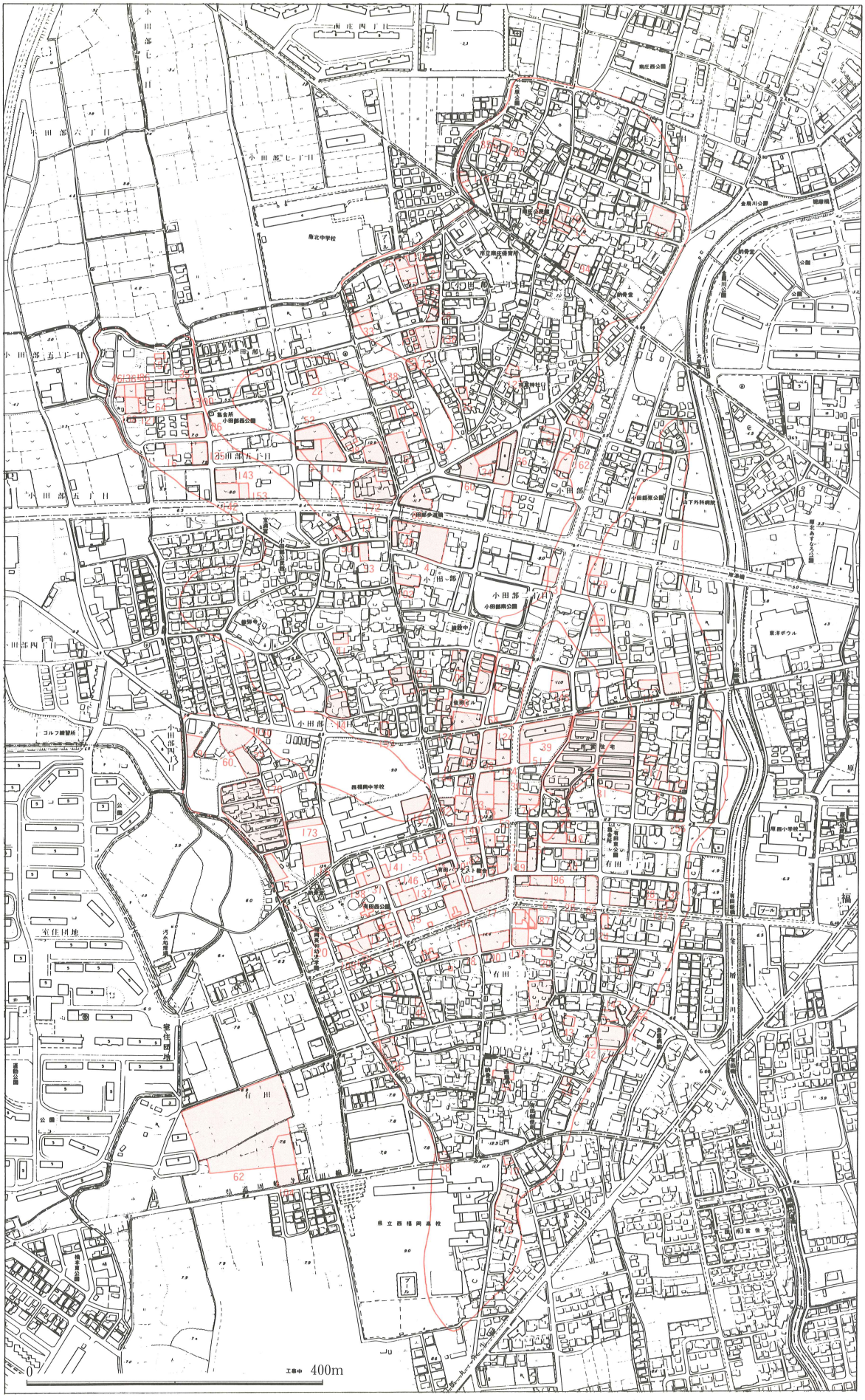
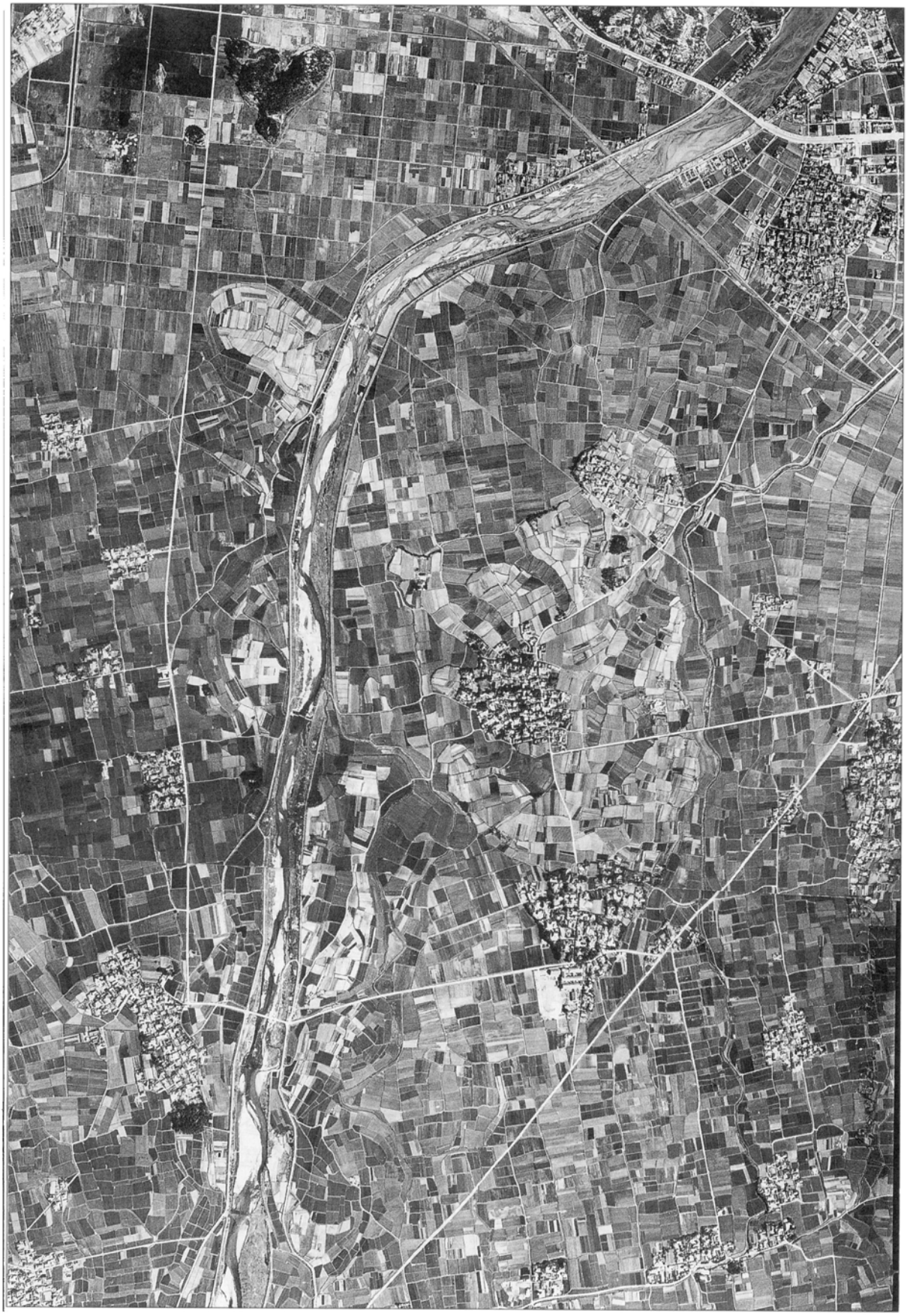


Fig. 2　有田・小田部台地と発掘調査地点（縮尺1/7,500）　※数字は調査次数を表わす。



有田・小田部周辺航空写真（昭和21年米軍撮影）

有田・小田部周辺航空写真（昭和50年撮影）

第２章　有田・小田部の歴史

１．立地・歴史的環境

有田・小田部の立地環境及び、歴史的環境については、既刊の報告書の中で詳細に述べられているので、これらの報告書を参照されたい。ここでは、発掘調査に関連する有田・小田部地区の歴史的事項を「筑前国續風土記拾遺」「早良郡志」の文献より転記した。

２．文献資料

「筑前國續風土記拾遺」

小田部村

和名鈔に此郡に田部郷あり。此村は其遺名なるへし。日本紀景行天皇五十七年に諸國に田部を置れしよし見えたり。（是古へ屯倉の公田を耕す者の称なり。民の字を多美といふも此田部と同事なり。）有田も本は此村より別れたり。（飯盛社領文永の坪付に小田部郷とあり。此村にも昔飯盛社領有しと見えたり。）村の西に室見川有。（此川の内に若宮、渡瀬、日渡し、渡瀬、柳川原、渡瀬等の名あり。）太閤道鳥飼村の南より荒江原村に入て、左に往還を行は肥前三ッ瀬越の道なり。右の小路を直に西に行は、此村の松尾原を下りて室見川を渡り、姪濱の南を經て下山門村に至る。是天正の比の往還也。秀吉公名護屋御陣の時、此道を經過し給し故に今に太閤道といふ。

教善寺

村西口に在。真宗西博多万行寺末座元也。

古塚　松浦殿塚　筑紫殿塚

松浦殿塚は松尾原に在。又丸山塚とも云。周四十間許高二間。上に古松あり。小田部氏の系圖を按るに、元祖は嵯峨源氏にて松浦黨也。左大臣源融公五代の孫を渡邊源次綱といふ。其子源太夫判官久始て肥前國松浦郡平戸に住す。次男松浦小源次正といふ。其後裔松浦隼人佐鎮隆の時、小田部城主木上何某と云者を討て、當所を領し初て小田部氏と号す。其子鎮俊（上総介宗養）其養子を民部少輔俊之（後に入道して紹旭といふ。）と見えたり。しかれは此松浦殿塚と云は、かの隼人佐鎮隆を云なるへし。筑紫殿塚は村の東北田間にあり。また大塚と云。周四十間許高三間許三段に縁有。上の段に土手回れり。古松一本立。筑紫氏由来詳ならす。又村の西に山伏塚といふあり。又松尾原の内に立石三ツ有。中の篇石高六尺幅七尺厚一尺四五寸あり。左右の二石はや、低し。共に銘字なし。是も古墓なるへし。其由来傳らす。

有田村

民居一所に在。東に金屑川有。北に流る。（飯盛社應永中坪付に有田村あり。）

寶満寺

村南に在。産神也。所祭玉依姫命　神功皇后　應神天皇也といへり。由来未レ詳。

○天満宮（天神屋敷）小田部氏の鎮守として祭りし社といふ。其側にから堀址有。下に見えたる小田部氏の里城址なり。

西應寺

村内に在。真宗西博多万行寺末也。開基の僧を恵正といふ。

古宅

村内に在。堀内といふ。堀址殘れり。廣宅なりしと見ゆ。是小田部氏か里城なるへし。其邊に小田部氏墓といふもあり。塚上に切石二重を置り。銘字はなし。癪を患ふる者祈願すれは必験ありとなん。又村南に築城といふ所あり。鎮西要略に小田邊城といふ見えたるは、是らをさしていふか。

「早良郡志」

村社寶満神社　當社は、有田字馬場にあつて、祭神は玉依姫命彦火火出見尊鸕鷀草葺不合尊である。例祭は九月十九日にして、境内五百二十二坪社殿約十三坪餘明治五年十一月三日、村社に定められた。氏子六十五戸、境内の菅原神社は、明治十五年一月二十日字天神屋敷から遷したのであつて、小田部氏の鎮守として祭つた社と云つて居る。當社の西方に一反歩許りの宮田と云ふ所がある、往年本社の祭田であつたと言ひ傳へて居る。

眞宗教善寺　當山は、小田部字宮城にあつて、菩提山と號し、眞宗西派に屬して居る。境内百七十九坪堂宇四十二坪にして、寺内にある二の觀音堂は字宮城と、字東屋敷とにあつたのを明治十四年七月當寺内に移したのである檀徒八十戸。

眞宗西應寺　當山は、有田字馬場にあつて、荒平山と號し眞宗西派に屬して居る。開基は僧恵正といふも、年月日は詳でない。境内百八十七坪堂宇二十五坪ありて、檀徒は三十五戸。

小田部氏墓　小田部字立石と謂ふ所に、小田部氏の墓と云ふのがある。二段切石を重ねてあるも銘の見るべきものがない、里人は甲塚とも謂つて居る。癪を患ふる者祈願すれば驗ありとて參詣者が多い。

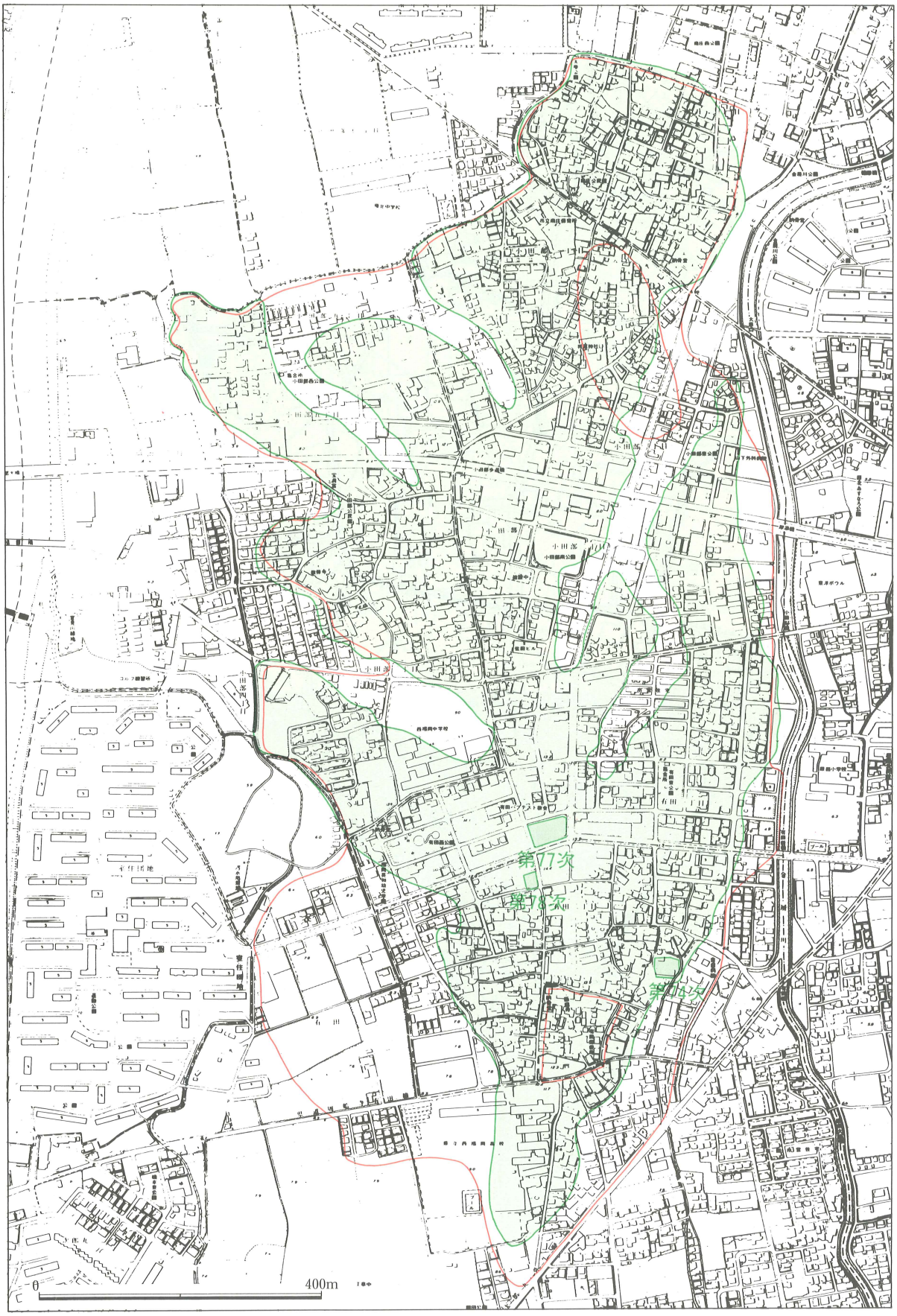


Fig. 3　調査地点位置図（縮尺1/8,000）

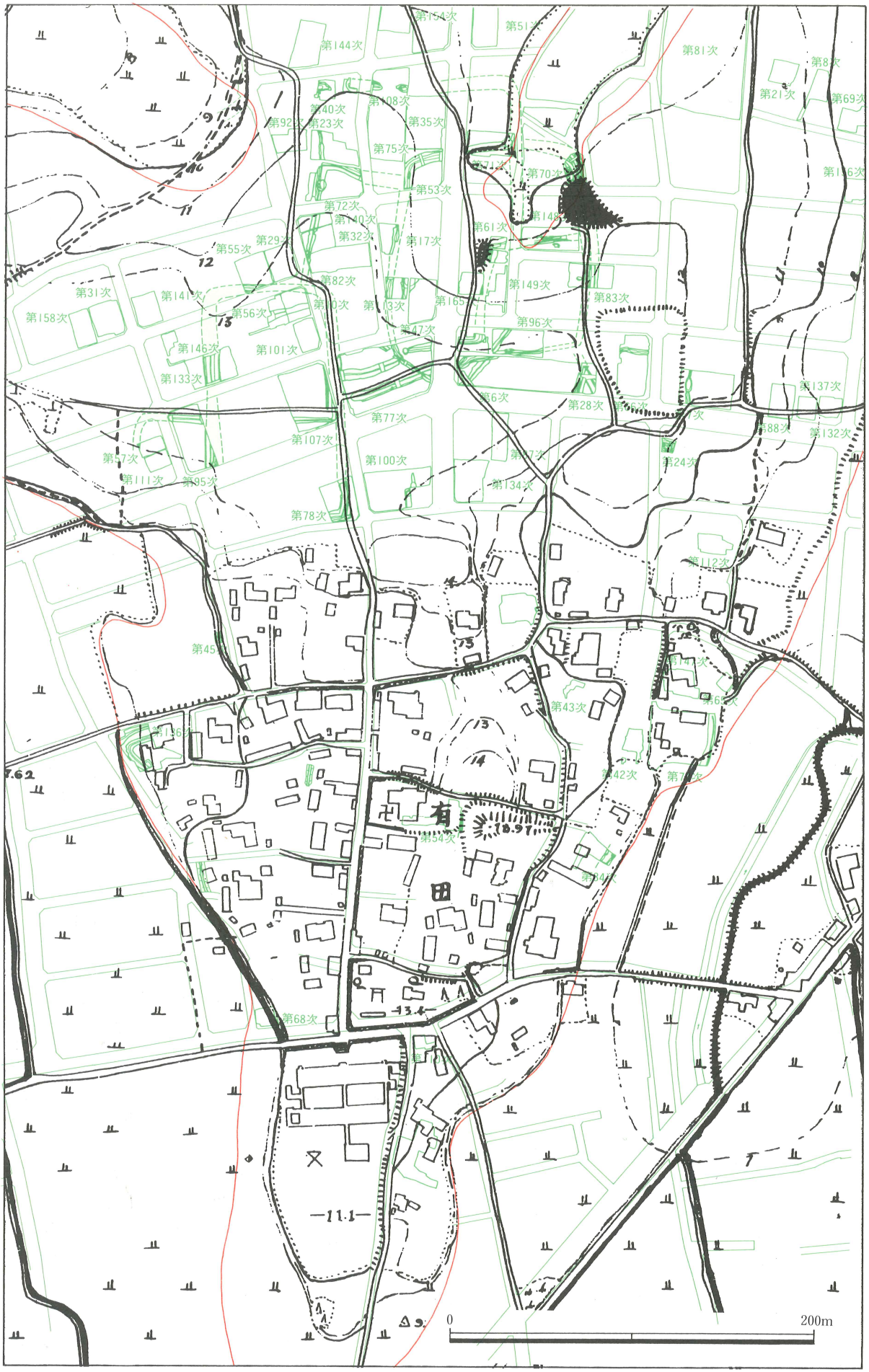


Fig. 4　調査地点及び中世溝配置図（縮尺1/3,000）

第３章
有田遺跡第74次調査

溝SD15発掘作業風景（東から）

西側調査区全景（北から）

東側調査区全景（北西から）

第３章　第74次調査（調査番号8215）

１．地形と概要

(1)　立 地

当該地は福岡市早良区有田２丁目７－80に所在し、発掘調査面積は1,010㎡である。

有田・小田部台地の南東側斜面に立地し、台地の東側は金屑川によって開削されている。段丘上の平坦地形を形成しており、当該地の平面形は略方形の形状を呈している。西側の後背地との落差は約2.5mを測る。遺構の遺存度は、西側は建物の基礎等が存在したため削平が著しいが、東側は旧地形の緩傾斜が残っているため比較的良好であった。遺構の時期は、弥生時代から近世までに亘るが、弥生時代と中世後半期の遺構を主体としている。当該地の北東側には、第65次調査を実施しており、ここでは標高4.5mにおいて遺構を検出している。当該地の現状での標高は7.5mを測る。当該地の東側から西側の縁辺部には水路が開削されているが、これが旧金屑川の河川跡と考えられる。又、伝承に残る戦国時代の濠であった「鬼丸ホゲ」もこれに相当するものである。

今回の発掘調査は住宅建設に伴うものであるが、調査期間が限られていたため、表土・排土の処理については一部を敷地外へ搬出して調査の迅速化を測った。

(2)　概 要

遺構面は標高約7.2～6.9mを測る。西側後背地の標高は9.0mを測り、当該地との間には1.5mの段差

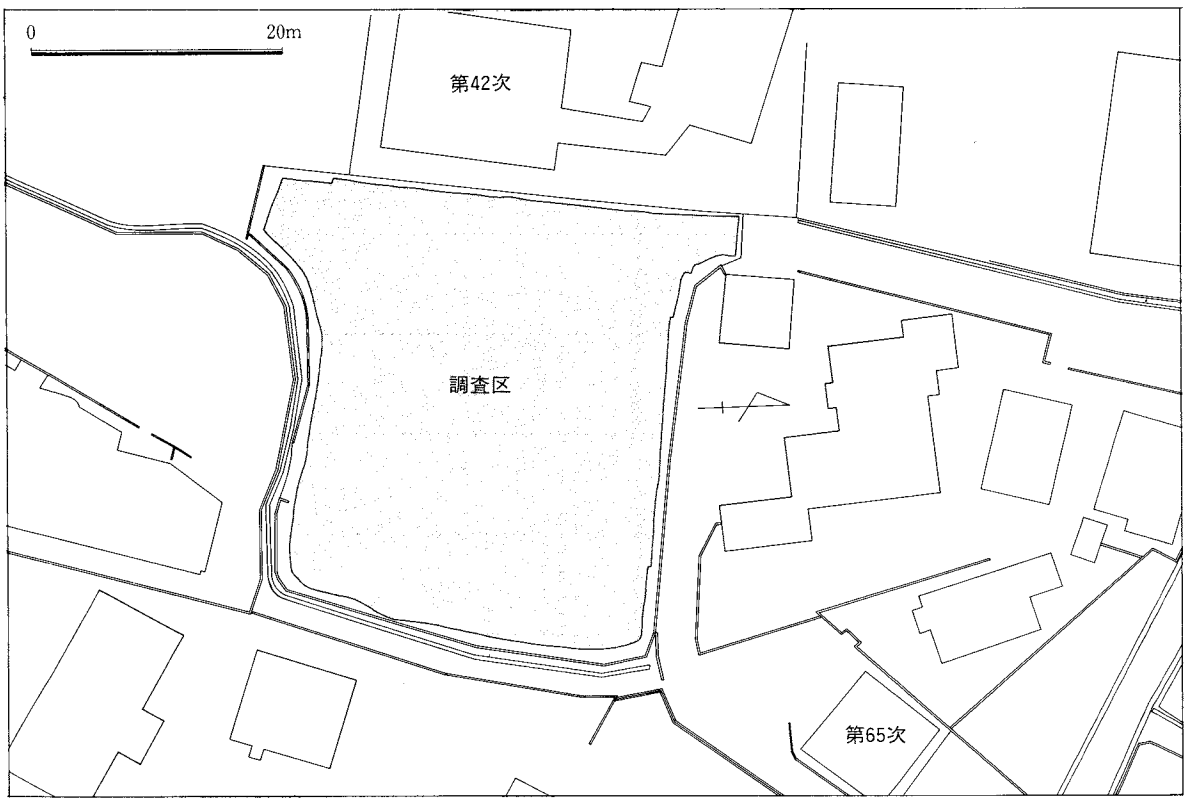
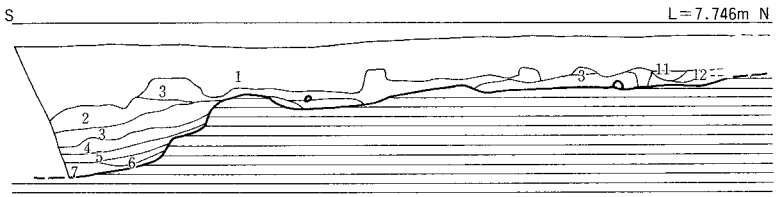
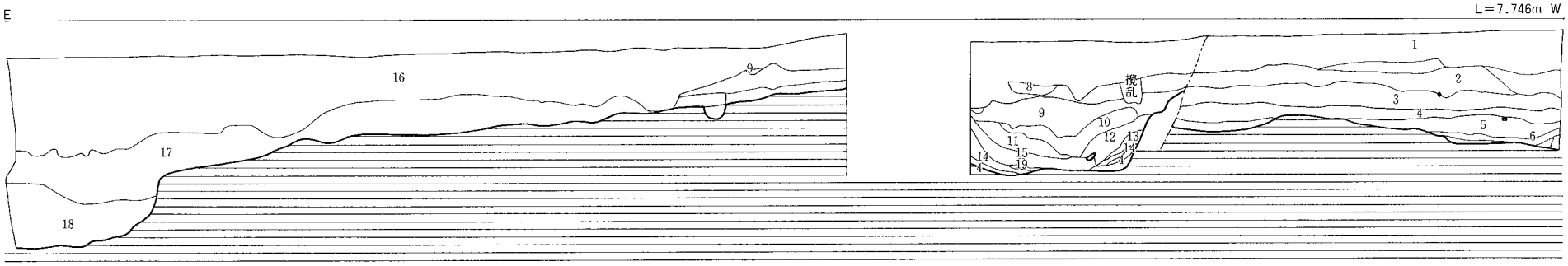


Fig. 5　第74次調査地点位置図（縮尺1/600）

Fig. 6　第74次調査遺構配置図（縮尺1/200）

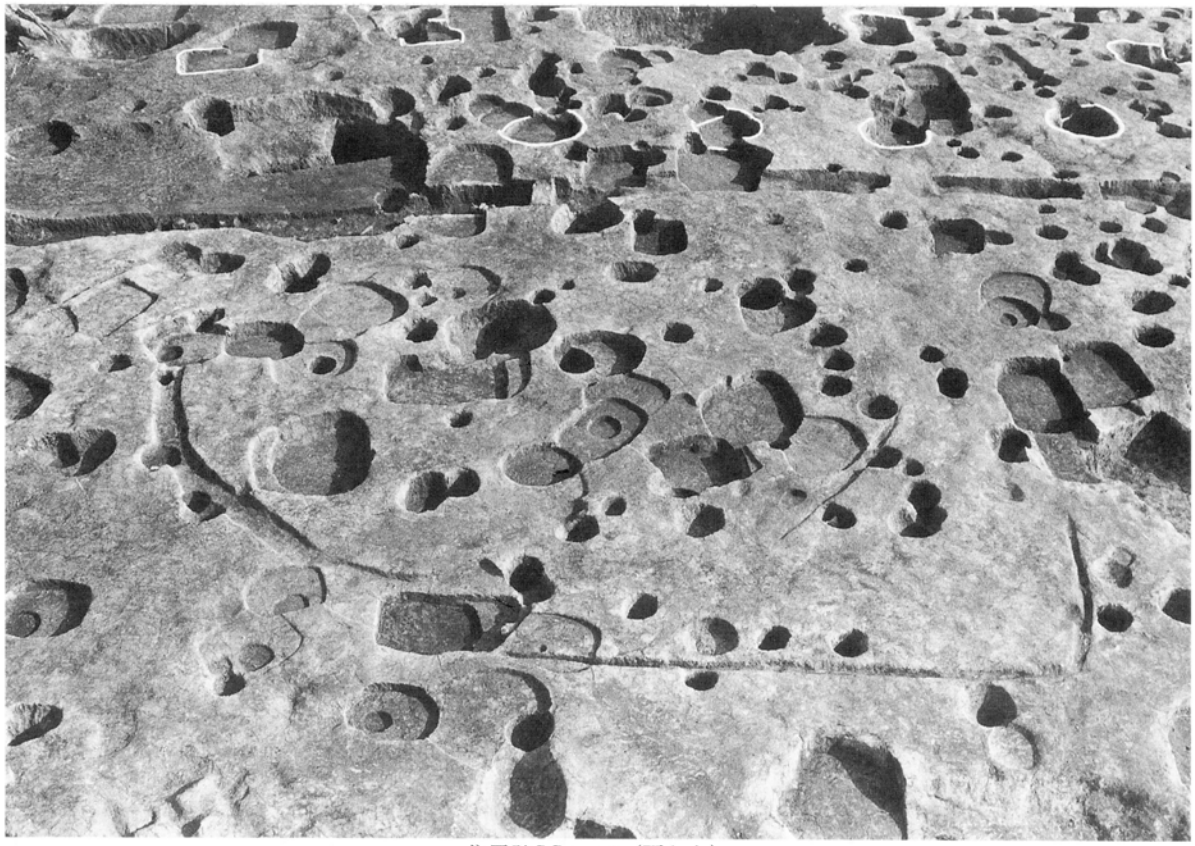


調査区西壁土層名称
1.表土及び攪乱
2.暗茶褐色粘質土　褐色土少し含む。硬い
3.茶灰色粘質土
4.灰色粘質土に茶褐色土(鉄分粒子)と八女粘土ブロック含む
5.4より暗い　八女粘土ブロック少量含む
6.灰色粘質土　八女粘土ブロック含む
7.青灰色砂質土　(地山)
8.暗灰褐色粘質土　八女粘土ブロック含む
9.暗灰色粘質土
10.3に八女粘土ブロック少量含む
11.淡茶灰色粘質土　八女粘土ブロック多量含む
12.黒灰色粘質土

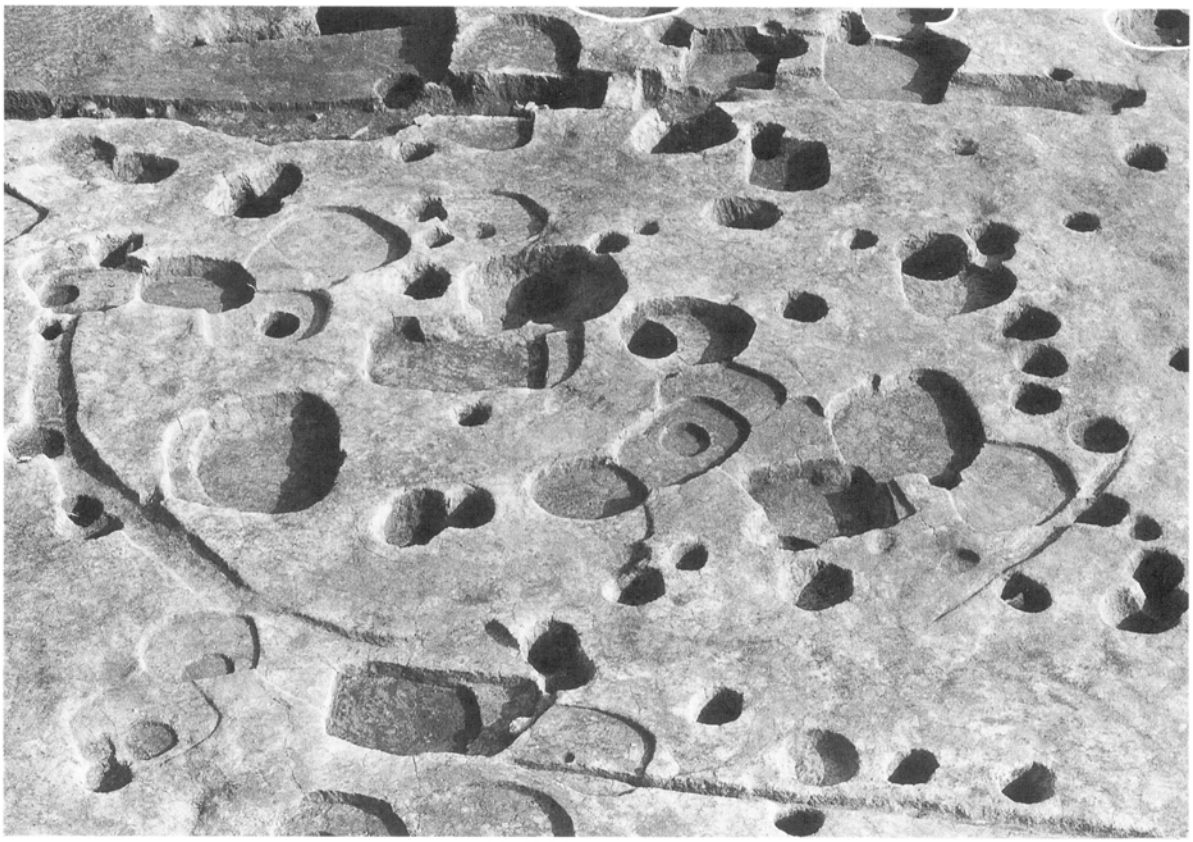


調査区南壁土層名称
1.表土及び攪乱
2.暗茶褐色粘質土
3.2に褐色土少量含む。硬い
4.茶灰色粘質土
5.灰色粘質土に茶褐色土(鉄分粒子)と八女粘土ブロック含む
6.5より暗い　八女粘土ブロック少量含む
7.青灰色砂質土(地山)
8.茶灰色土
9.暗茶褐色土
10.黒灰色粘質土　黄褐色粘質土ブロック含む。硬い
11.10に地山ブロック含む
12.茶色を帯びた黒灰色粘質土
13.暗灰色粘質土に黄褐色粘質土ブロック含む
14.13に黄褐色粘質土ブロック少量含む
15.やや暗い黒灰色粘質土
16.真砂
17.黒灰色土
18.暗灰色粘土

Fig. 7　第74次調査区周壁土層実測図（縮尺1/80）



住居跡SC01・03（西から）



住居跡SC01（西から）

がある。当該地の旧状は住宅地であるが、西側に片寄って建てられており、コンクリート基礎が遺存している。このため、当該地の西側は地山掘削による著しい削平を受けて、八女粘土が露呈している。遺構の残りは悪い。東側半分については所々に大きなゴミ穴が存在するものの、旧地形が緩傾斜面であったため、遺構の残りは良い。

表土の深さはFig. 7で示したように西側が1.2m、東側は35～50cmの厚さがある。第1層は、表土及び攪乱土であるが、東側は厚さ40～120cmの真砂土の客土がある。第2・3層の暗茶褐色粘質土層は二次的な自然堆積土である。第12層の黒灰色粘質土、第13層の暗灰色粘質土は東側の濠跡（鬼丸ホゲ）の埋土である。

検出した遺構の時期は、弥生時代から近世までの幅をもっている。弥生時代は住居跡、掘立柱建物、溝、井戸、古墳時代は土壙、住居跡、奈良時代は製鉄遺構、室町時代は井戸、掘立柱建物、濠で、近世は江戸中期の溝がある。

2．遺構・遺物説明

(1) 住居跡 (SC)

調査区の東側で検出した。遺構面が削平を受けているため住居跡の遺存状態は悪く、周溝部分もしくは住居跡の一部が遺存している状態であったため検出は困難をきわめた。

遺構面の精査を行ったところ3軒の住居跡を検出した。但し、炉跡や焼土面は検出できなかった。又、柱穴は住居跡SC01を除いて、いずれが所属するのか判断ができなかった。SC01･03は切り合い関係にあるが、方形住居跡のSC03が後出するものと考えられる。

SC01 (Fig. 8) 削平が著しいため全体形は不明であるが、平面形は円形を呈するものと考えられる。SC03から切られている。壁の遺存状態は悪く、約半周する周溝を残しているにすぎない。周溝の幅は15～25cm、深さ約7cmである。周溝の復原径は約5.5mを測る。柱穴は多数検出したが、この内環状に巡るP495･P736が住居跡の柱穴に相当するものと考えられる。柱穴の径は長径60～68cm、短径58～60cm、深さ52cm、柱根径16～18cmを測る。周溝の覆土は灰黒色粘質土である。覆土からは弥生時代の土器細片が出土した。

SC02 (Fig. 8) 調査区西側の境界地に位置するため全体形は不明であるが、平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられる。削平が著しく壁の遺存状態は悪い。現状の長さは、東壁で最大長は5.85m、北壁の最大長は1.1m、南壁の最大長は1.65mである。周溝幅は25～35cm、深さ約10cmを測る。柱穴は検出できなかった。周溝の覆土は灰黒色粘質土である。

SC03 (Fig. 8) 調査区東側の傾斜地に位置する。削平が著しいため全体形は不明であるが、周溝の一部が矩形に遺存している。平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられる。SC01を切っている。現状の北西壁の最大長は約3m、南西壁の壁の最大長は2.3m、周溝の幅は7～12cm、深さ3～5cmを測る。柱穴は不明である。周溝の覆土は灰黒色粘質土である。土師器片が出土している。

(2) 井戸 (SE)

井戸の構造としては若干疑問の残る1基を含め、全部で6基を検出した。弥生時代の井戸は1基、古墳時代1基、戦国時代2基、戦国時代～江戸時代1基、現代の井戸1基である。

SE04・08は調査区の境界にあるため、全体形状は不明である。

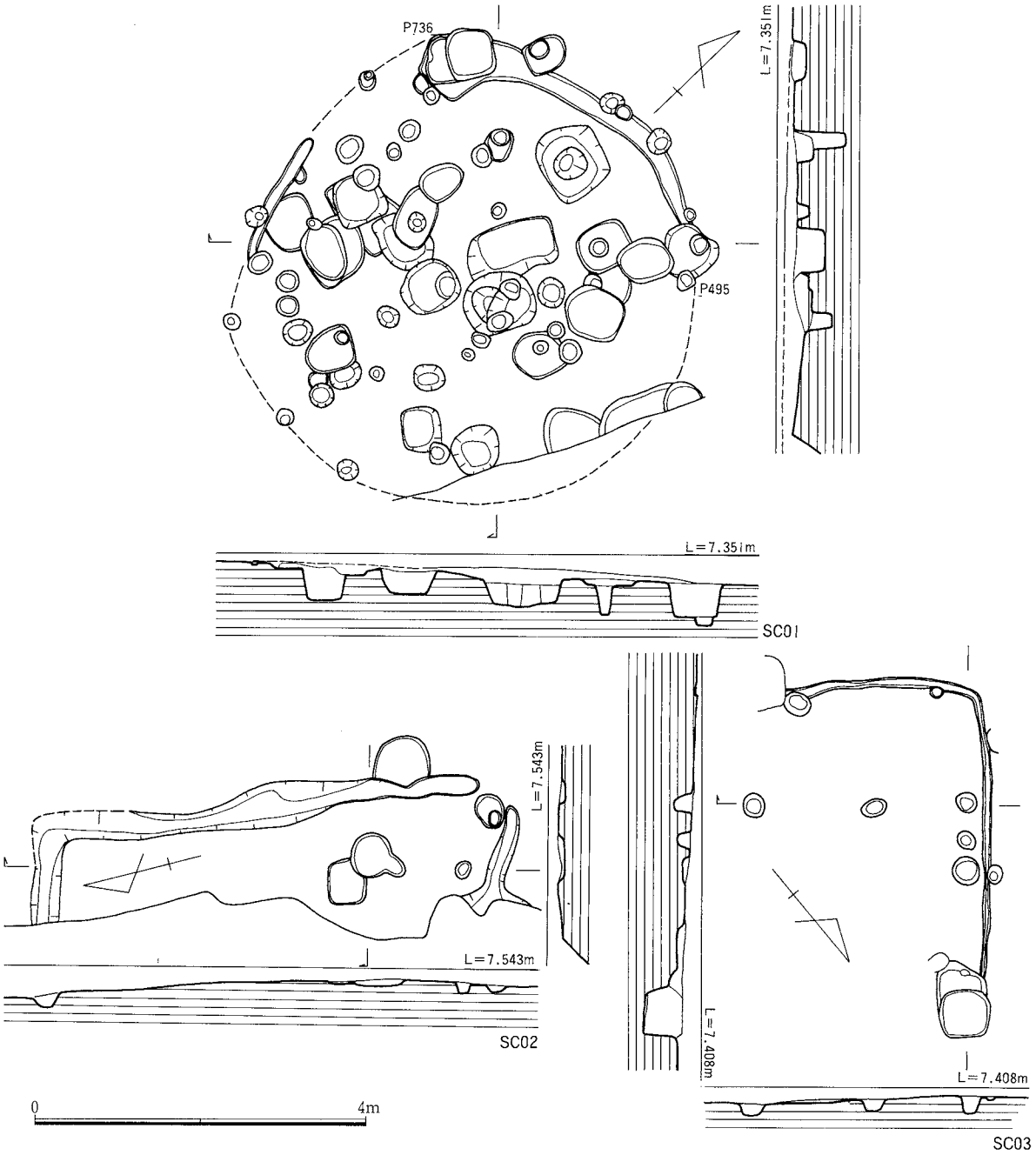


Fig. 8　住居跡SC01～03実測図（縮尺1/80）

Tab. 1　第74次調査住居跡一覧表

遺構名	形態	計測値（cm）			ベッド状遺構		火気施設(竈等)		出土遺物	時代	備考
		長	幅	壁高さ	有無	規模	有無	位置			
SC01	円形	560			×		×		なし		周溝有り
SC02	長方形	585	165$^{+\alpha}$		×		×		なし		周溝有り
SC03	長方形	350$^{+\alpha}$	230$^{+\alpha}$		×		×		なし		周溝有り、SD03

SE01（Fig.10）　調査区東側の緩斜面に位置している。掘立柱建物SB07と切り合う。素掘りの井戸で、平面形は上面が不整楕円形、底は不整の隅丸長方形を呈し、断面形は2段掘りになっており、上部は逆悌形、下部は截頭円錐形を呈している。井戸上面での最長径は2.9m、短径2.45m、深さは1mを測る。井戸底部は平坦になっており、厚さ約2mの青灰色粘土が貼られている。

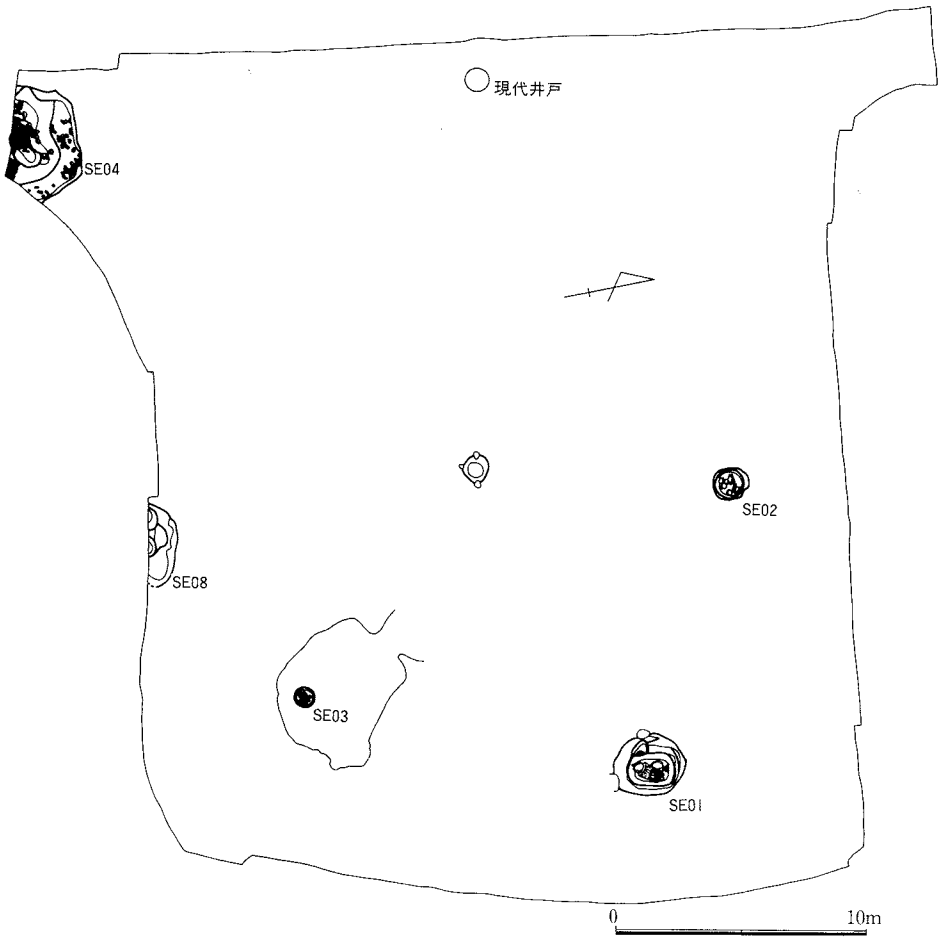


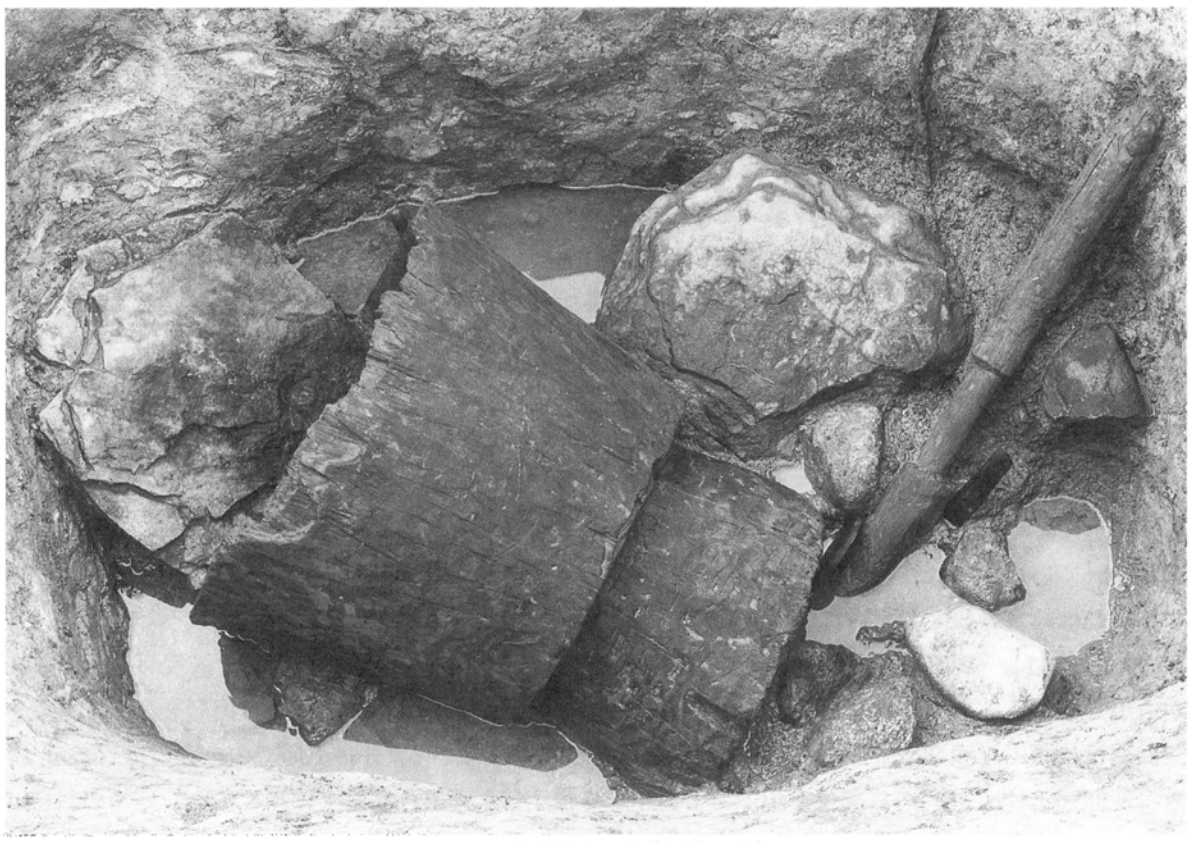
Fig. 9　第74次調査井戸配置図（縮尺1/300）

井戸の覆土は暗い茶褐色粘質土と灰色粘質土を主体としている。第１～４層までは明らかに埋めた土層をなす。又、それより以下の第30層までは、褐色土や八女粘土を含む層が多く、これらも又、意図的に埋められた層と考えられる。木製臼直上の第31層以下はヘドロ状の堆積層である。又、１層の下には第12層の炭化物層が存在する。この炭化物層は井戸祭祀の跡と考えられる。井戸覆土からは、土師器、須恵器、李朝陶器、瓦質土器、瓦等が出土しているが、量は少ない。しかし、井戸底からは、木製杵・臼・桶材が出土した。

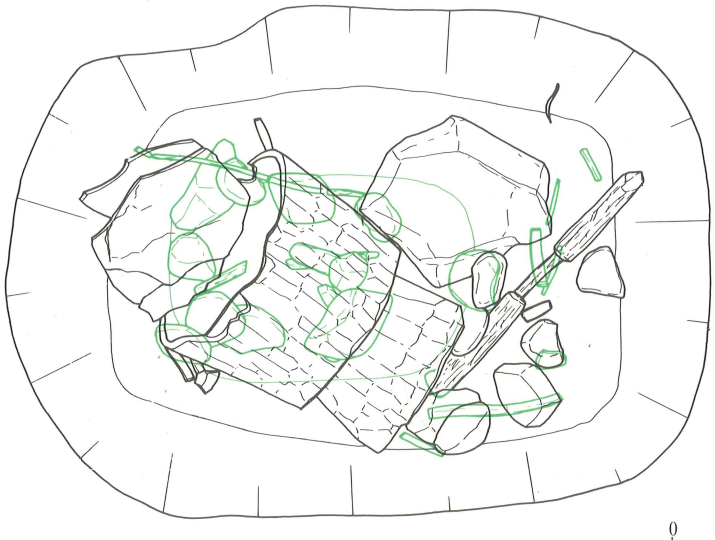
ここで特徴的なことには、臼・杵が横倒しの状態で井戸底に納められており、これらを固定するかのように玄武岩の板石や礫が押さえとして置かれていたことである。又、臼の中や底付近にも礫が詰めてあった。更にこの臼の３隅には桶の側板が１本ずつ立てられており、桶の底板は杵と共に臼の側に置かれていた。臼の外側には臼上部に巻きついた３本ほどの繊維質が確認できたが臼を安置する際に用いた植物質の紐と考えられる。

SE02 (Fig.11)　調査区の北側に位置している。上部は攪乱やトレンチにより削平を受け、八女粘土が表出している。素掘りの井戸で、井戸の平面形は、上面が不整楕円形、下面は円形を呈している。断面形は截頭円錐形を呈しているが、上部は２段掘りになっている。井戸上面での最大径は1.45m、深さは2.0mを測る。井戸の底部は平坦である。井戸の覆土は、真黒色粘質土に径５cmぐらいのの白色八女粘土ブロックを多く含んだ土層を主体とする。この層は大きな変化はなく、間層に砂層が存在することやブロック土の落ち込み状態などで数層に分離することが可能である。又、上面から深さ40～60

井戸SE01（西から）

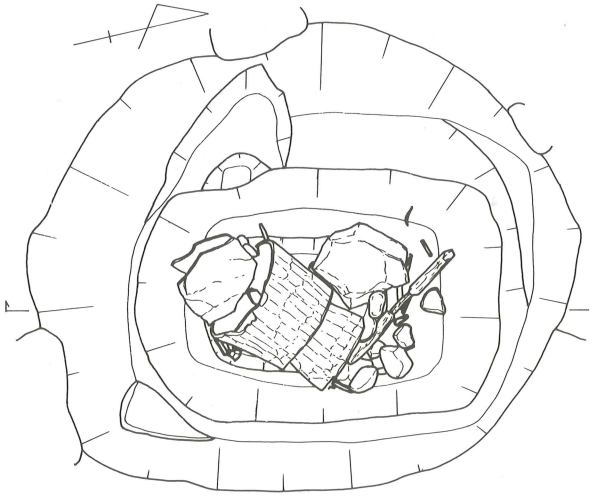


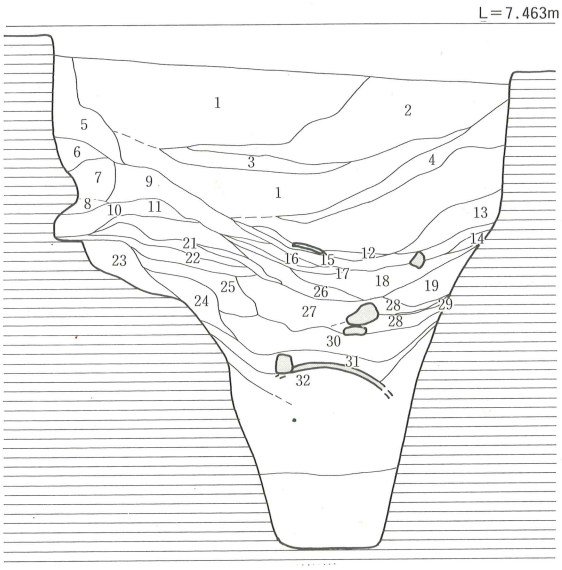
井戸SE01内遺物出土状態（東から）

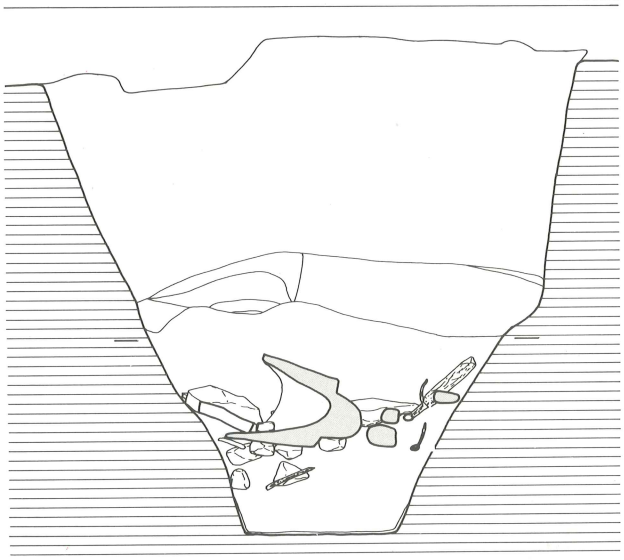


SE01土層名称
1.暗茶褐色粘質土に褐色ブロックをわずかに含む
2.暗茶褐色粘質土に褐色土に少ブロック含む
3.1に褐色土ブロック含む
4.暗茶褐色粘質土に褐色土に小ブロック含む
5.黒色土に黄褐色土ブロックをわずかに含む
6.黒色土に黄褐色土ブロック多量に含む
7.黄褐色土ブロック
8.黒色土に黄褐色土ブロック多量に含む
9.黒色粘質土と暗茶褐色粘質土の混合土
10.やや灰色を帯びた暗茶褐色粘質土
11.黒褐色粘質土と暗灰色粘質土の混合土
12.炭化物層(黒色)
13.褐色土に暗灰色土混入
14.褐色土に暗灰色土混入
15.暗灰褐色土層

0 1m







16.15に暗灰褐色と褐色土粒子含む
17.16と同じ、16との間に茶褐色薄い層がある
18.15に黄褐色土粒子含む
19.褐色土に暗灰色土混入
20.暗灰色粘質土
21.黄褐色粘質土に黒色土含む。
22.暗灰色粘質土
23.暗黄褐色粘質土に八女粘土含む
24.暗黄褐色粘質土ブロック
25.21よりやや黒色多い
26.15に茶褐色土と黄褐色土粒子多く含む
27.15に茶褐色土粒子含む
27.15に褐色土ブロック少し含む
29.褐色土に暗灰色土混入
30.やや明るい暗灰色粘質土に黄灰色土と黒色土のブロックを含む
31.暗灰色粘質土、黒に近い(ヘドロ状)
32.30より暗い(ヘドロ状)

0 2m

Fig.10　井戸SE01実測図（縮尺1/20・1/40）

井戸ＳＥ01土層状態（南から）

井戸ＳＥ01遺物出土状態（西から）

井戸ＳＥ01遺物出土状態（南から）

井戸ＳＥ01臼内部の状態（南から）

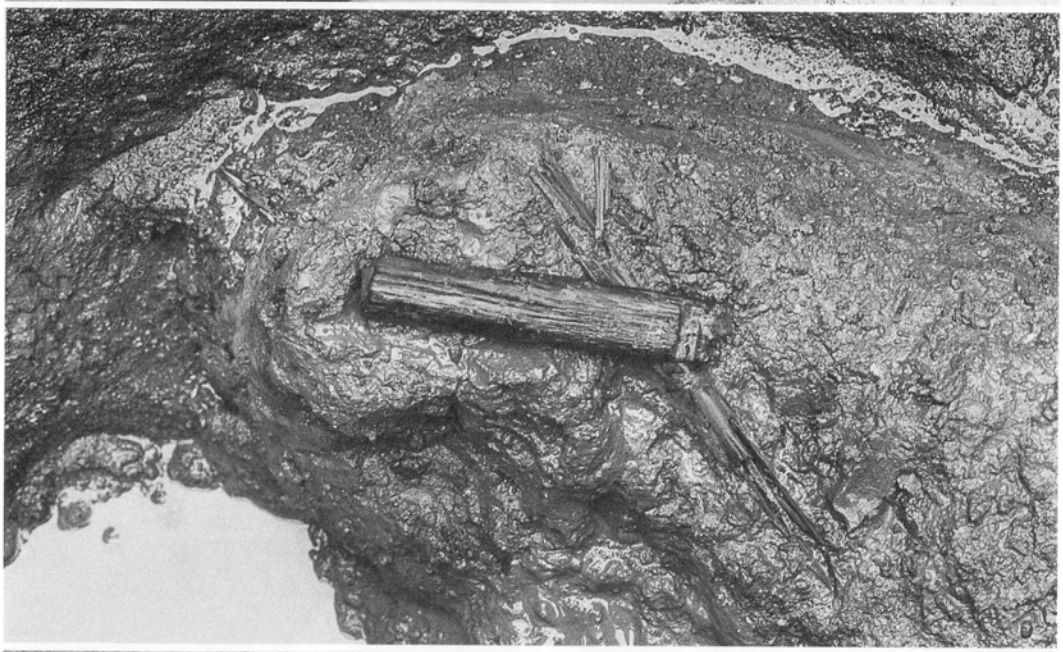
井戸SE01桶底板出土状態（西から）

井戸SE-01杵出土状態（東から）

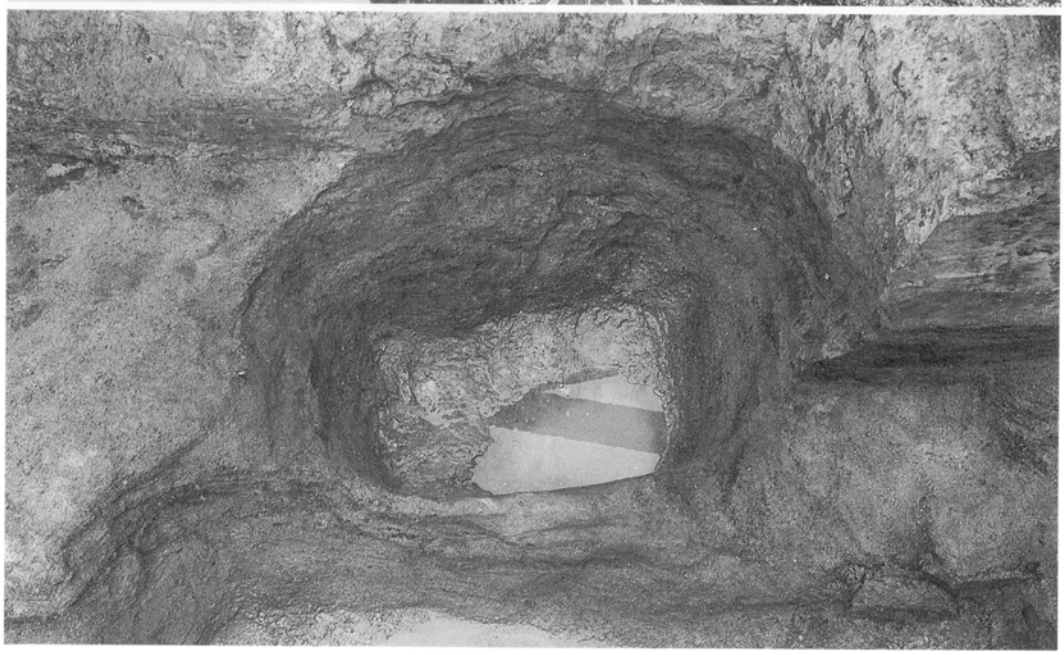
井戸SE01桶側板出土状態（東から）

井戸SE01遺物出土状態（南から）

井戸SE01臼に巻きついた紐状繊維状態（東から）



井戸SE01木製品出土状態



井戸SE01井戸底の状態（東から）

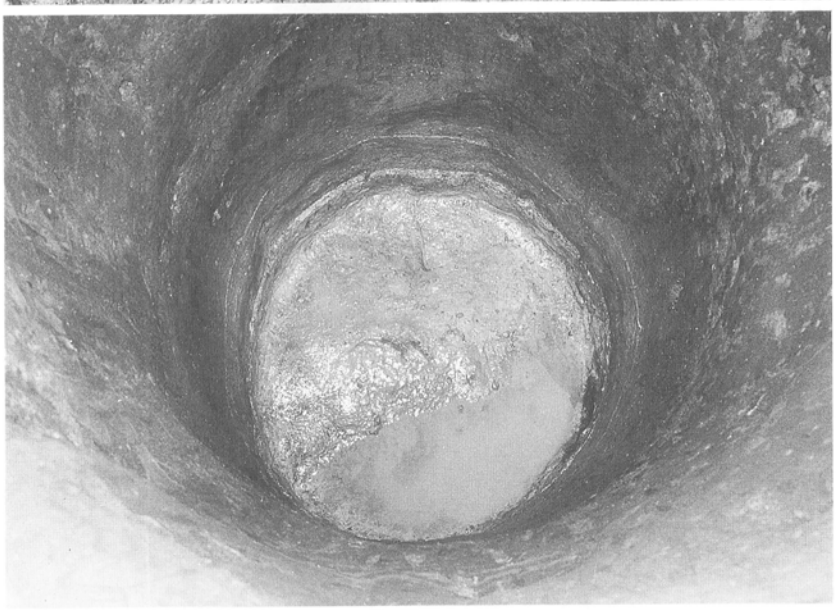
cmにおいてレンズ状に堆積した砂層があり、更に、深さ150cm前後には摺鉢状態に落ち込んだ粘土ブロックの層がある。井戸の中位から底部までの間に、壷や甕の完形品や木製品が埋置されており、水神祭りの状況を示している。井戸の中位・下位・底部の３ヶ所から弥生土器の完形品が出土している。

SE03（Fig.12）　調査区の東側に位置している。大きな攪乱壙のため上部は著しく削平されている素掘りの井戸で、井戸の平面形は、上面と底面ともに楕円形を、断面形は円筒状を呈している。

井戸上面での最大径は75cm、深さは77cmを測る。井戸の底部は平坦であるが、底には径８～25cm程度の礫を用いて約30cmの厚さに充塡している。井戸の覆土は暗い茶褐色粘質土を主体としている。この礫内から宝篋印塔片、石臼片が出土している。他に土器の出土はない。

SE04（Fig.13）　調査区の南側境界地に位置しているため全体の形状は不明である。上部は削平を受け、更に近世の溝や土壙と切り合うために上部の形状が著しく変形している。素掘りの井戸で底

井戸ＳＥ02（西から）



井戸ＳＥ02完掘状態（西から）

井戸ＳＥ02遺物出土状態（東から）

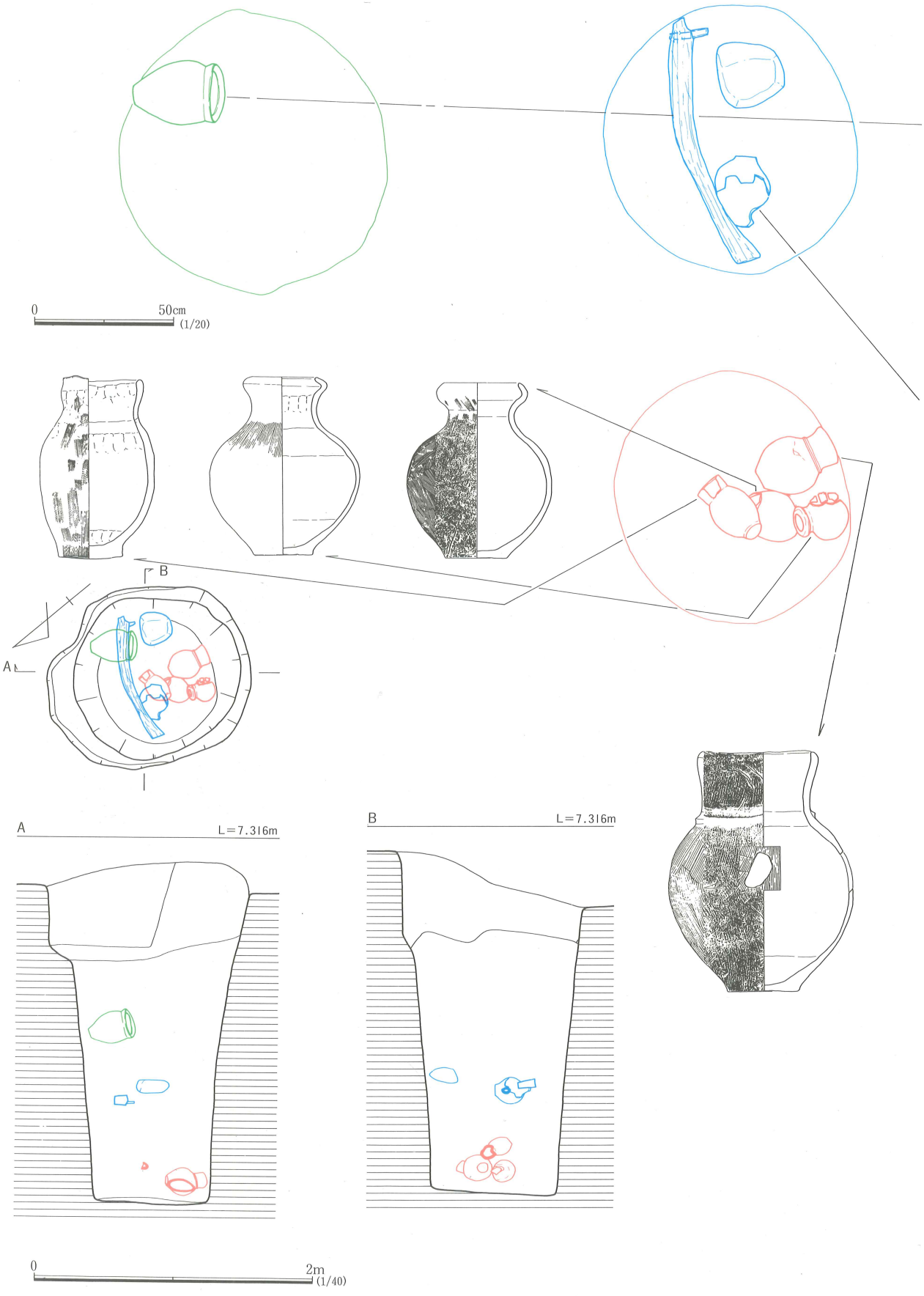
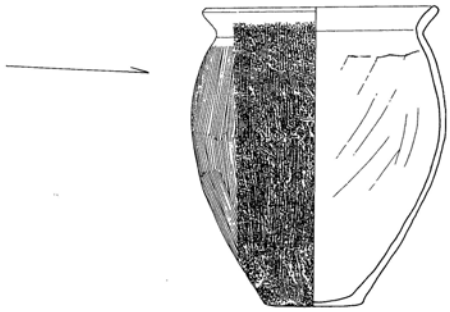
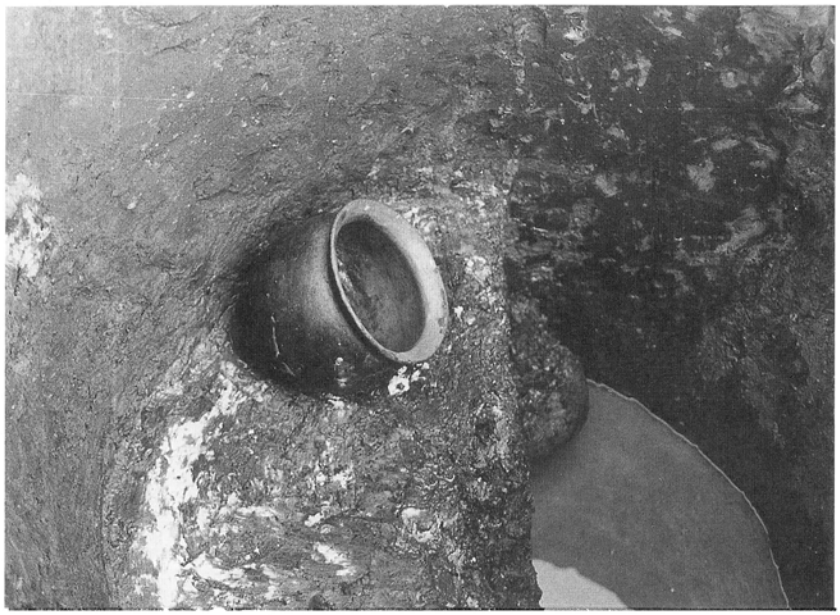
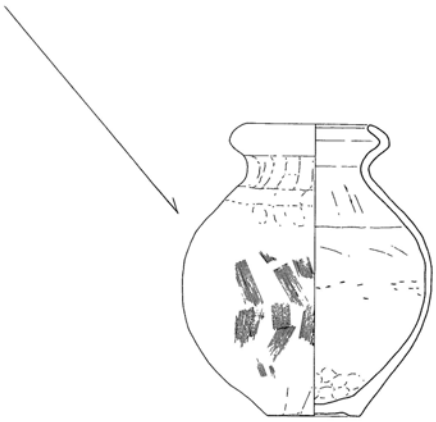


Fig.11　井戸SE02実測図（縮尺1/20・1/40）





井戸SE02遺物出土状態（西から）



井戸SE02遺物出土状態（南から）

は浅い。井戸上面の平面形は不整楕円形を、断面形は逆悌形を呈しているが、北側側壁は階段状を呈している。

井戸上面の最大径は4.5m、深さは2.0mを測る。井戸底部には直径約52cm、深さ23cmを測る円形の掘り込みがある。ここに曲物を設置していたものと考えられる。又、北側と西側の壁において、木杭を３ヶ所検出した。西側の１本は井戸底に打ち込まれているところから、井側が存在したことを想定できる。

井戸の覆土は暗い茶褐色粘質土を主体としている。井戸上面から底までに径10～20cmの礫が投げ込まれており、特に西側からの礫の流れ込みは、厚く堆積している。これは埋め戻しの際の塡圧と考えられる。井戸底には木桶が横倒しで出土した。

覆土から土師器、須恵器、備前焼鉢、瓦質土器、板碑、砥石、木槌、木桶(結桶)材等が出土している。

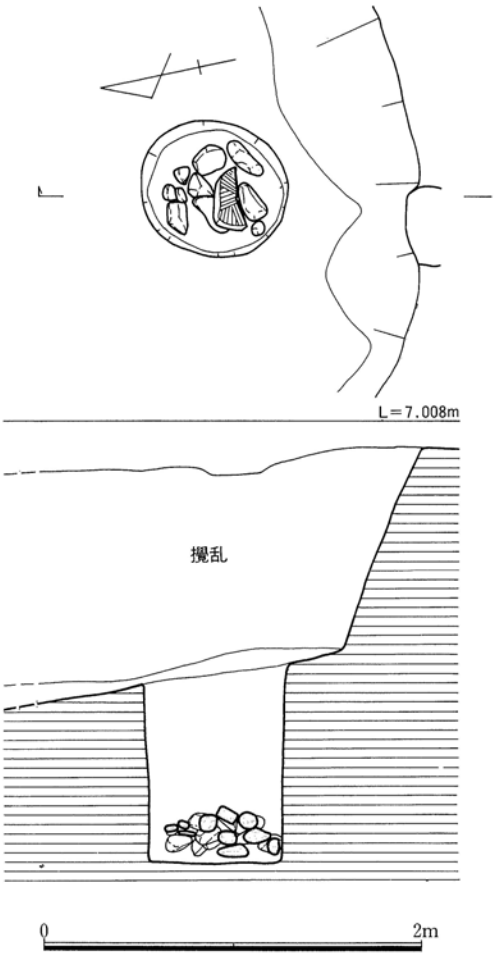
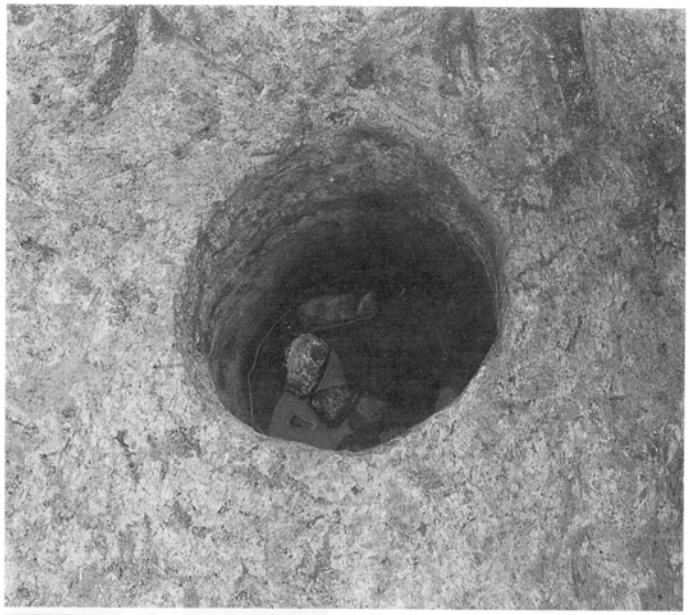


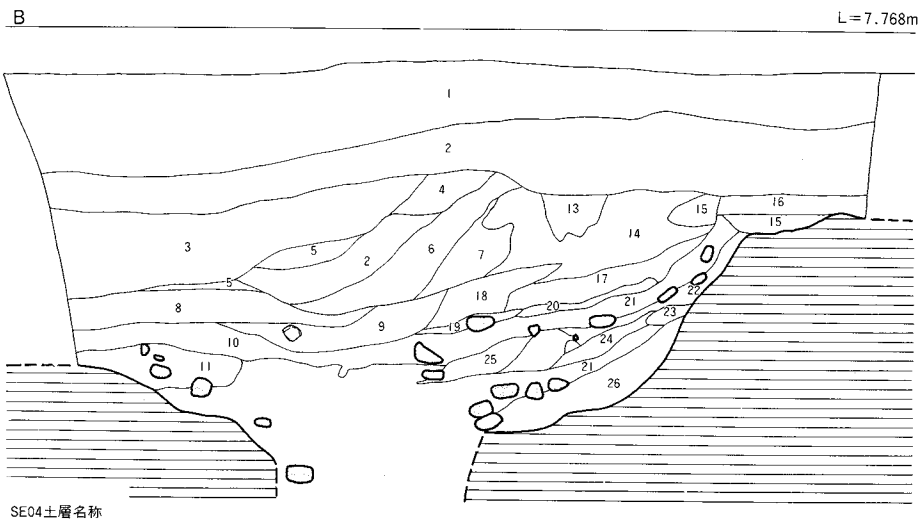
Fig.12　井戸SE03実測図（縮尺1/40）



井戸SE03（北から）

井戸SE03（南西から）

井戸SE04（北から）



SE04土層名称

1.表土
2.淡茶褐色粘質土
3.2より少し明るい
4.茶褐色粘質土に灰白色八女粘土ブロック混入
5.茶褐色粘質土と八女粘土の混合土
6.八女粘土層に淡茶褐色粘質土混入
7.茶褐色粘質土に八女粘土ブロック砂層混入
8.淡灰褐色粘質土
9.灰褐色砂質土
10.暗灰色粘質土
11.10(鉄分沈殿層)
12.黒灰色粘質土
13.黄白色砂層
14.青灰色砂層
15.灰褐色粘質土
16.灰褐色～暗灰色砂質土
17.灰白色粘質土に黄白色粘土ブロック混入
18.3に木炭含む
19.暗灰色粘土
20.灰白色砂層
21.茶褐色粘質土
22.暗灰色砂質土
23.八女粘土と灰褐色土の混合土
24.23より粘土が多い
25.暗茶灰色粘土
26.淡黄灰色砂層

Fig.13　井戸SE04実測図（縮尺1/40）

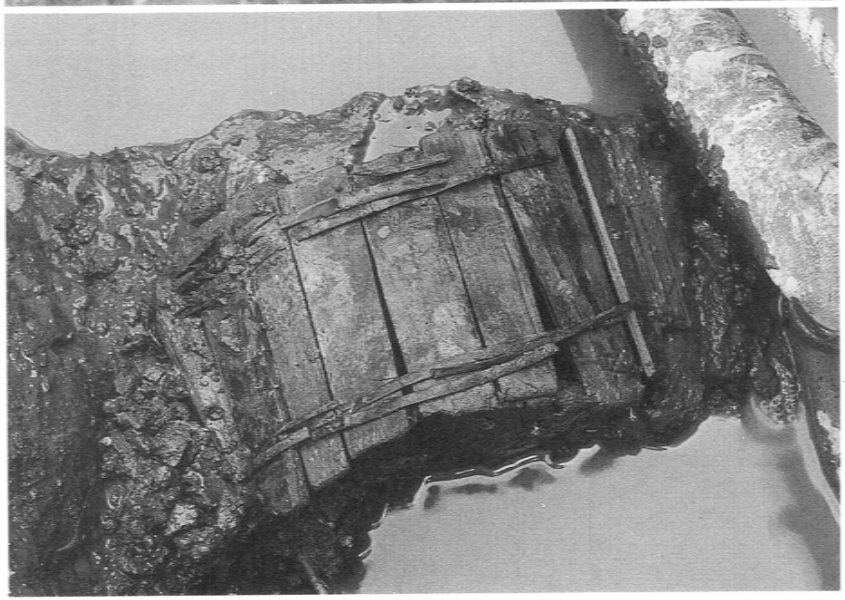
井戸SE04土層状態（北から）

井戸SE04完掘状態（北から）

井戸SE04桶槌出土状態（南から）

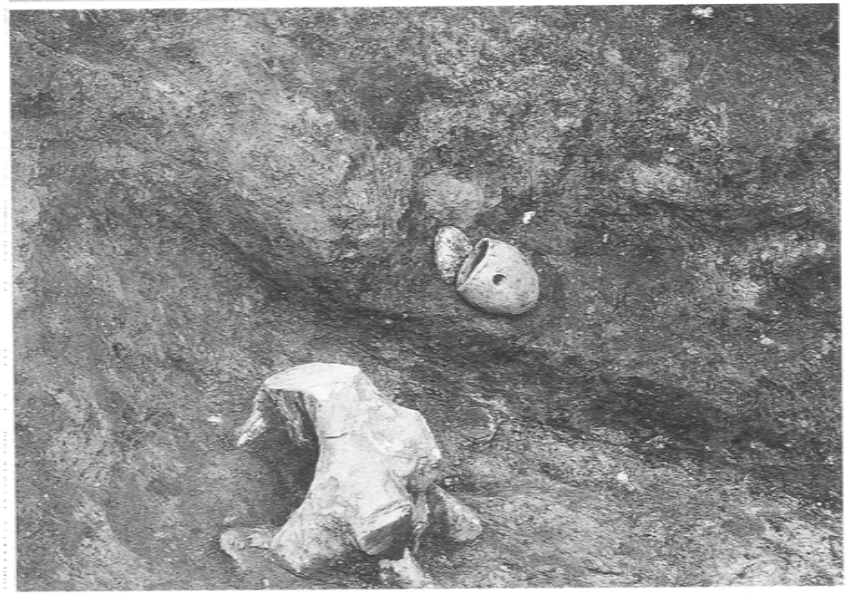
井戸SE04木杭出土状態（東から）

井戸ＳＥ04桶・槌出土状態（北から）



井戸ＳＥ04桶出土状態（東から）

井戸ＳＥ08土層状態（北から）



井戸ＳＥ08遺物出土状態（北から）

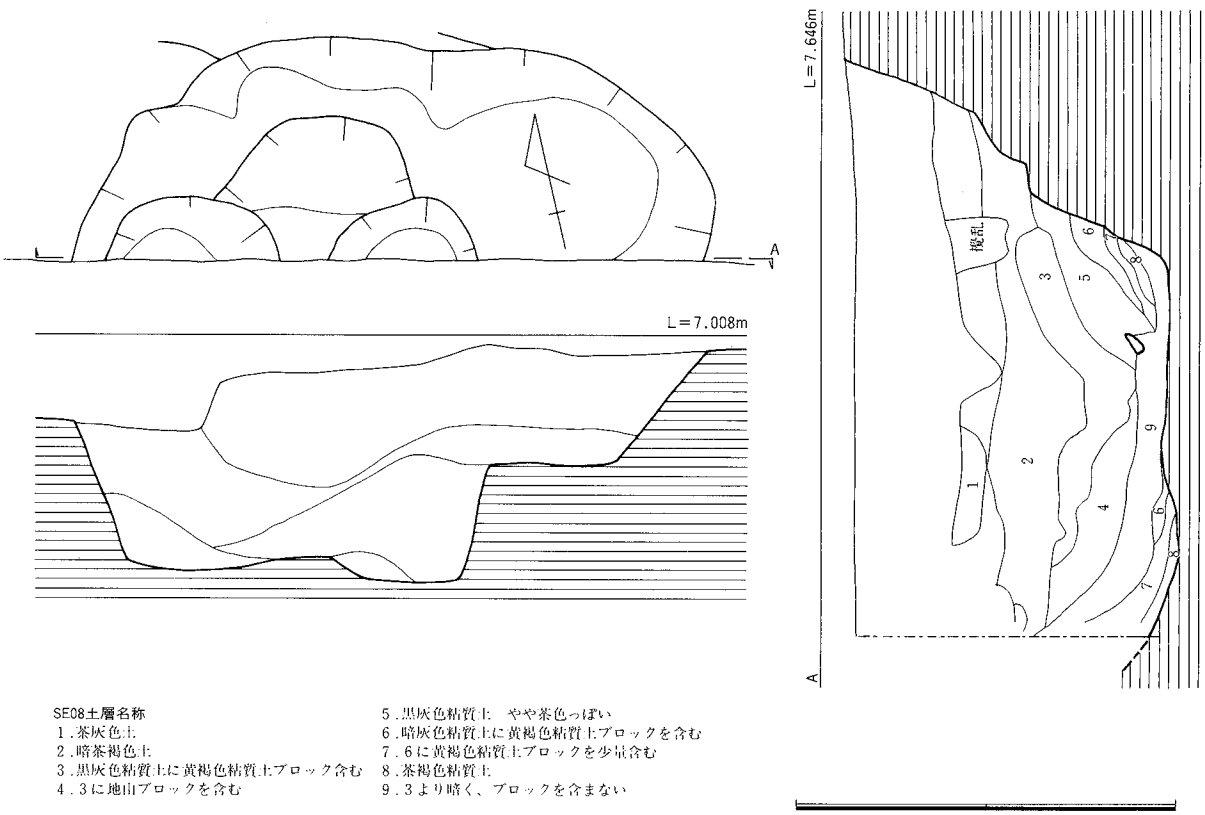


Fig.14　井戸SE08実測図（縮尺1/40）

SE08（Fig.14）　調査区の南側に位置しているため、全体形は不明である。上部攪乱のため形状が著しく変形している。素掘りの井戸で、井戸上面の平面形は不整楕円形を、断面形は逆悌形で、北側は2段掘りとなっている。井戸上面での最大径は3.3m、深さは0.6mを測る。井戸底部は平坦であるが、中央に径74cmの浅い円形の掘り込みを有している。井戸の覆土は黒褐色粘質土を主体としており、井戸覆土から土師器、蛸壷、砥石等が出土している。

(3)　井戸出土遺物　(Fig.15～24)

SE01出土遺物(1～10)　1は弥生土器の蓋形土器片、2は縄蒂文の叩きをもった陶質土器である。3は李朝三島手の碗、4は瓦質土器の摺鉢である。5は平瓦で、内外面ナデ調整である。叩きはみられない。6は砂岩製の砥石である。7～9は木桶の側板（榑）で、いずれも木製臼の三方に立てられていたものである。10は同じく木桶の底板で、7～9と組合せのものである。11は木製の杵で、完形品である。長さ約163cmを測る。12は木製の臼で、ほぼ完形である。胴くびれの臼で、台は台形状に開く。内底は補修のため木片の寄せ木作りの詰物がしてある。高さ約66.5cm、臼の口径約60cm底径45.5cmを測る。材はアカマツであろう。その他には、用途不明製品などが出土している。

SE02出土遺物(13～35)　13は井戸中位、14は井戸下位、15･16･21･22は底部から出土した。14～19･21･22は壷型土器で、いずれも平底である。14～17の口縁部は袋状を呈し、14･16の口縁部の袋部は外面に強い稜を持っている。17の口縁部の袋部は退化傾向があり、21･22では口縁部がわずかに内弯するほどに退化している。22の胴部中位には穿孔がある。13･20は甕で、口縁部は緩やかに外反し、端部は丸味をもっている。胴部の内外面はヘラケズリ状の調整で、タテ方向の強いナデを施している。

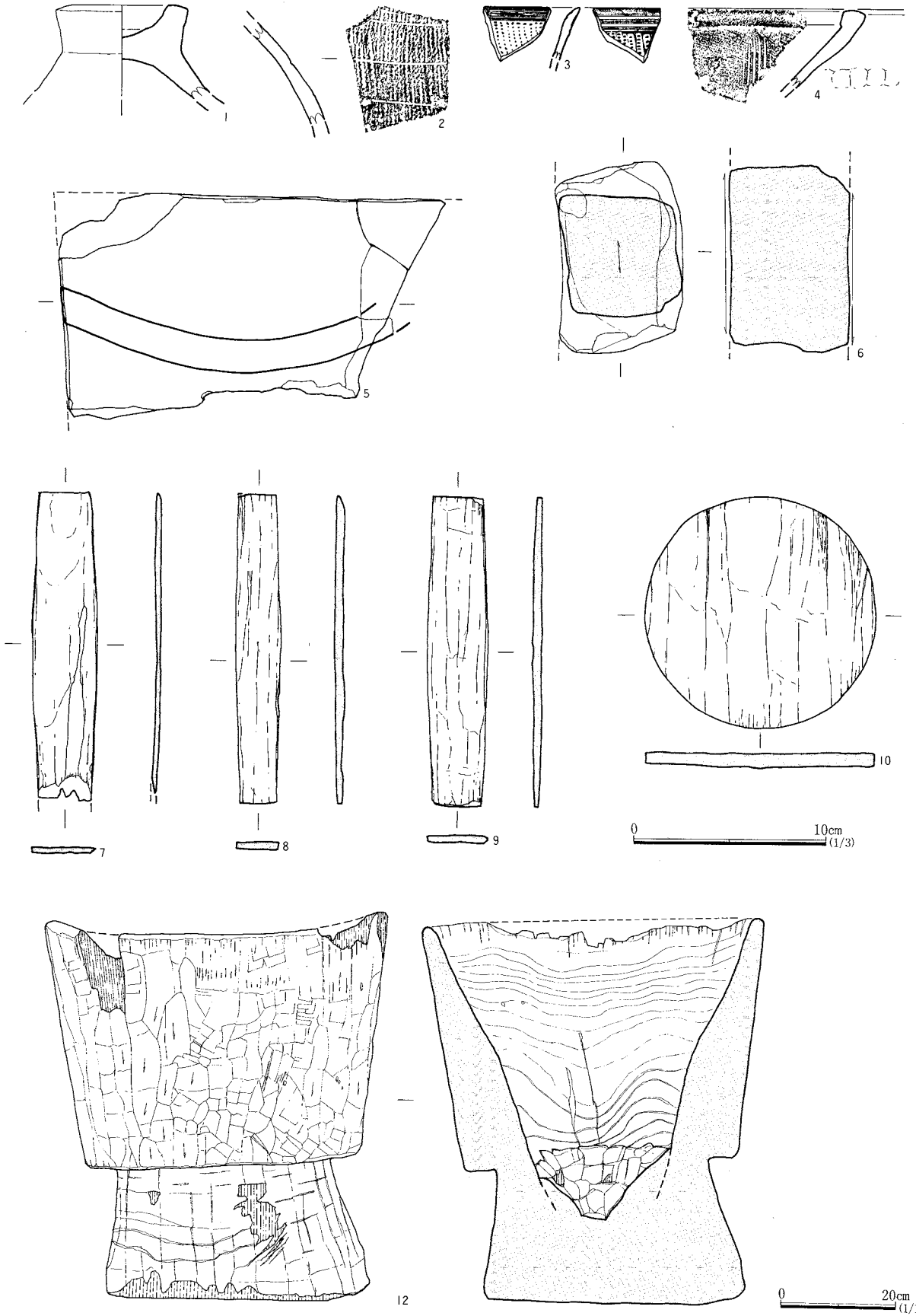
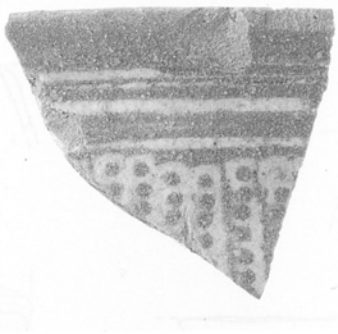
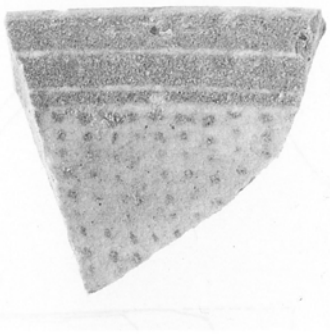


Fig.15　井戸SE01出土遺物実測図（縮尺1/3・1/10）

2

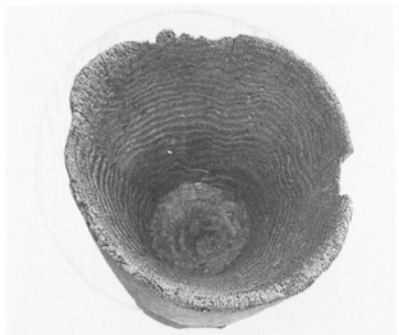

3

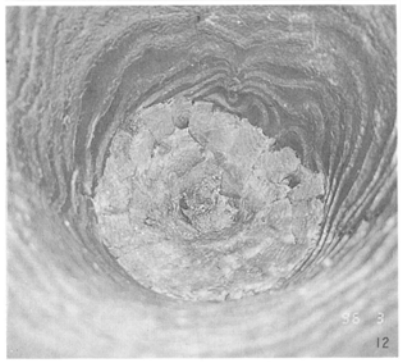

3

4

6

10


12


12

12

13

15

16

井戸SE01・SE02出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する。

Fig.16　井戸SE02出土遺物実測図①（縮尺1/3）

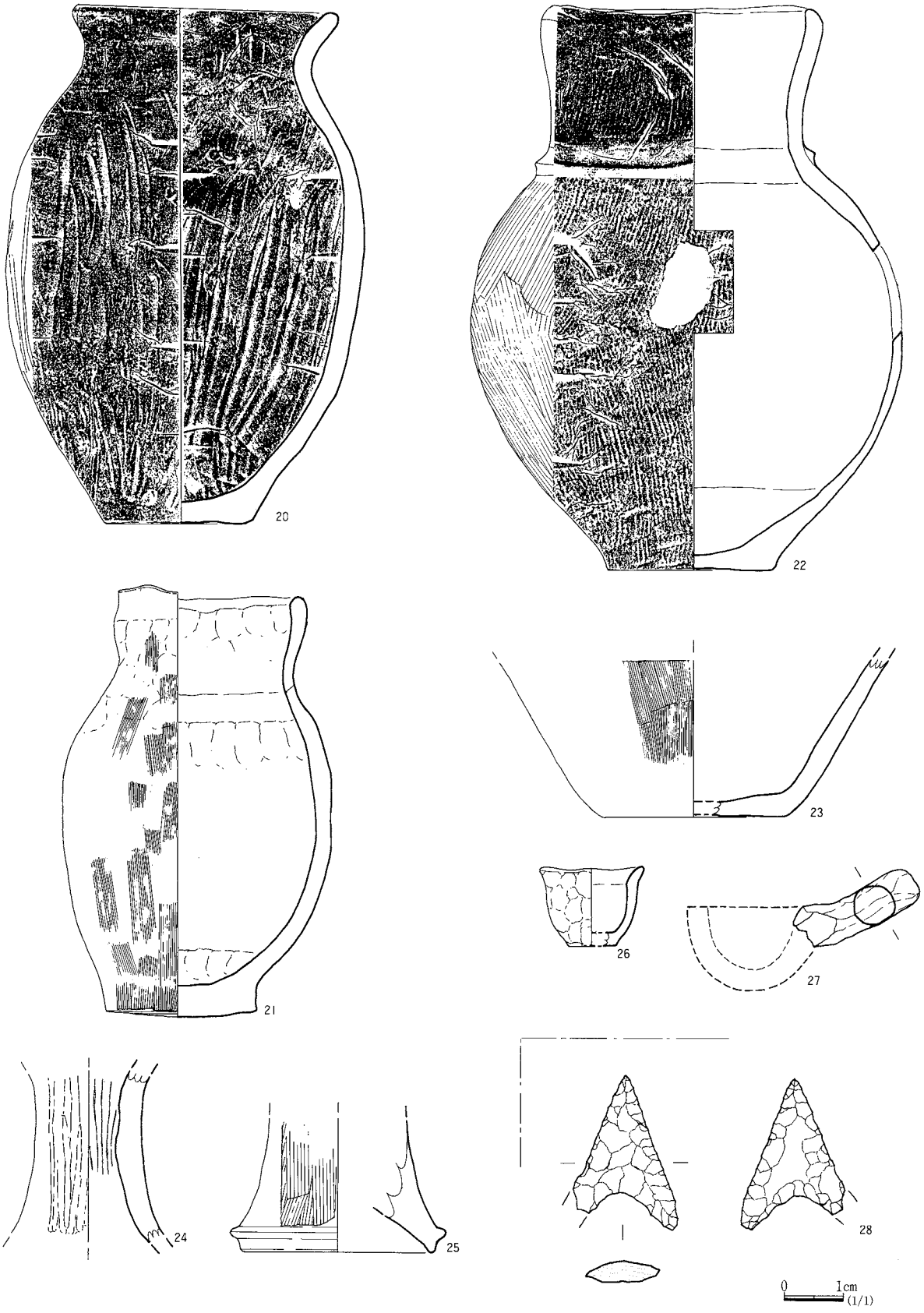


Fig.17　井戸SE02出土遺物実測図②（縮尺1/1・1/3）

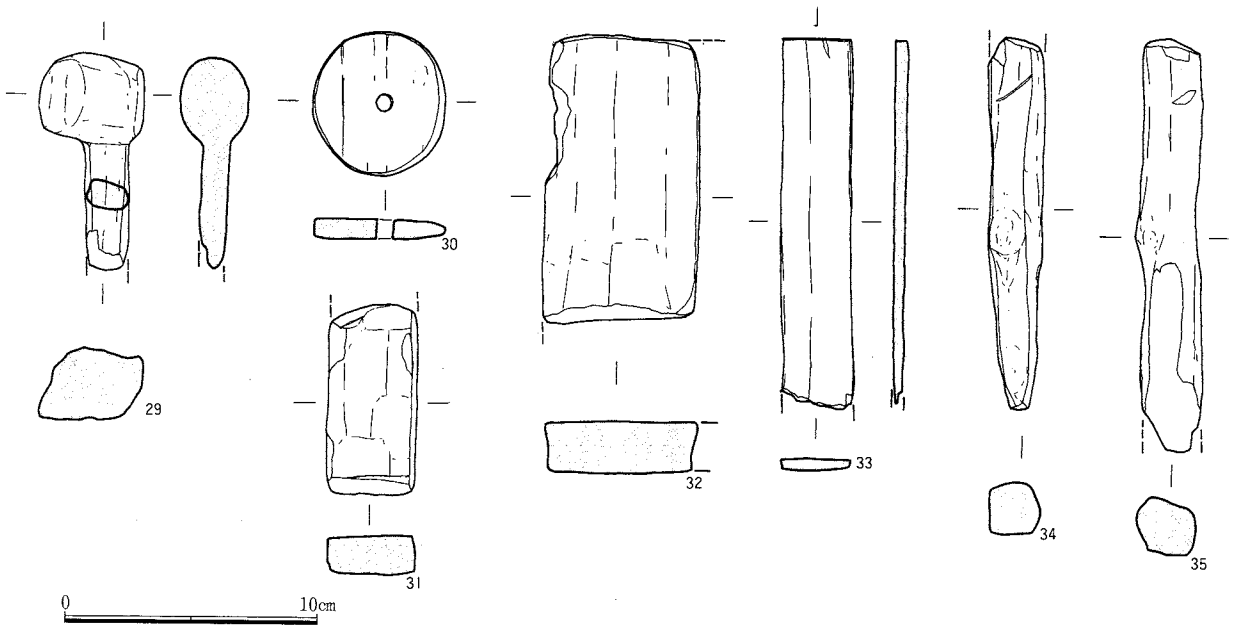


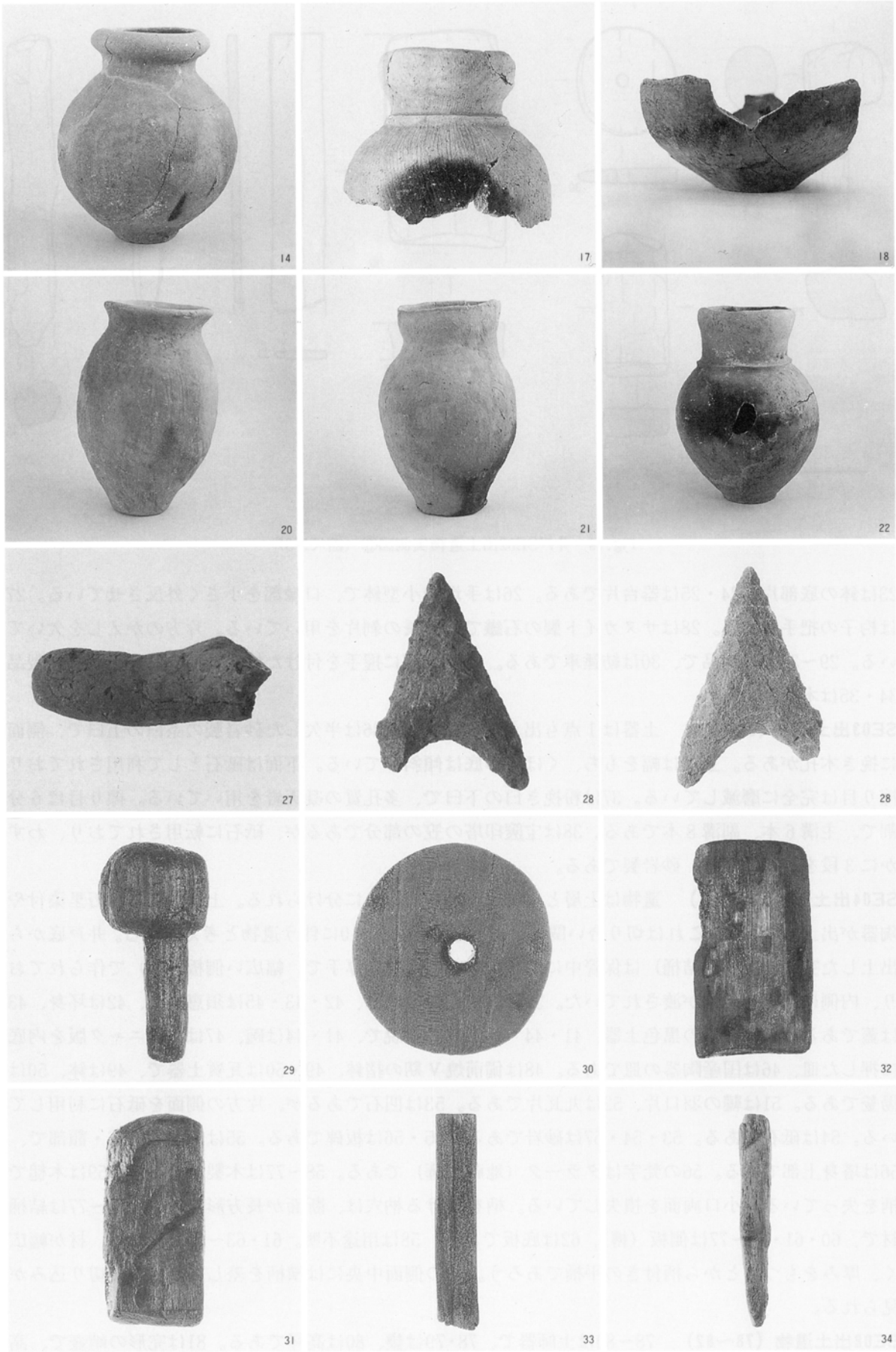
Fig.18　井戸SE02出土遺物実測図③（縮尺1/3）

23は鉢の底部片、24・25は器台片である。26は手埦の小型鉢で、口縁部を小さく外反させている。27は杓子の把手である。28はサヌカイト製の石鏃で、横長の剥片を用いている。片方のかえしを欠いている。29～35は木製品で、30は紡錘車である。29は上部に握手を付けた棒状製品、31～33は板状製品、34・35は木杭である。

SE03出土遺物（36～38）　土器は1点も出土していない。36は半欠した砂岩製の茶臼の上臼で、側面に挽き木孔がある。上縁は幅をもち、くぼみの底は傾斜している。下面は砥石として利用されており、擦り目は完全に磨滅している。37は粉挽き臼の下臼で、多孔質の凝灰岩を用いている。擦り目は6分割で、主溝6本、副溝8本である。38は宝篋印塔の笠の部分であるが、砥石に転用されており、わずかに3段を残している。砂岩製である。

SE04出土遺物（39～77）　遺物は上層と中層以下からの出土に分けられる。上層からは伊万里染付や陶器が出土しており、これは切り合い関係にある近世溝のSD10に伴う遺物と考えられる。井戸底から出土した完形の木桶（結桶）は保管中に紛失した。この桶は厚手で、幅広い側板（榑）で作られており、内側には把手の柄が渡されていた。39は弥生土器の底部、42・43・45は須恵器で、42は坏身、43は蓋である。40は内黒の黒色土器、41・44・47は伊万里焼で、41・44は碗、47はコンニャク版を内底に押した皿、46は国産陶器の皿である。48は備前焼Ⅴ期の摺鉢、49・50は瓦質土器で、49は鉢、50は湯釜である。51は鞴の羽口片、52は丸瓦片である。53は凹石であるが、片方の側面を砥石に利用している。54は砥石である。53・54・57は砂岩である。55・56は板碑である。55は山形の首部・額部で、56は塔身上部である。56の梵字はタラーク（地蔵菩薩）である。58～77は木製品である。59は木槌で、柄を失っている。小口両面を損失している。柄を付ける枘穴は、断面が長方形である。60～77は結桶材で、60・61・63～77は側板（榑）、62は底板である。58は用途不明。61・63～69の側板は、材が幅広く、厚みをもつことから柄付きの平桶であろう。69の側面中央には横柄を差し込む枘穴の切り込みが見られる。

SE08出土遺物（78～82）　78～80は土師器で、78・79は甕、80は高坏である。81は完形の蛸壷で、高さ8.5cmである。82は泥岩製の砥石である。以上の土器は5世紀代の所産である。



井戸SE02出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する。

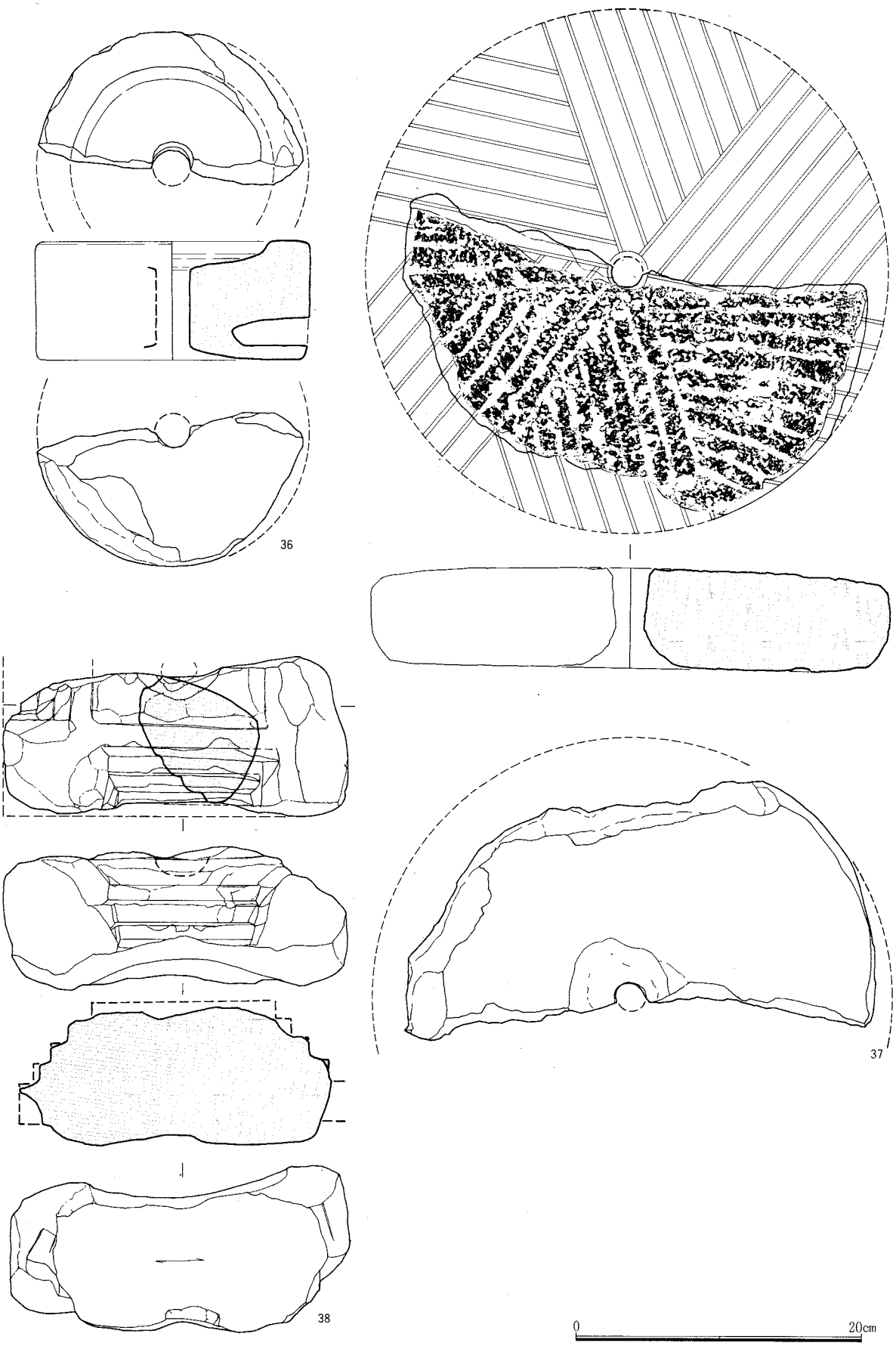


Fig.19　井戸SE03出土遺物実測図（縮尺1/4）

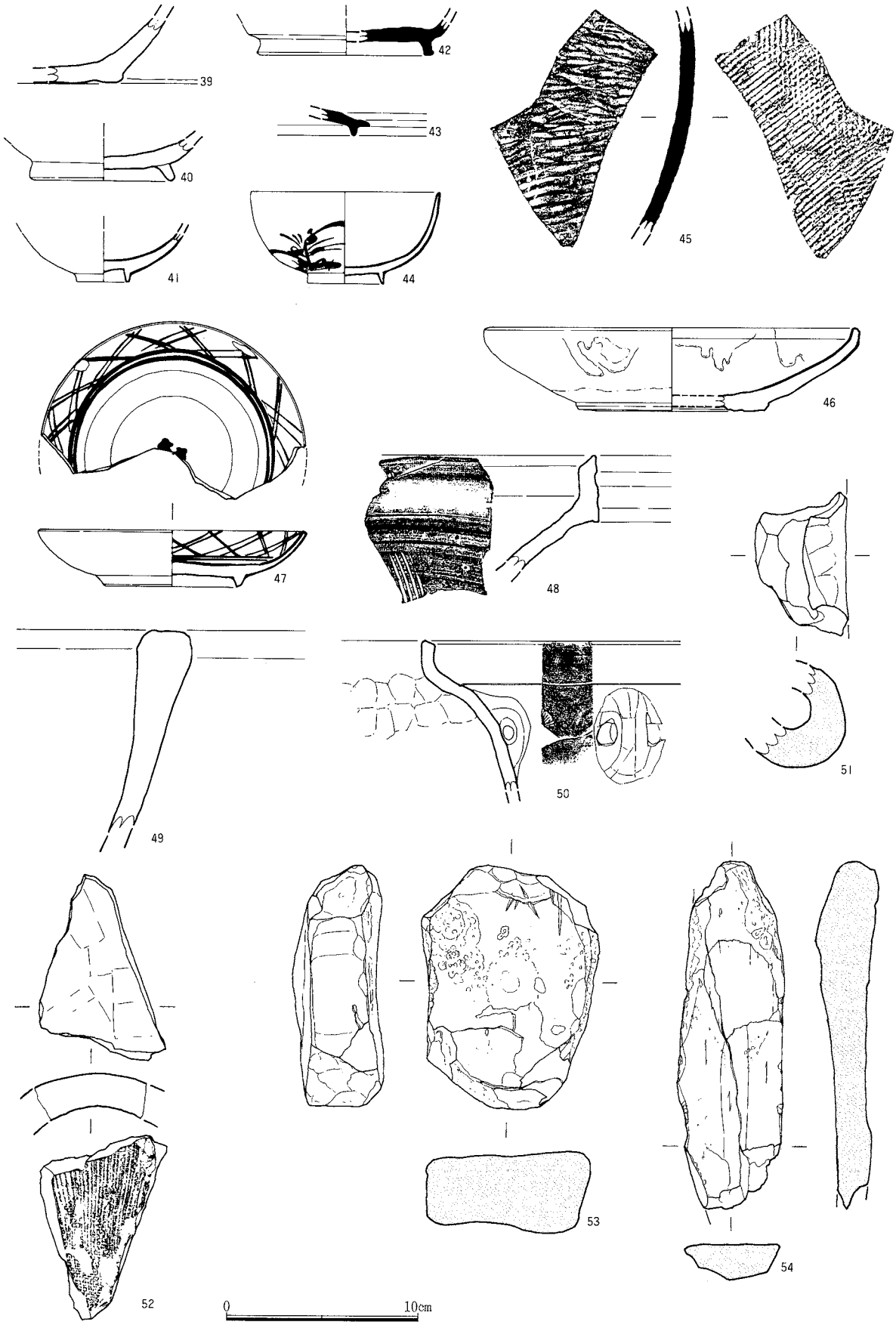
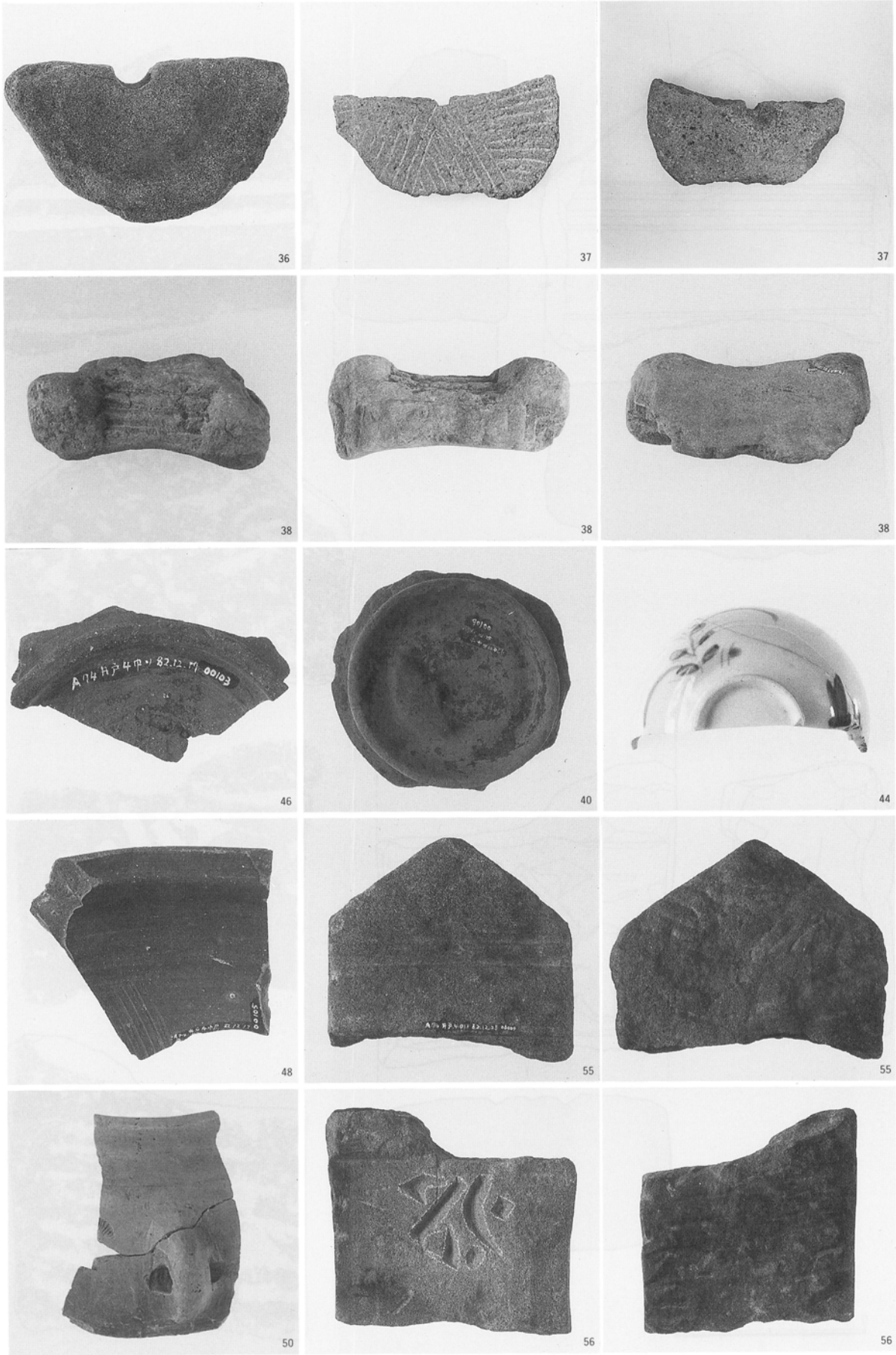


Fig.20　井戸SE04出土遺物実測図①（縮尺1/3）



井戸SE03・04出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する。

Fig.21　井戸SE04出土遺物実測図②（縮尺1/3）

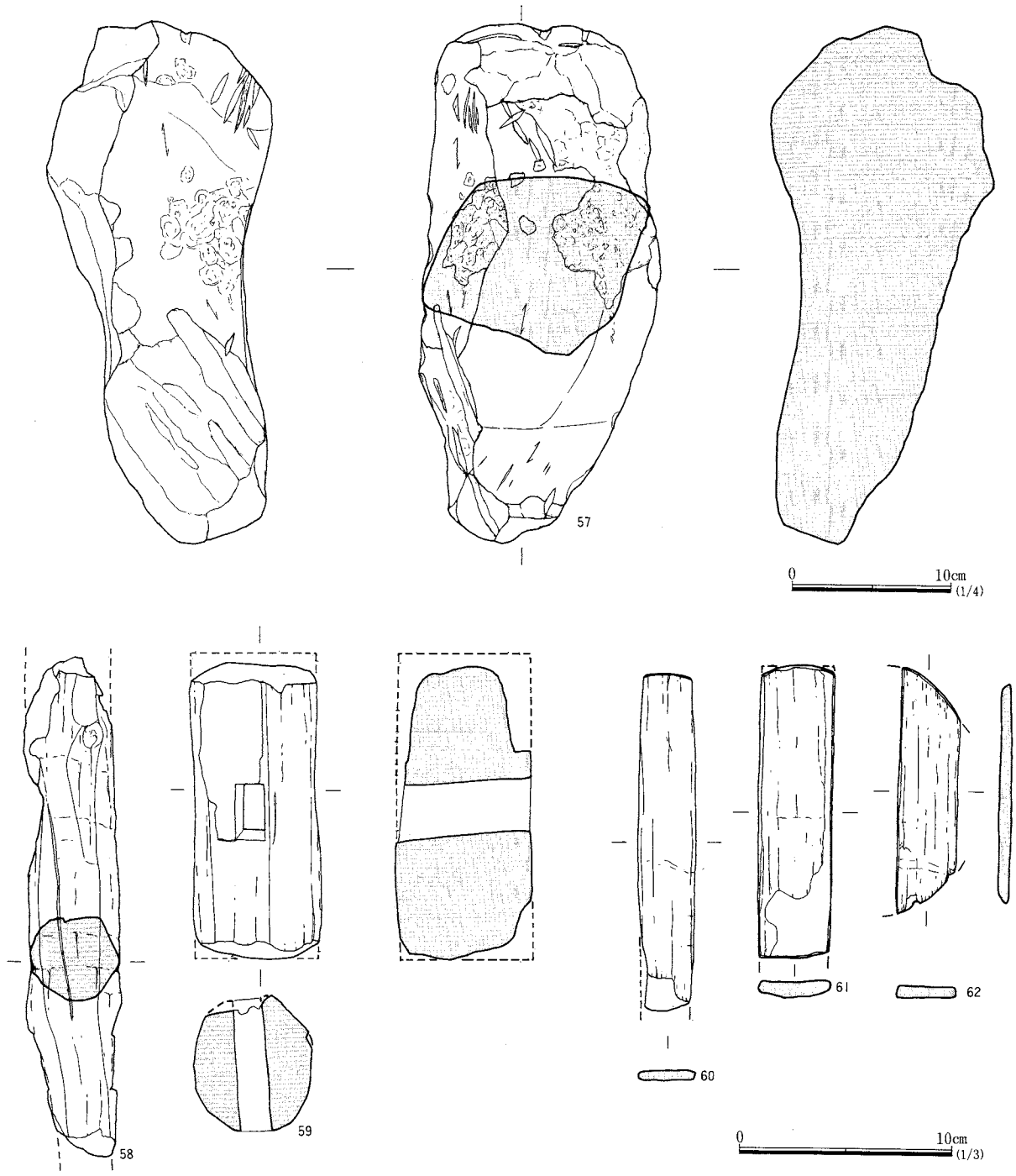
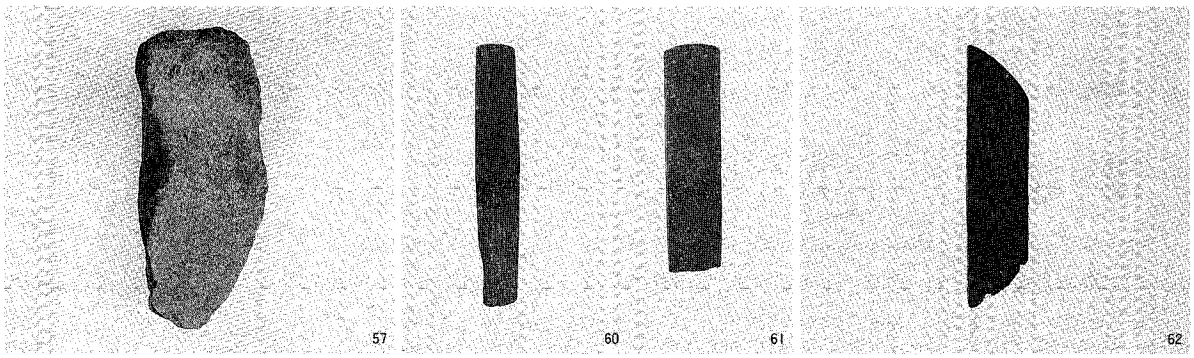


Fig.22　井戸SE04出土遺物実測図③（縮尺1/3）



井戸SE04出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する。

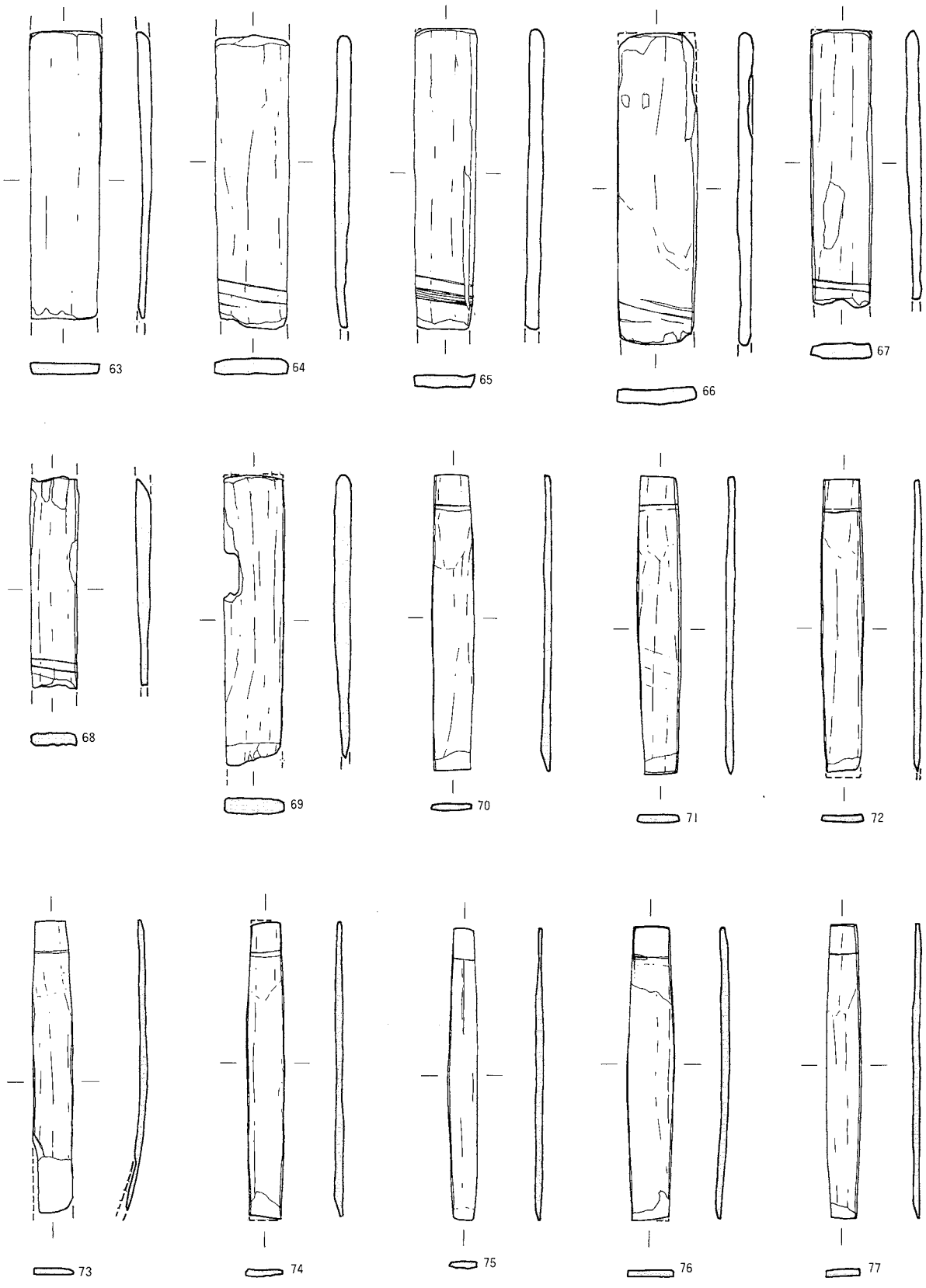
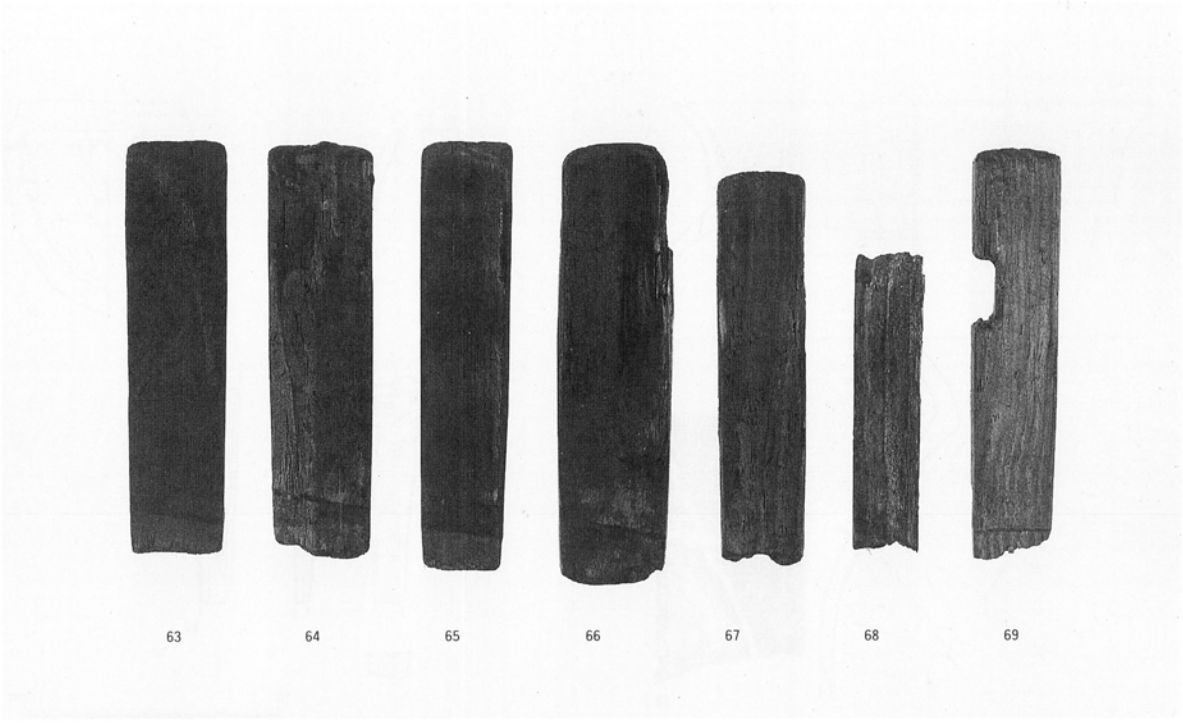
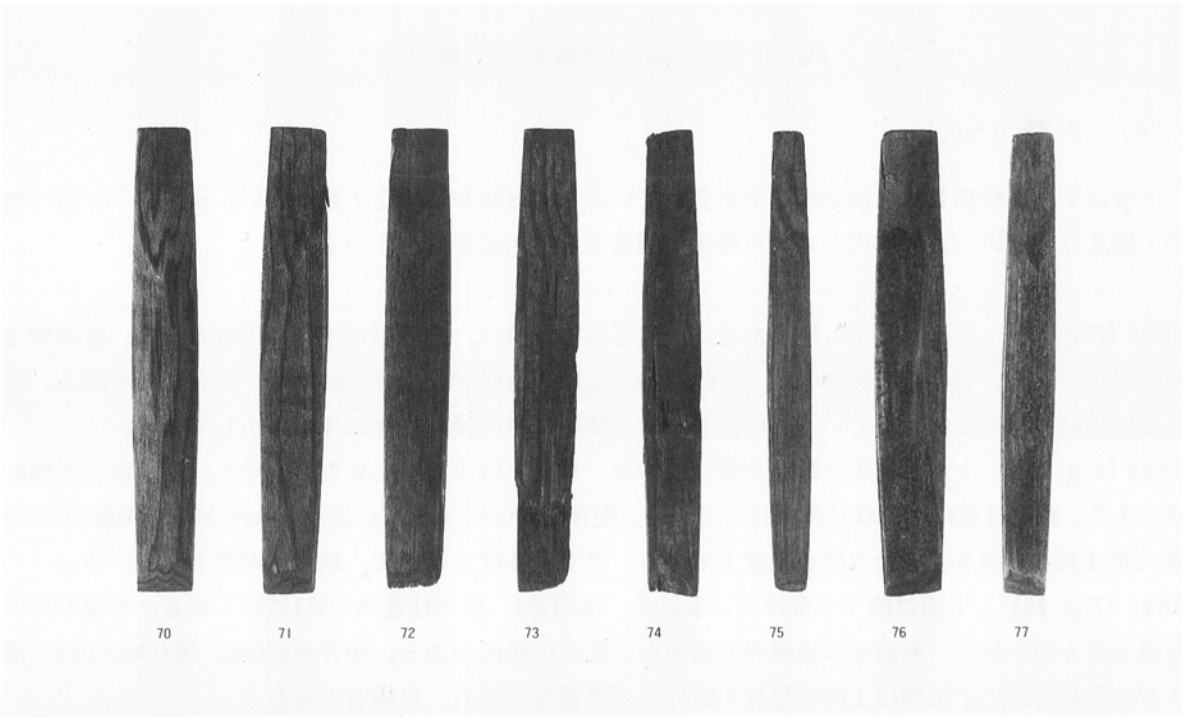
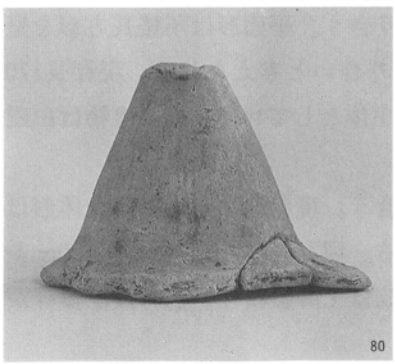
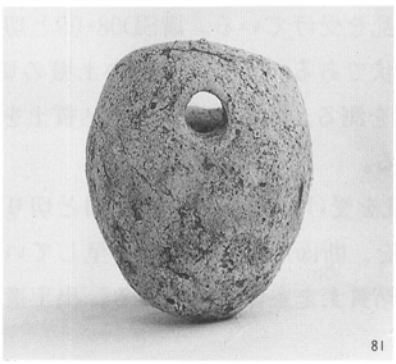


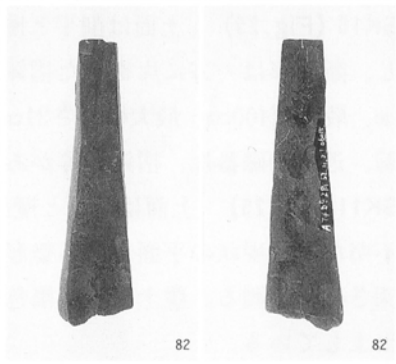
Fig.23　井戸SE04出土遺物実測図④（縮尺1/3）











井戸SE04・08出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する。

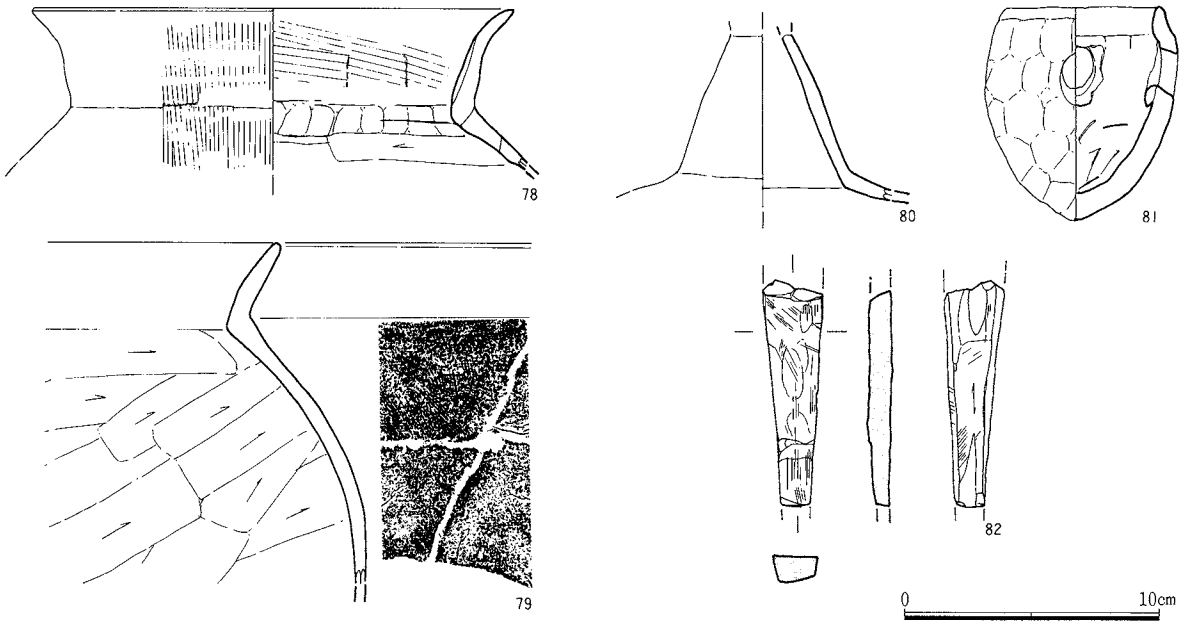


Fig.24　井戸SE08出土遺物実測図（縮尺1/3）

(4)　土壙（SK）

土壙は7基を検出した。削平や攪乱を受けているため形状が不明な土壙が多い。SK01・07・11の削平・攪乱は著しい。古墳時代から江戸時代に相当する時期幅をもっている。

SK04（Fig.25）　上面は削平と攪乱を受け、遺存状態は悪い。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は逆梯形状である。現存の長径230cm、短径177cm、底面の長径200cm、短径168cm、深さ40cmを測る。覆土は黒色粘質土を主体としている。出土遺物は土師器高坏・甕、須恵器片が出土している。

SK05（Fig.25）　上面は削平と攪乱を受けている。平面形は不整隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形状である。底部は更に摺鉢状に掘り込んでいる。現存長130cm、幅98cm、深さ47cmを測る。内底のPitの最大径は95cmを測る。覆土は黒色粘質土である。出土遺物は土師器片、鉄滓等が出土している。

SK07（Fig.25）　上面は削平を受けている。又、溝SD04、掘立柱建物SB11に切られる。平面形は不整隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形であるが、底面は起伏がある。現存長430cm、現存幅270cm、深さ37cmを測る。出土遺物は土師器甕片・甑片、須恵器片、砥石、黒曜石である。

SK10（Fig.25）　上面は削平と攪乱を受けている。溝SD08・09と切り合う。平面形は不整長方形を呈し、断面形は一方に片寄った摺鉢状である。元来は2つの土壙の切り合いと考えられる。現存長170cm、最大幅400cm、最大の深さ21cmを測る。覆土は暗い褐色粘質土を主体としている。出土遺物は白磁碗、近世陶磁器片、摺鉢片等がある。

SK11（Fig.25）　上面は削平と攪乱を受けている。井戸SE04と切り合う。境界地にあるため全体形は不明だが、現状の平面形は不整形を、断面形は逆梯形状を呈している。現存長262cm、最大幅100cm、深さ40cmを測る。覆土は暗い褐色粘質土を主体としている。出土遺物は土師器甕片、土師質土器等が出土している。

SK12（Fig.26）　調査区北西側の当該地の出入口付近で検出した。上面は削平と攪乱を受けている。

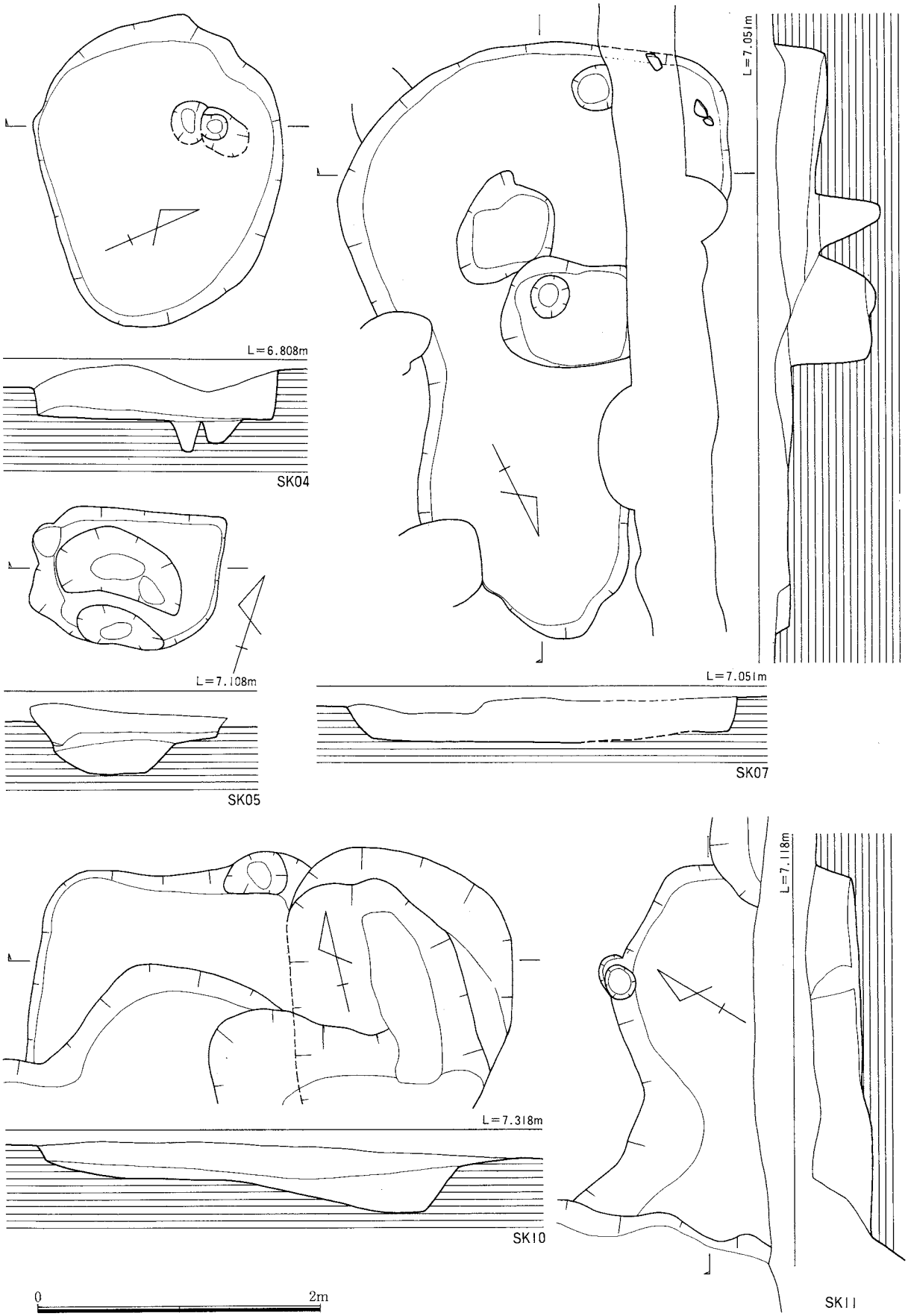
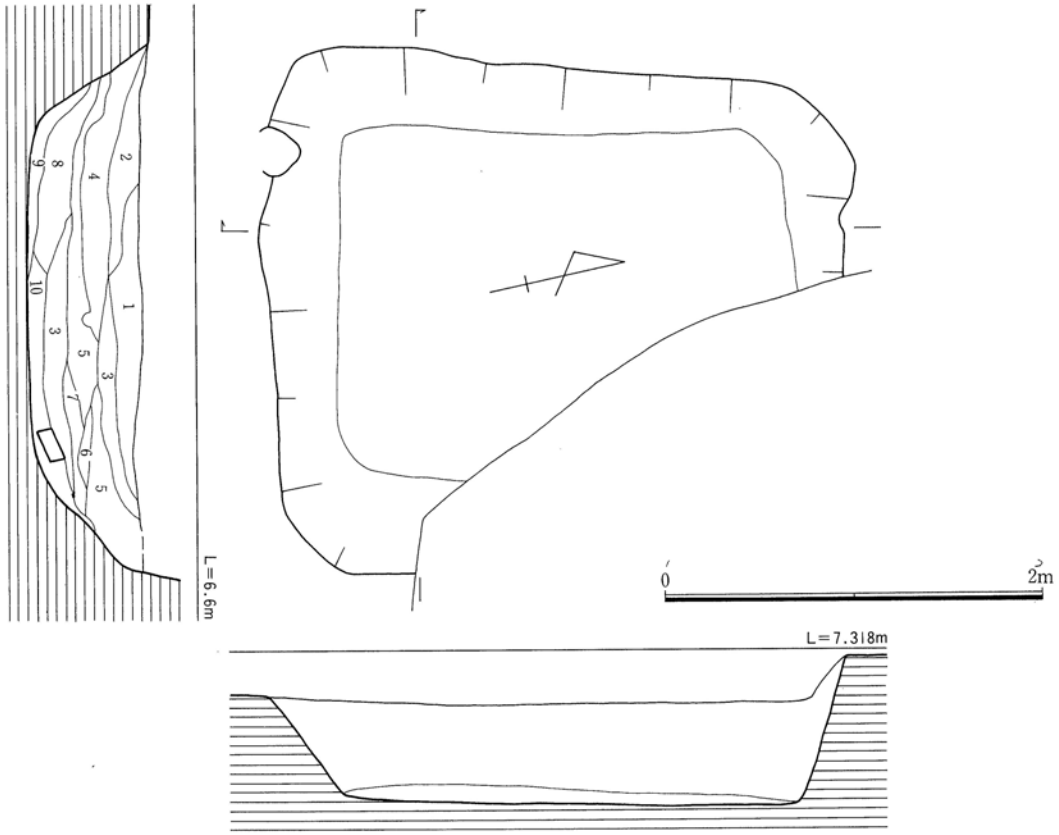
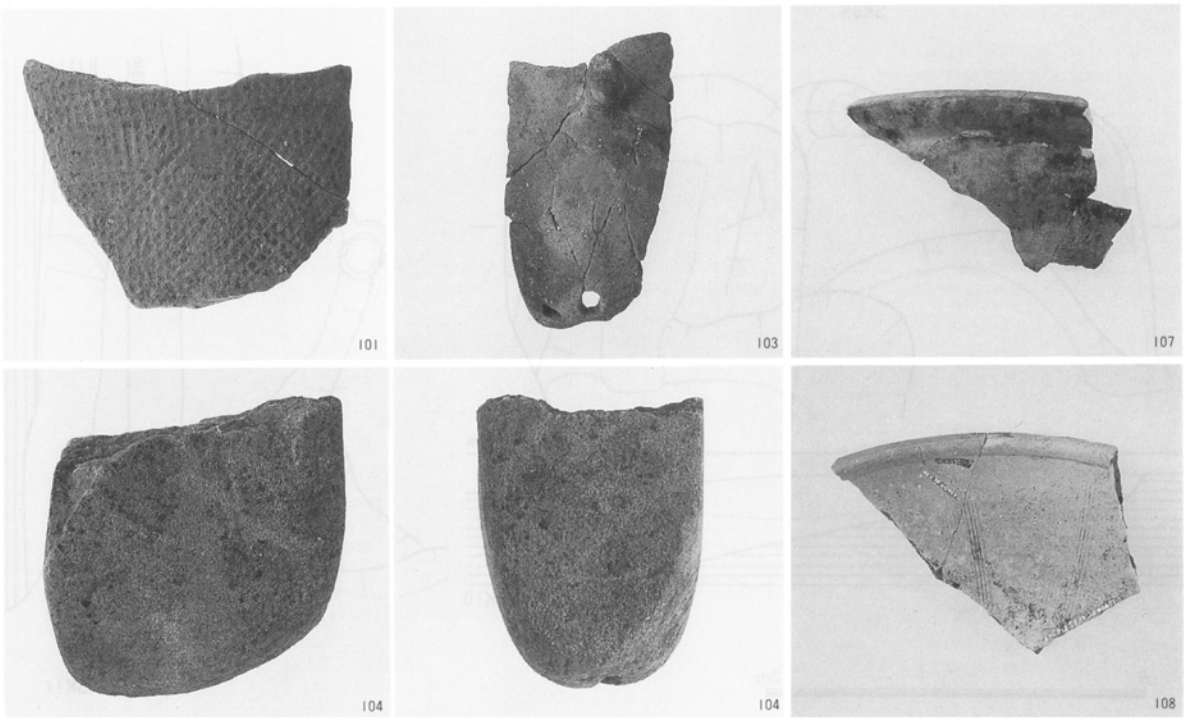


Fig.25　土壙SK04・05・07・10・11実測図（縮尺1/40）



SK12土層名称
1.黒褐色土(黄色土　赤燈色土大ブロック少量含む)
2.黒褐色土(黄色土　赤燈色土大ブロック多量に含む)
3.黒褐色土(赤燈色土のブロック　明茶褐色のブロック含む)
4.黒褐色土(黄色土　赤燈色土の小ブロック多量に含む)
5.1より暗い
6.黄色土の大ブロック
7.5に青灰色砂質土の大ブロック含む
8.黄色土、赤燈色土、黒褐色土の大ブロック混合土
9.8に青灰色砂質土が混入
10.9より黄色土ブロック多量に含む

Fig.26　土壙SK12実測図（縮尺1/40）



土壙SK07・12出土遺物　※数字は実測図の番号に一致する

土壙ＳＫ04（南から）

土壙ＳＫ12（南から）

土壙ＳＫ12土層状態（南から）

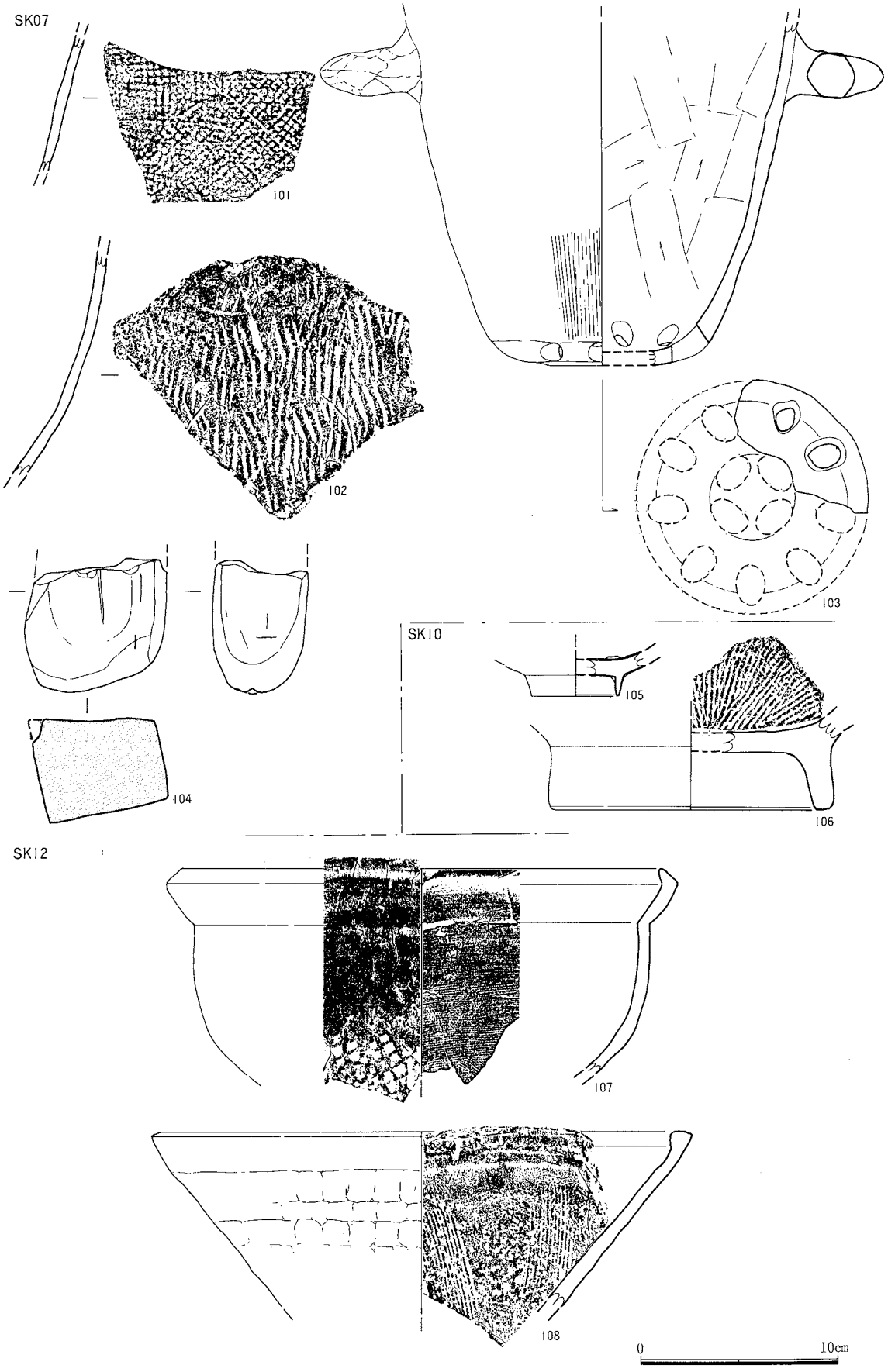


Fig.27　土壙SK07・10・12出土遺物実測図（縮尺1/3）

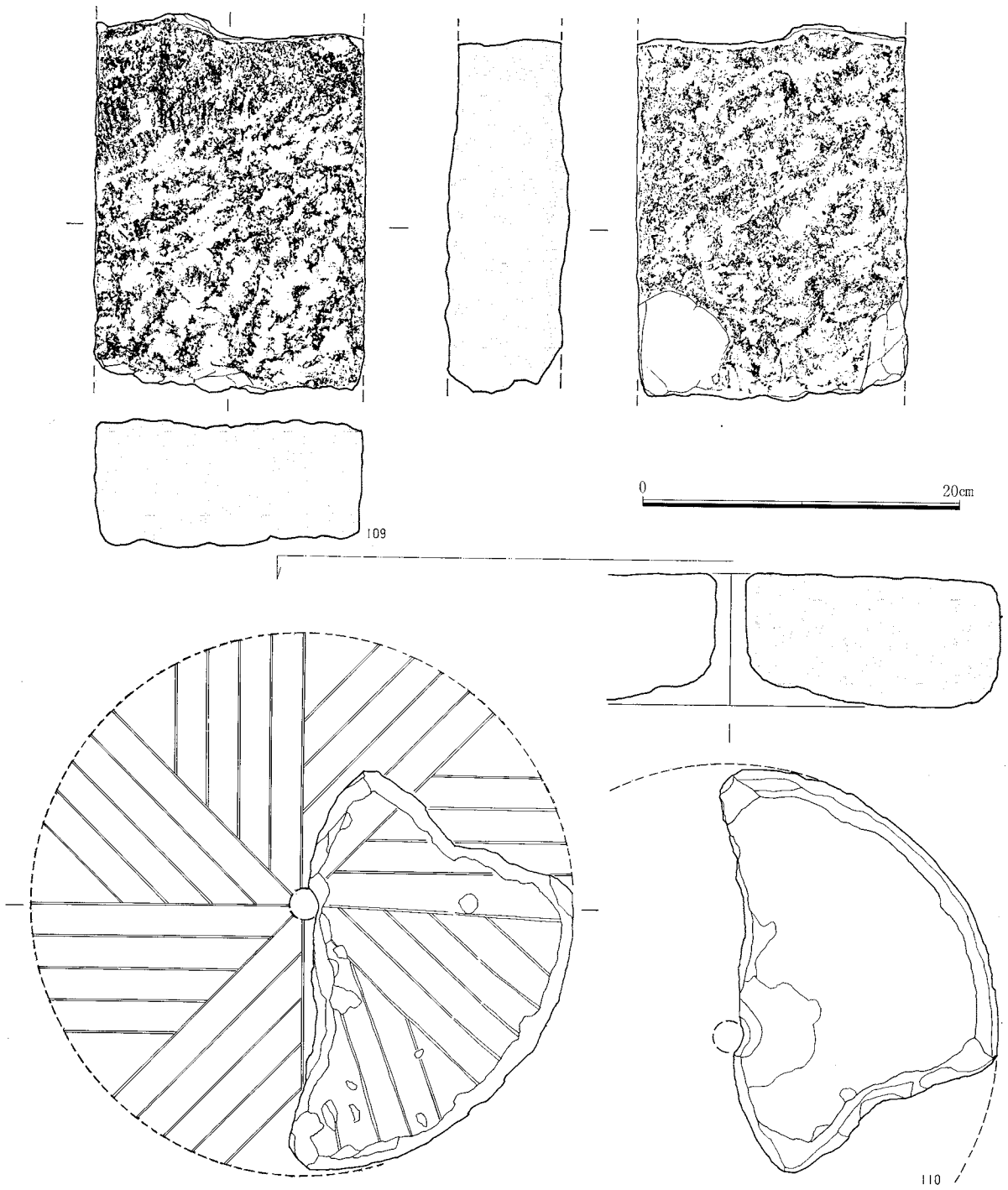


Fig.28　土壙SK12出土遺物実測図（縮尺1/4）

平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形状である。現存長310cm、底面の長さ245cm、最大幅275cm、深さ77cmを測る。覆土は黒色粘質土と灰色土を主体としている。遺物は中国白磁皿・碗、瓦質土器の摺鉢と足鍋、板碑、石臼、滑石製品片等が出土している。

(5)　土壙出土遺物　(Fig.27・28)

SK07出土遺物（101～104）　101～103は土師器で、101、102は甕片である。101の外面は格子目叩き、

102の外面は平行叩きを施しており、須恵器の器面調整の手法を用いている。103は甑で、外面に把手を持つ。内面はタテ方向のヘラケズリで、丸底の底部には穿孔がある。104は砥石である。これらの遺物は6世紀代の所産と考えられる。

SK10出土遺物（105・106）　105は中国白磁碗Ⅴ類、106は国産陶器の摺鉢で、江戸時代の所産である。

SK12出土遺物（107～110）　107、108は瓦質土器で、107は足鍋、108は摺鉢である。109、110は石製品である。109は板碑の基部で、両面には粗いノミ痕が残る。110は粉挽き臼の下臼で、約1/4の残欠である。擦り目は8分割しており、主溝8本、副溝4本である。多孔質の凝灰岩を材としている。瓦質土器は16世紀代の所産である。

(6)　製鉄遺構（SX）

調査区東側で、2ヶ所検出した。いずれも上部を削平されており、遺存状態は良好ではない。

SX03（Fig.29）　小Pitに切られている。平面形は不整方形で、断面形は二段掘りになっている。底面の北側に寄って、径48cm、深さ16cmの小Pitが設けられている。このPitは摺鉢状を呈し、内部には焼土、炭を含む黒灰色土、黒褐色土が堆積していた。このPitの上部には約10cmの厚さに鉄滓が堆積していた。遺物は土師器片、須恵器片、瓦質土器片が出土した。他に近世の陶磁器片が混入している。

SX06（Fig.29）　平面形は不整形のハート形で、断面形は東西が二段掘りの摺鉢状を、南北が逆梯形状を呈している。中央には径約40cmのPitがあるが、これは2次的な遺構と考えられる。土壙の上位には径5～20cm程度の鉄滓が多く散布している。2段目の肩部周辺には10～20cm大の鉄滓が環状に分布している。下層土層の状態を観察すると、第1・2層はスラッグを多量に含む黒色粘質土層、第3層は黒色粘質土層に地山ブロックを多く含む層で、焼土等は含まない。第4層は茶灰色粘質土層である。中央のPitは1段目から真っ直に壁が立っているので、柱穴と考えられる。

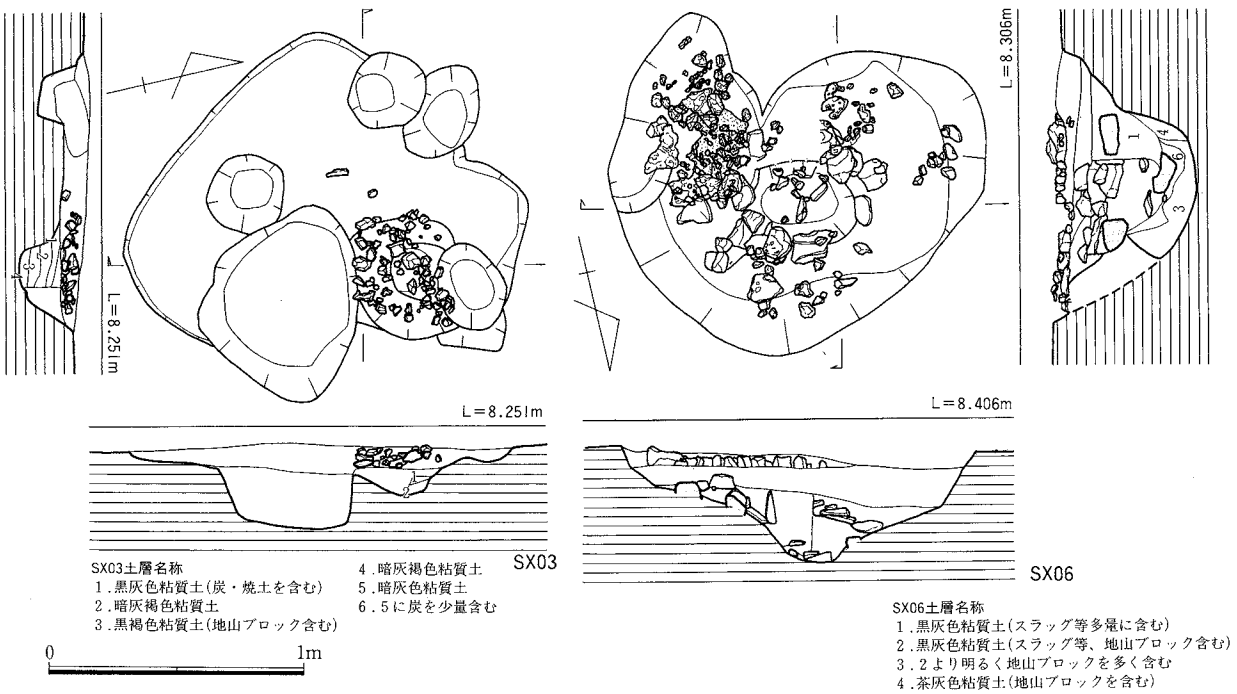
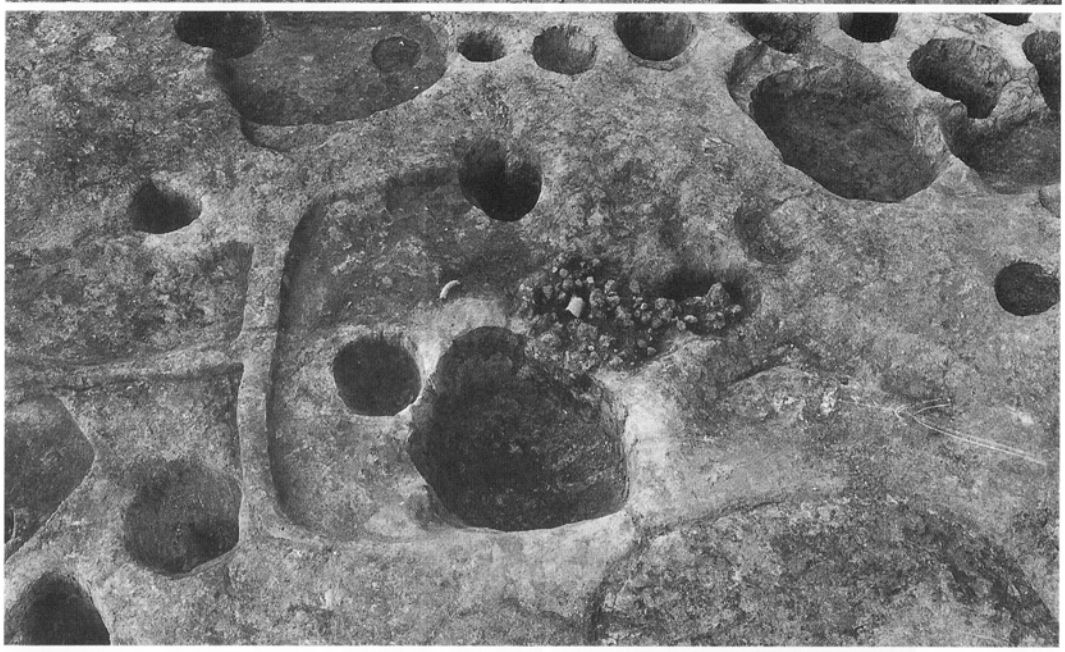


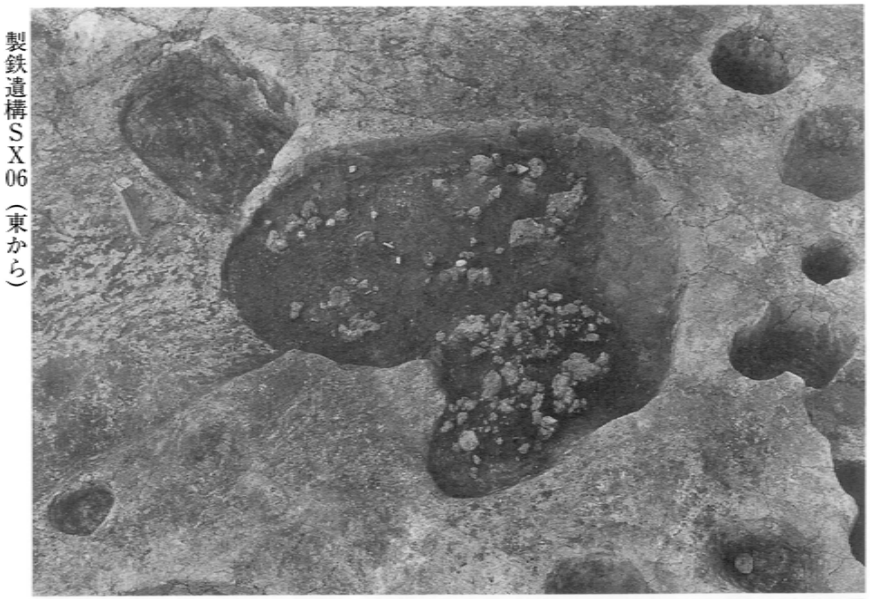
Fig.29　製鉄遺構SX03・06実測図（縮尺1/30）

製鉄遺構SX03・06（南西から）

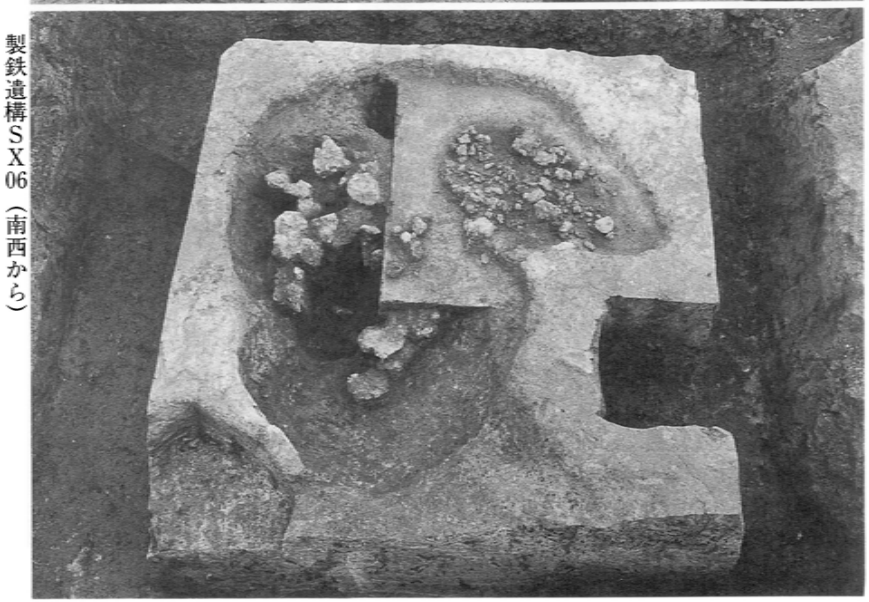


製鉄遺構SX03（東から）

SP195土層状態（南から）

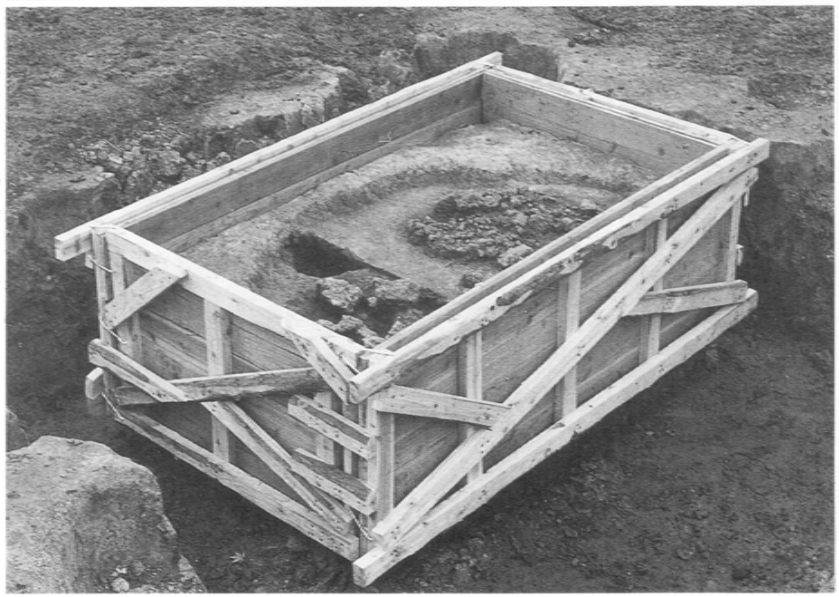


製鉄遺構SX06（東から）



製鉄遺構SX06（南西から）

SX06土層状態（南から）



製鉄遺構SX06（西から）

(7) 製鉄遺構出土遺物

SX03出土遺物　多量に鉄滓が出土したが、今だ分析は行っていない。土師器、須恵器片、瓦質土器片の他国産陶磁器が出土している。近世陶磁器は流れ込み資料である。他に鉄釘の破片がある。

(8) 掘立柱建物（SB）

調査区の東側にPitの集中地域があり、北東側を中心に掘立柱建物を検出した。SB01～SB24までの建物を検出した。その他、柱列が揃うものが、多数存在する。しかし、遺構面の攪乱と削平が著しいことや、柱穴の重複の著しいことなどの理由により掘立柱建物の検出については疎漏が多いものと考えられる。

SB01（Fig.31）　調査区中央部で検出した。梁行１間、桁行２間の規模の掘立柱建物である。主軸方位をN38°Eに置き、柱間は梁間8.9尺、桁間15.7尺を測る。掘り方は隅丸長方形を呈し、径50～73cm、深さ18～26cmを測る。柱根径は15～30cmである。柱穴から弥生土器片、土師器高坏片が出土している。

SB02（Fig.31）　調査区中央部で検出した。建物基礎と攪乱により柱穴が削平されており、全形は不明である。梁行２間、桁行２間の規模の掘立柱建物であるが、南西隅の柱穴が削平されている。主軸方位をN25°Wに置き、柱間は梁間11.0尺、桁間16.3尺を測る。掘り方は隅丸長方形と考えられるが、

Fig.30　第74次調査掘立柱建物配置図（縮尺1/300）

削平を受け、ほとんど遺存していない。径20～40cm、深さ6～54cmを測る。柱根径は22～28cmである。柱穴から土師器、須恵器等が出土している。

SB03 (Fig.31)　調査区北側で検出した。攪乱壙と基礎工事のため柱穴を損失しており、全形は不明である。梁行1間、桁行2間の規模の掘立柱建物である。主軸方位をN37°Eに置き、柱間は梁間8.9尺、桁間15尺を測る。掘り方は隅丸長方形を呈し、径47～57cm、深さ10～22cmを測る。柱根径は20cmである。柱穴から弥生土器片、土師器片が出土している。

SB04 (Fig.31)　調査区北東側で検出した。住居跡SC01・03と切り合い関係にある。梁行1間、桁行1間の規模の掘立柱建物である。主軸方位をN65°Wに置き、柱間は梁間7.3尺、桁間10.6尺を測る。掘り方は隅丸長方形を呈し、径70～85cm、深さ40～55cmを測る。柱根径は22cmである。柱穴から弥生土器、土師器が出土している。

SB05 (Fig.31)　調査区の北東側で検出した。SB04建物と切り合っている。梁行1間、桁行2間の規模をもった掘立柱建物である。主軸方位をN27°Eに置き、柱間は梁間17.0尺、桁間9.9尺を測る。掘り方は隅丸長方形を呈し、長径30～73cm、深さ19～54cmを測る。柱根径12～30cmを測る。柱穴から弥生土器、土師器、須恵器が出土している。

SB06 (Fig.31)　調査区の東側で検出した。他の柱穴と切り合い関係が著しい。梁行1間、桁行2間の規模をもった掘立柱建物である。主軸方位をN27°Wに置き、柱間は梁間8.6尺、桁間15.2尺を測る。掘り方は不整円形を呈し、長径50～76cm、深さ21～56cmを測る。柱根径20cmを測る。柱穴から弥生土器、土師器、須恵器、黒曜石が出土している。

SB07 (Fig.32)　調査区の北東側で検出した。他の柱穴と切り合い関係が著しく、また、井戸SE01と切り合う。梁行2間、桁行3間の規模をもち、南側に1間幅の庇が付く掘立柱建物である。主軸方位をN14°Eに置き、柱間は梁間12.5尺、桁間15.9尺を測る。建物内にすっぽり入る形でSE01が存在する。掘り方は隅丸長方形または不整楕円形を呈し、長径44～77cm、深さ8～80cmを測る。柱根径20～22cmを測る。柱穴から弥生土器、土師器、須恵器、黒曜石が出土している。

SB08 (Fig.32)　調査区の北東側で検出した。井戸SE01から切られ、全形は不明である。梁行1間、桁行2間の規模の掘立柱建物である。主軸方位をN32°Eに置き、柱間は梁間10.2尺、桁間12.2尺を測る。掘り方は隅丸長方形を呈し、長径48～70cm、深さ10～54cmを測る。柱穴から弥生土器、土師器、須恵器、黒曜石が出土している。

SB09 (Fig.32)　調査区の北東側で検出した。土壙SK07、溝SD04、井戸SE01から切られ、全形は不明である。梁行1間、桁行2間の規模の掘立柱建物である。主軸方位をN37°Eに置き、柱間は梁間9.6尺、桁間15.2尺を測る。掘り方は不整隅丸長方形を呈し、長さ90～133cm、深さ42～64cmを測る。柱穴から弥生土器、土師器、須恵器、黒曜石が出土している。

SB10 (Fig.32)　調査区の北東隅で検出した。溝SD01に切られ、又、削平も著しいため全形は不明である。梁行2間、桁行2間の規模の掘立柱建物と考えられる。主軸方位をN23°Eに置き、柱間は梁間10尺、桁間13.6尺を測る。掘り方は隅丸長方形を呈し、長さ65～77cm、深さ31～48cmを測る。柱根径21cmを測る。柱穴から弥生土器、土師器、須恵器が出土している。

SB11 (Fig.32)　北東側の境界地に在るため全形は不明である。梁行1間以上、桁行2間以上の規模の掘立柱建物である。主軸方位をN64°Wに置き、柱間は桁間16.3尺を測る。掘り方は不整隅丸長方形を呈し、長径67～78cm、深さ24～33cm、柱根径25cmを測る。柱穴から弥生土器、土師器、須恵器、黒曜石が出土している。

SB12 (Fig.33)　調査区北東側で検出した。住居跡SC01を切っている。溝SD04に切られ、SB11と切

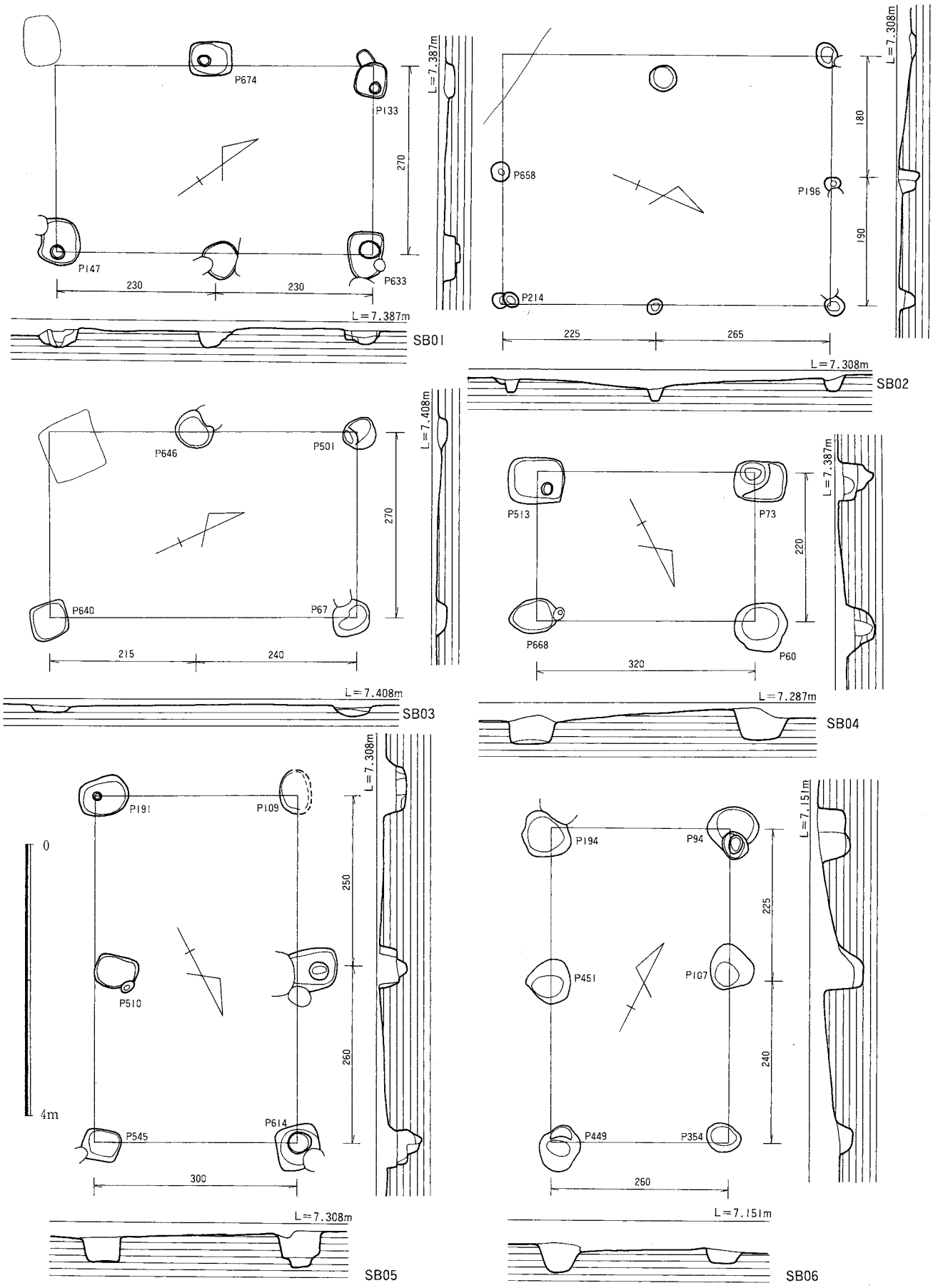
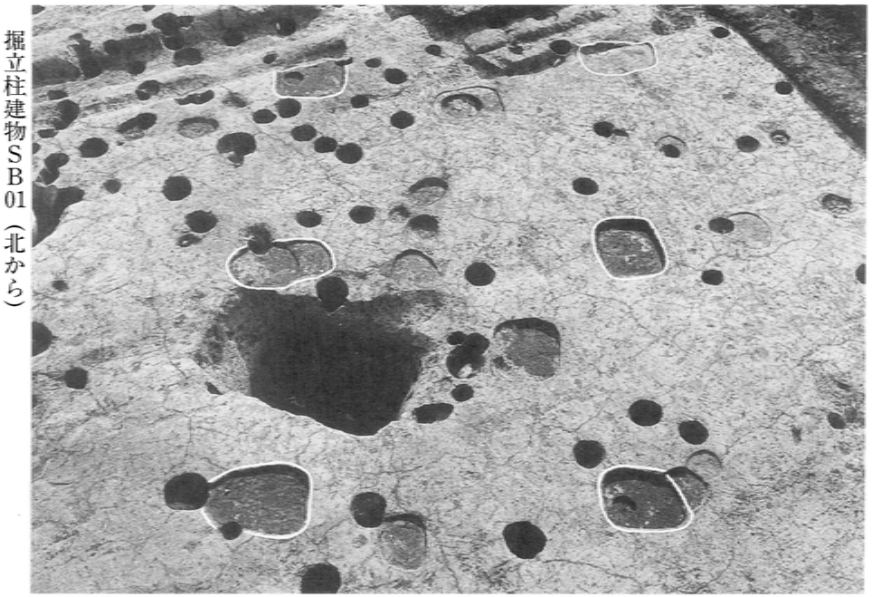
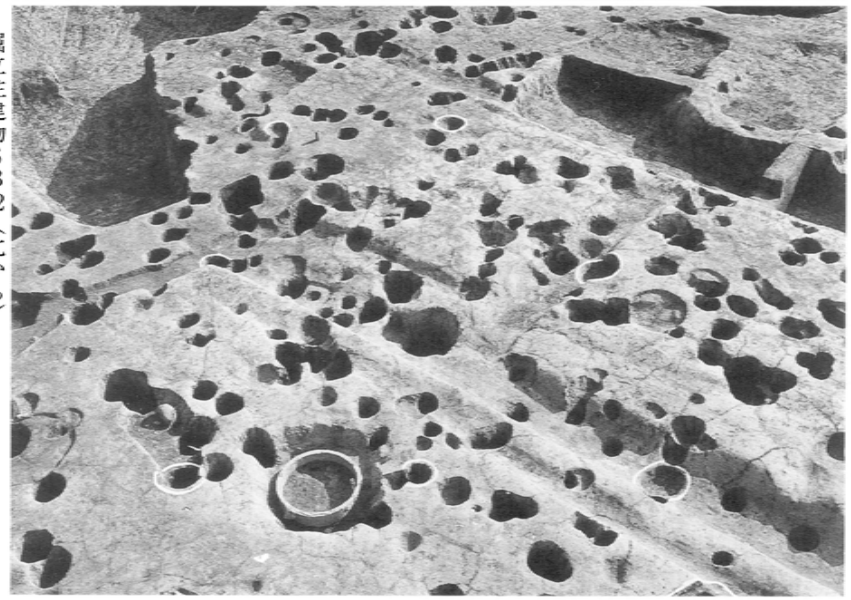


Fig.31　掘立柱建物SB01～06実測図（縮尺1/80）



掘立柱建物ＳＢ01（北から）



掘立柱建物ＳＢ02（北から）

掘立柱建物ＳＢ03（東から）

掘立柱建物ＳＢ04（西から）

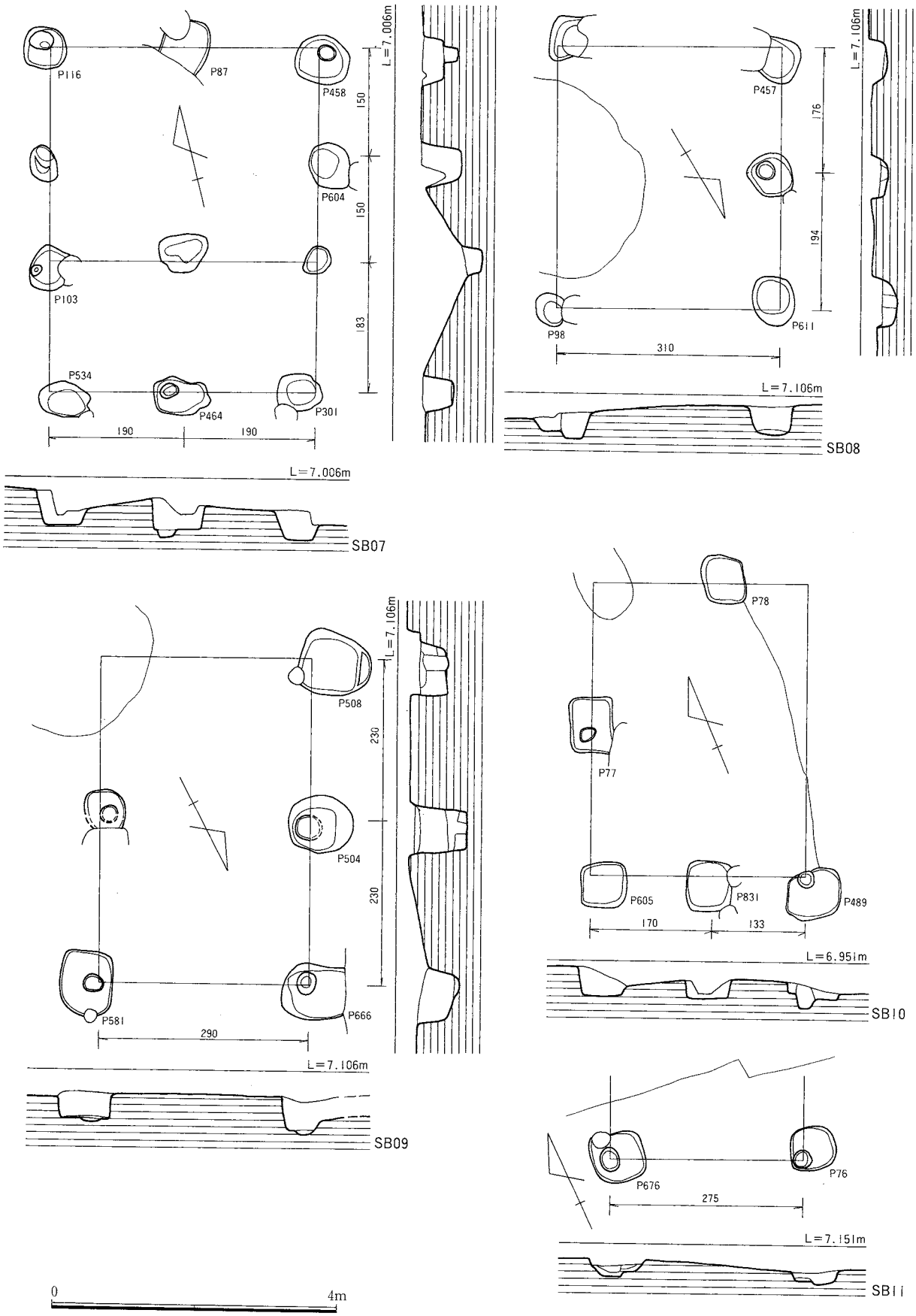
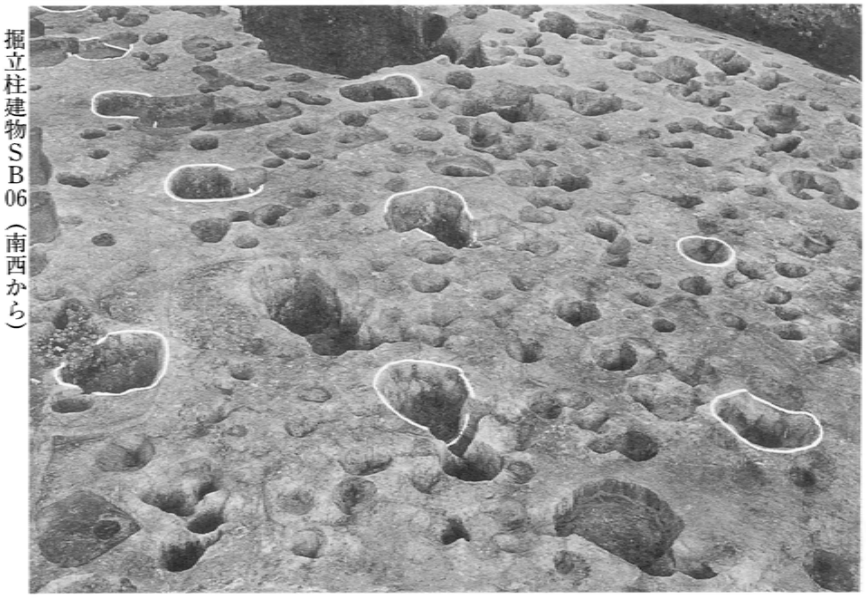


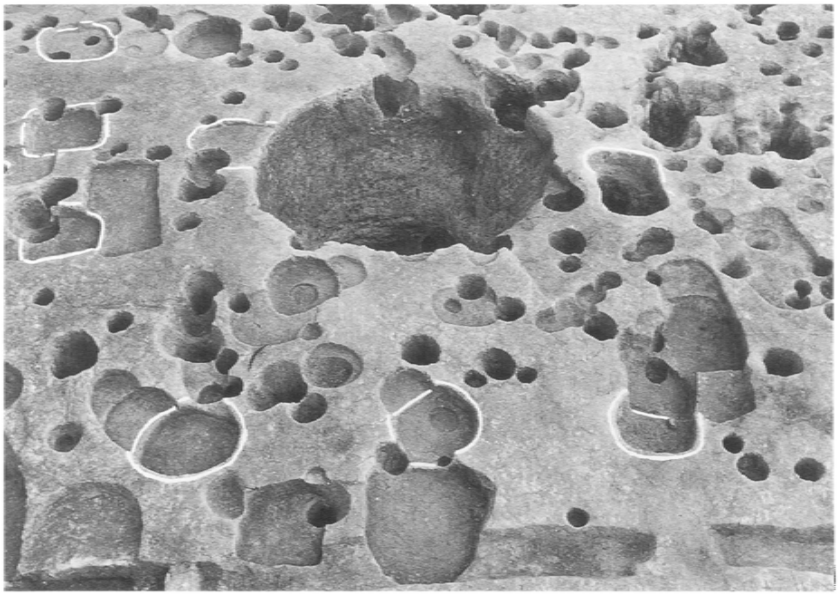
Fig.32　掘立柱建物SB07～11実測図（縮尺1/80）

掘立柱建物ＳＢ05（西から）

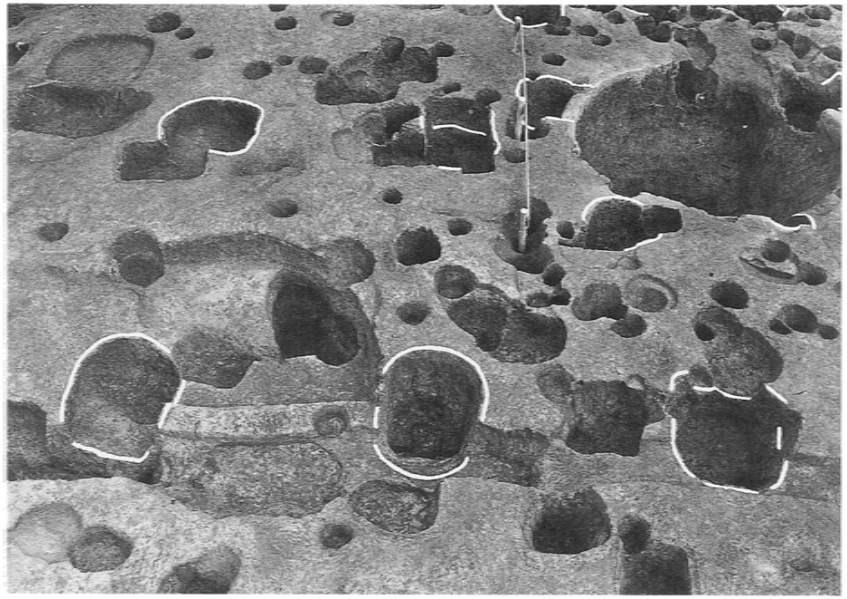


掘立柱建物ＳＢ06（南西から）

掘立柱建物ＳＢ07（東から）



掘立柱建物ＳＢ08（西から）



掘立柱建物ＳＢ09（西から）

掘立柱建物ＳＢ10（南から）

掘立柱建物ＳＢ11（南から）

掘立柱建物ＳＢ12（南から）

掘立柱建物SB14（北から）

掘立柱建物（西から）

掘立柱建物（南から）

掘立柱建物（西から）

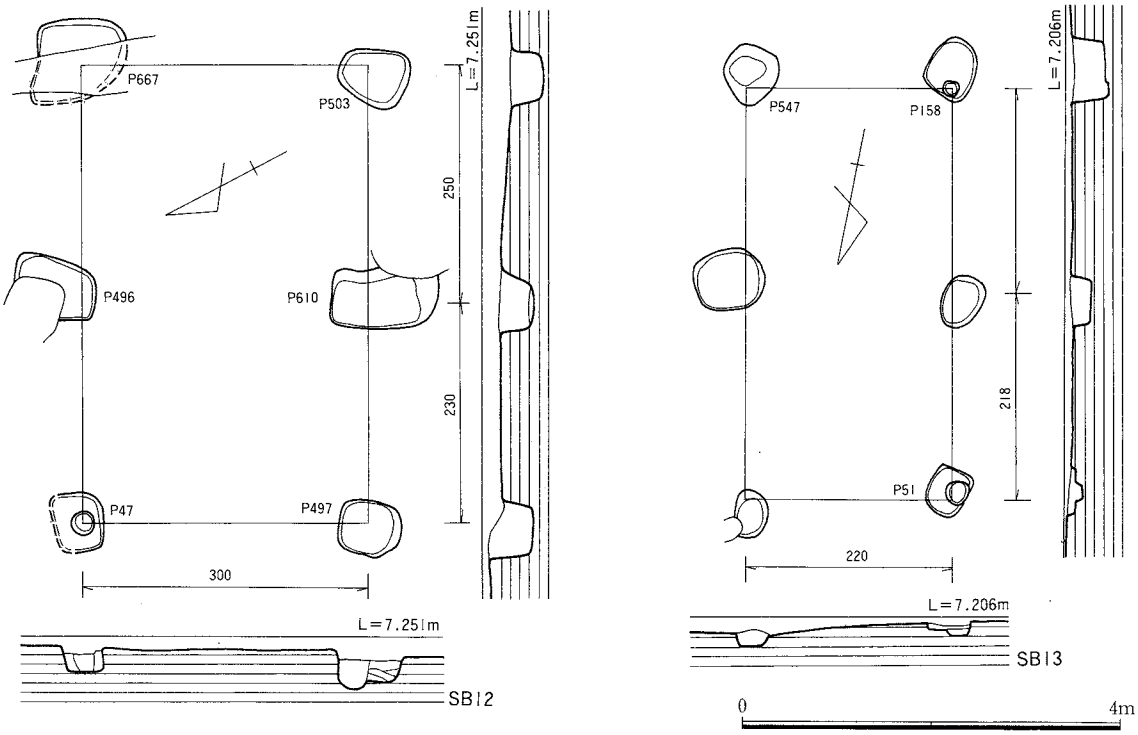


Fig.33　掘立柱建物SB12・13実測図（縮尺1/80）

り合い関係にある。全形は不明である。梁行１間、桁行２間以上の規模の掘立柱建物である。主軸方位をN63°Wに置き、柱間は梁間9.9尺、桁間16尺を測る。掘り方は隅丸長方形を呈し、長さ65～110cm、深さ12～46cmを測る。柱根径は23cmである。柱穴から弥生土器、土師器、黒曜石が出土している。

SB13（Fig33）　調査区北側で検出した。住居跡SC01と切り合っている。梁行２間、桁行１間の規模の掘立柱建物である。主軸方位をN8°Eに置き、柱間は梁間7.3尺、桁間7.3尺を測る。掘り方は隅丸長方形を呈し、径52～70cm、深さ10～72cmを測る。柱根径16～24cmである。柱穴から弥生土器片、土師器片が出土している。

SB14(Fig34)　調査区の東側で検出した。他の柱穴と切り合い関係が著しい。梁行１間、桁行２間の規模をもった掘立柱建物である。主軸方位をN15°Eに置き、柱間は梁間5.4尺、桁間5.4尺を測る。掘り方は不整円形を呈し、長径50～72cm、深さ16～61cmを測る。柱穴から土師器、須恵器が出土している。

SB15(Fig34)　調査区の東側で検出した。他の柱穴と切り合い関係が著しい。削平のため柱穴を欠いている。梁行２間、桁行２間の規模の掘立柱建物と考えられる。主軸方位をN15°Eに置き、柱間は梁間5.1尺、桁間5.9尺を測る。掘り方は隅丸長方形または不整楕円形を呈し、長径41～43cm、深さ20～28cmを測る。遺物の出土はない。

SB16(Fig34)　調査区の中央で検出した。削平のため柱穴を欠いている。梁間２間、桁間３間の規模をもつ側柱だけの掘立柱建物である。主軸方位をN77°Eに置き、柱間は梁間平均6.3尺、桁間平均7.5尺を測る。掘り方は隅丸長方形を呈し、長径60～65cm、深さ17～34cmを測る。柱根径14～37cmを測る。遺物の出土はない。

SB17(Fig34)　調査区の西側で検出した。削平が著しく柱穴の遺存状態は悪い。梁行２間、桁行３間の規模の掘立柱建物である。主軸方位をN20°Eに置き、柱間は梁間平均6.6尺、桁間5.8尺を測る。掘り方は不整隅丸長方形を呈し、長さ65～80cm、深さ26～30cm、柱根径14～25cmを測る。柱穴から弥生土器、土師器、須恵器が出土している。

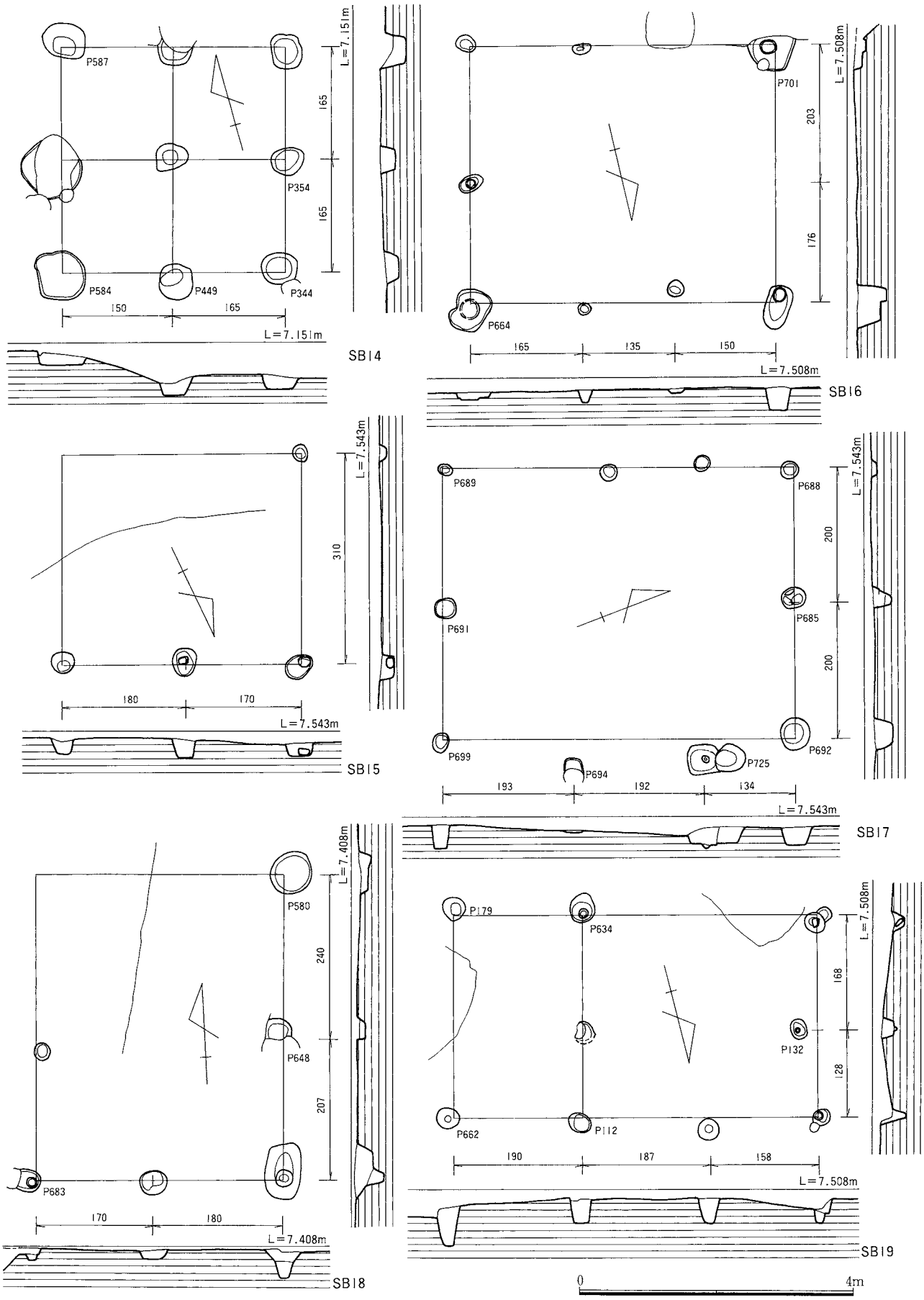


Fig.34　掘立柱建物SB14～19実測図（縮尺1/80）

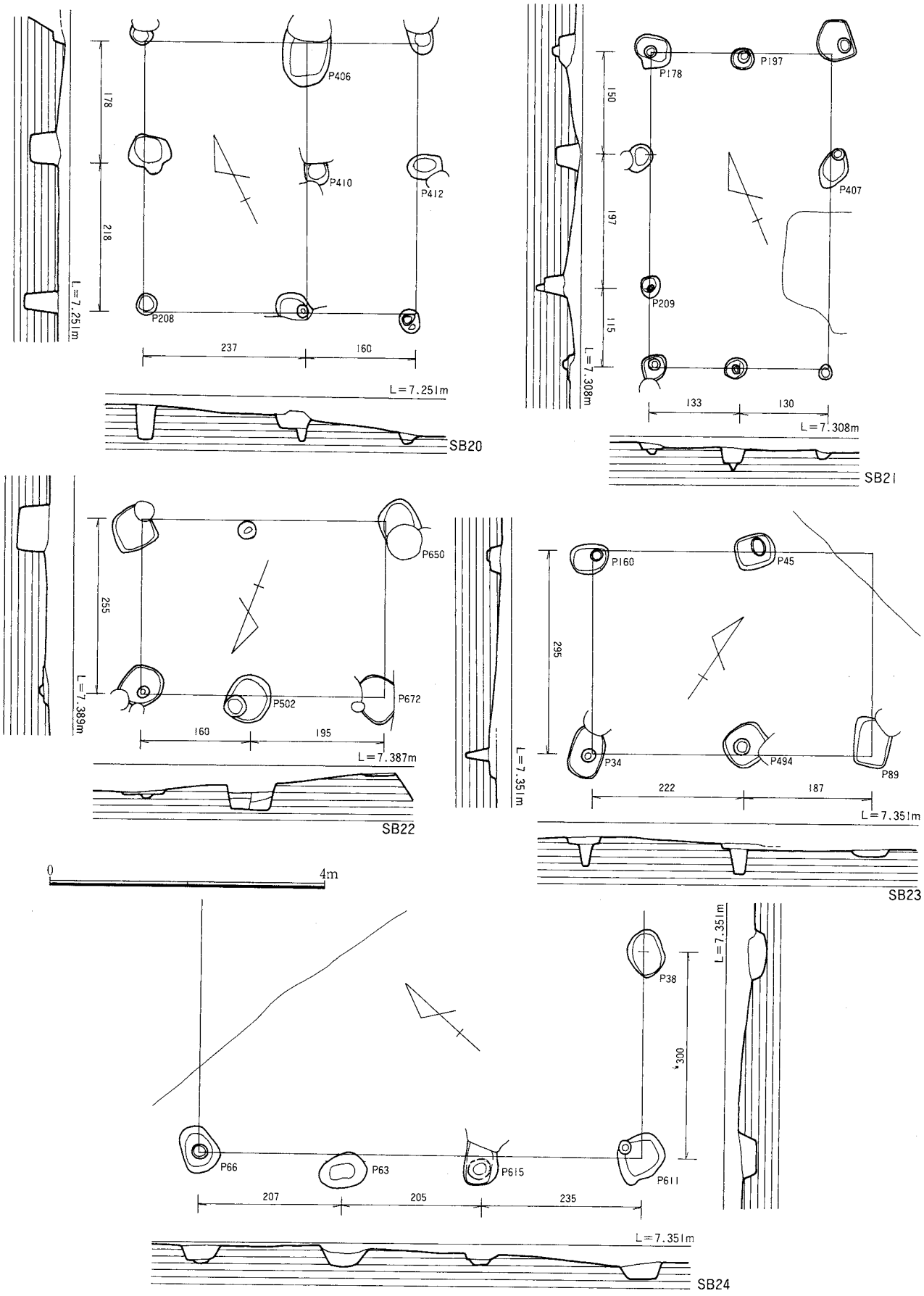


Fig.35　掘立柱建物SB20～24実測図（縮尺1/80）

SB18(Fig34)　調査区の北隅で検出した。又、削平も著しいため全形は不明である。梁行２間、桁間２間の規模の掘立柱建物と考えられる。主軸方位をN3°Eに置き、柱間は梁間5.9尺、桁間7.4尺を測る。掘り方は隅丸長方形を呈し、長さ65～80cm、深さ18～42cmを測る。柱根径14～25cmを測る。柱穴から陶器が出土している。

SB19(Fig34)　調査区の中央に在る。梁行２間、桁行２間の規模の掘立柱建物である。東側に１間の庇をもつ。主軸方位をN76°Wに置き、梁間平均4.9尺、桁間6.2尺を測る。掘り方は不整隅丸長方形を呈し、長径31～36cm、深さ31～36cm、柱根径15cmを測る。柱穴から土師器が出土している。

SB20（Fig35）　調査で東側が検出した。掘立柱建物SB06・14・21と切り合い関係にある。梁行１間、桁行２間以上の規模の掘立柱建物で、東側に１間幅の庇がつく。主軸方位はN66°Wに置き、梁間平均6.5尺、桁間平均6.5尺を測る。掘り方は不整隅丸長方形を呈し、径53～60cm、深さ42～45cm、柱根径16cmを測る。柱穴から土師器、須恵器甕片が出土した。

Tab.2　第74次調査掘立柱建物一覧表

1尺＝30.3cm

	規模	桁行（cm）		梁行（cm）		方位	床面積（㎡）	柱穴状態					出土遺物	備考
		実長（尺）	柱間寸法(尺)	実長（尺）	柱間寸法(尺)			Pit数	深さ	長径	短径	柱根径		
SB01	2×1	475（15.7）	230（7.6） 230（7.6）	270（8.9）	270（8.9）	N38°E	12.82	6	18～26	50～73	45～57	15～30	縄文土器甕、弥生土器甕、土師器高坏、鉄滓、黒曜石、壁	
SB02	2×2	490（16.3）	225（7.4） 265（8.7）	335（11.0）	190（6.3） 180（5.9）	N25°W	16.41	7	6～54	20～40	30～40	22～28	弥生土器、土師器、須恵器	
SB03	2×1	455（15）	215（7.1） 240（7.9）	270（8.9）	270（8.9）	N37°E	12.28	4	10～22	47～57	45～52	20	弥生土器壺・甕、土師器	
SB04	1×1	320（10.6）	320（10.6）	220（7.3）	220（7.3）	N65°W	7.04	4	40～55	70～85	50～72	22	弥生土器甕、土師器、須恵器	住居跡SC01・03と切り合う
SB05	2×1	515（17.0）	250（8.3） 260（8.6）	300（9.9）	150（5.0） 150（5.0）	N27°E	15.45	7	19～54	30～73	47～60	12～30	弥生土器甕、土師器、黒曜石	掘立柱建物SB03と切り合う
SB06	2×1	465（15.2）	240（7.9） 225（7.4）	260（8.6）	260（8.6）	N27°W	12.09	6	21～56	50～76	60～65	20	弥生土器甕、土師器甕、須恵器蓋・甕、須恵器赤焼け、黒曜石	
SB07	3×2	483（15.9）	183（6.0） 150（5.0）	380（12.5）	190（6.3） 190（6.3）	N14°E	18.35	11	8～80	44～77	50～68	20～22	弥生土器甕、土師器坏・甑、須恵器、黒曜石	井戸SE01と切り合う
SB08	2×1	370（12.2）	370（12.2）	310（10.2）	310（10.2）	N32°E	11.47	5	8～80	48～70	56～63	—	弥生土器壺、土師器、須恵器、黒曜石	井戸SE01に切られる
SB09	2×1	460（15.2）	230（7.6） 230（7.6）	290（9.6）	290（9.6）	N37°E	13.34	5	42～64	90～133	70～90	25～35	弥生土器甕、土師器甕、須恵器、黒曜石	土壙SK07・溝SD04井戸SE01に切られる
SB10	2×2	413（13.6）	203（6.7） 210（6.9）	303（10.0）	133（4.4） 170（5.6）	N23°E	12.51	6	31～48	65～77	60～68	21	弥生土器甕、土師器、須恵器甕	溝SD01に切られる
SB11	2×1	495（16.3）	275（9.1） 220（7.3）	—	—	N64°W	—	2	24～33	67～78	62～68	25	弥生土器甕、土師器甕、須恵器、黒曜石	
SB12	1×2	485（16）	250（8.3） 230（7.6）	300（9.9）	300（9.9）	N63°W	14.55	6	12～46	65～110	60～65	23	弥生土器甕、土師器、黒曜石、土製品	住居跡SC01を切る
SB13	2×1	433（14.3）	215（7.0） 218（7.2）	220（7.3）	220（7.3）	N8°W	9.53	6	10～72	52～70	41～57	16～24	弥生土器、土師器、須恵器、黒曜石	
SB14	2×2	330（10.9）	165（5.4） 165（5.4）	315（10.4）	165（5.4） 165（5.4）	N15°E	10.4	9	19～61	50～72	45～70	—	土師器、須恵器	
SB15	2×1	350（11.6）	180（5.9） 170（5.6）	310（10.2）	310（10.2）	N15°E	10.9	4	20～28	41～43	32～35	—	なし	
SB16	3×2	450（14.9）	165（5.4） 135（4.4）	383（12.6）	203（6.7） 180（5.9）	N77°W	17.2	8	17～34	60～65	35～53	14～37	なし	
SB17	3×2	514（17.0）	193（6.4） 192（6.3） 134（4.4）	400（13.2）	200（6.6） 200（6.6）	N20°E	21.3	10	26～30	45～48	41～43	11	弥生土器甕、土師器、須恵器	
SB18	2×2	447（14.8）	207（6.8） 240（7.9）	360（11.9）	190（6.3） 170（5.6）	N3°E	16.0	7	18～42	65～80	32～55	14～25	陶器	
SB19	3×2	535（17.7）	190（6.3） 187（6.2） 158（5.2）	296（9.8）	168（5.5） 128（4.2）	N76°E	16.1	9	31～36	28～43	23～37	15	土師器坏	
SB20	2×2	397（13.1）	160（5.3） 237（7.8）	396（13.1）	218（7.2） 178（5.9）	N66°W	15.7	9	42～45	53～60	47～70	16	土師器、須恵器甕	
SB21	3×2	462（15.2）	115（3.8） 197（6.5）	263（8.7）	130（4.3） 133（4.4）	N23°E	12.2	9	28～38	35～60	35～45	15～18	弥生土器、土師器、須恵器甕	
SB22	2×1	355（11.7）	160（5.3） 195（6.4）	255（8.4）	255（8.4）	N68°E	9.1	6	45～52	60～70	56～61	16～32	土師器	
SB23	2×1	441（14.5）	235（7.8） 206（6.8）	310（10.2）	310（10.2）	N43°W	20.0	4	19～24	68～70	55～60	20	弥生土器甕、土師器、須恵器甕	
SB24	3×1	409（13.5）	187（6.2） 222（7.3）	295（9.7）	295（9.7）	N56°E	12.1	5	21～43	55～62	47～55	17～24	弥生土器甕・丹塗り土器、土師器、須恵器	

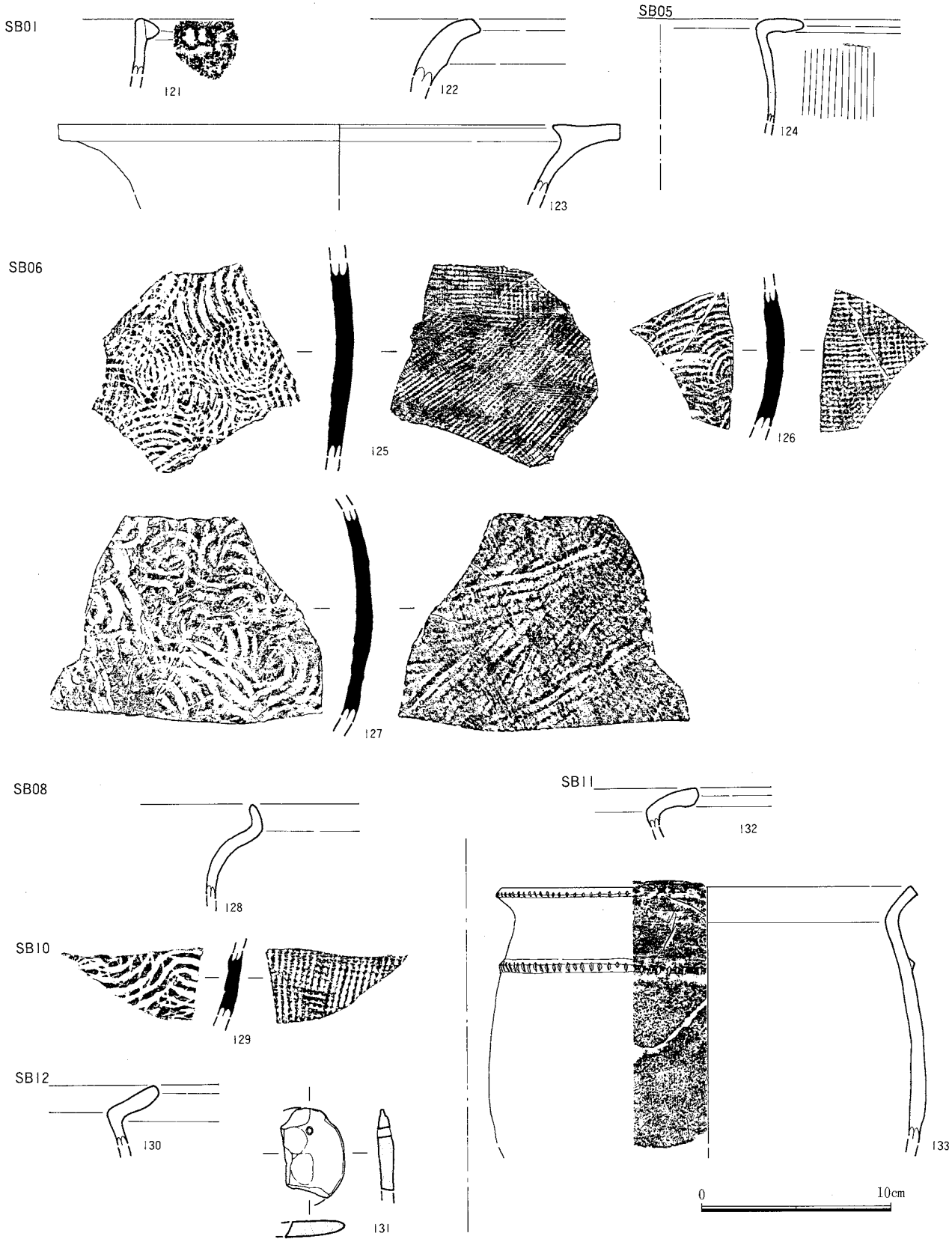


Fig.36　掘立柱建物SB01・03・05・06・08・10～12出土遺物実測図（縮尺1/3）

(9) 掘立柱建物出土遺物 (Fig.36)

SB01出土遺物（121） 121は縄文時代晩期の甕形土器で、SP674から出土している。

SB03出土遺物（122・123） 122はSP646出土で、弥生時代前期の壷の口縁部片である。123はSP67出土で、弥生時代中期の壷の口縁部分である。

SB05出土遺物（124） 124はSP162出土。弥生時代中期の甕の口縁部片である。

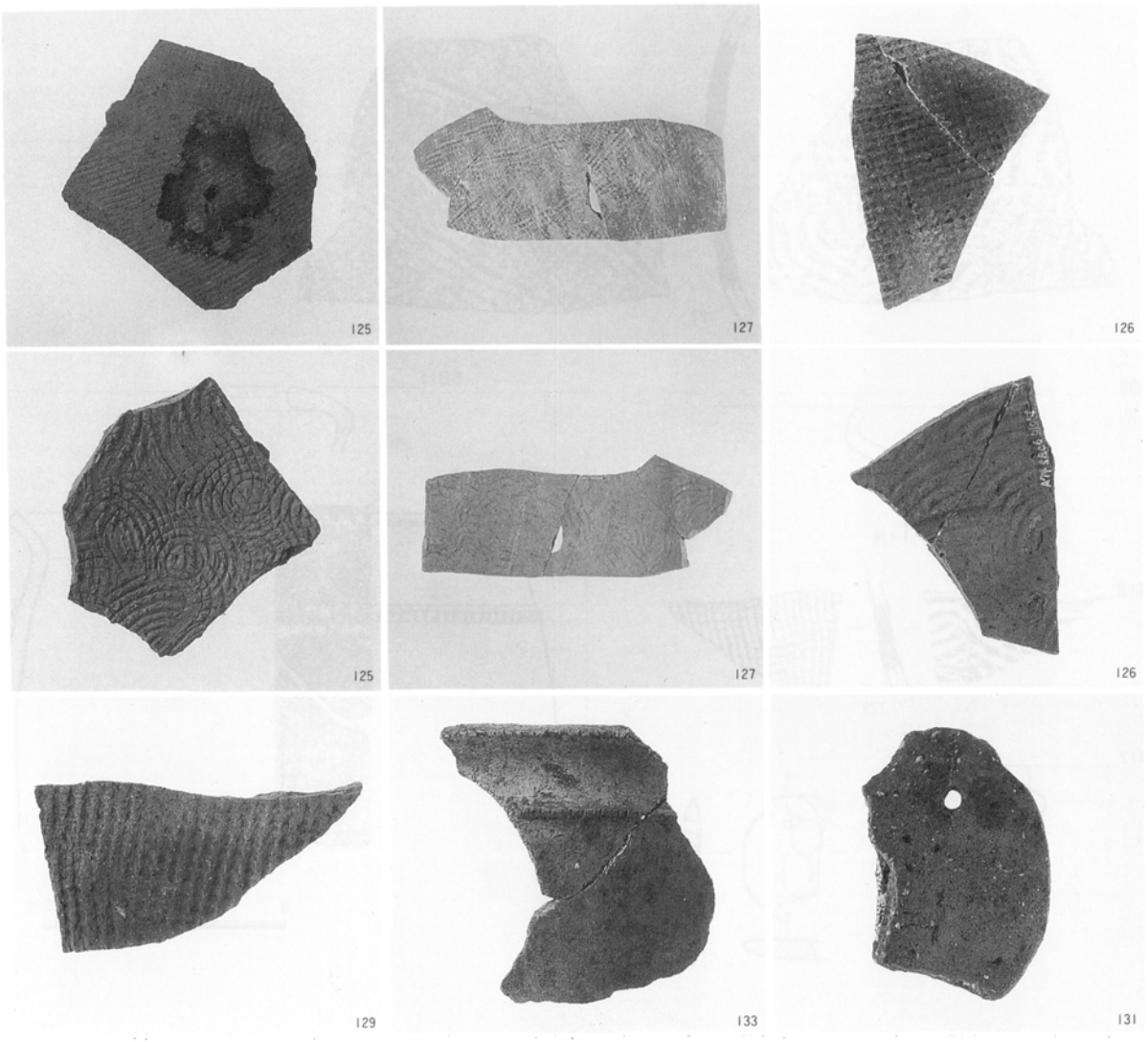
SB06出土遺物（125～127） 125～127は須恵器の胴部片である。125・127はSP19出土、126はSP107出土。外面は125が平行叩き、126・127が格子目叩きである。内面は125が同心円、126・127が青海波の叩きである。

SB08出土遺物（128） 128はSP457出土。弥生時代後期の袋状口縁部を有した壷である。

SB10出土遺物（129） 129はSP489出土。須恵器甕片で、外面は格子目叩き、内面は青海波の叩きである。

SB11出土遺物(132・133) 132はSP608出土。弥生時代後期の甕形土器の口縁部片である。133はSP676出土。弥生時代前期の甕形土器で、口縁部と突帯に刻目を有している。

SB12出土遺物（130・131） 130はSP496出土、131はSP47出土。130は弥生時代後期の土器片であ



掘立柱建物SB06・10～12出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する

る。131は土製品で、扁平な楕円形を呈している。上部に穿孔があるところから、垂飾品と考えられる。

⑽ 溝（SD）

調査区の北東側において南北方向の溝を２条、南側において東西方向の溝３条、南北方向の溝１条を検出した。溝SD01は台地の縁辺を廻る形で存在する。伝承に残る戦国時代の濠で「鬼丸ホゲ」と考えられ、現在も調査区境の水路として残っている。溝SD05～10は、排水的役目をもったものと考えられる。溝SD03は住居跡SC03の周溝である。溝SD01・02は同一の溝と考えられる。

SD01（Fig.37） 調査区の東側境界に位置しており、全形は不明である。長さ約15mまでを確認するにとどまった。大略南方向から北方向に流下する溝で、排水溝の役目を持っている。断面形は逆梯形、又はV字形を呈し、溝上面の幅は100cm以上、底面の幅は不明、深さ90cm以上を測る。覆土は黒灰色粘質土、又は暗灰色粘土を主体としている。覆土から、中国白磁、染付等が出土しており、戦国時代の遺構と考えられる。

SD02（Fig.37） 調査区の東南側境界に位置しており、一部を確認するにとどまった。長さ約８mまでを確認するにとどまった。大略西方向から北方向に矩形に曲がりながら流下する溝で、排水溝の役目を持っている。断面形は一部逆梯形を呈するが、全体は不明。溝上面の幅は100cm以上、深さ90cm以上を測る。覆土は黒灰色粘質土、又は暗灰色粘土を主体としている。覆土から中国白磁等が出土して

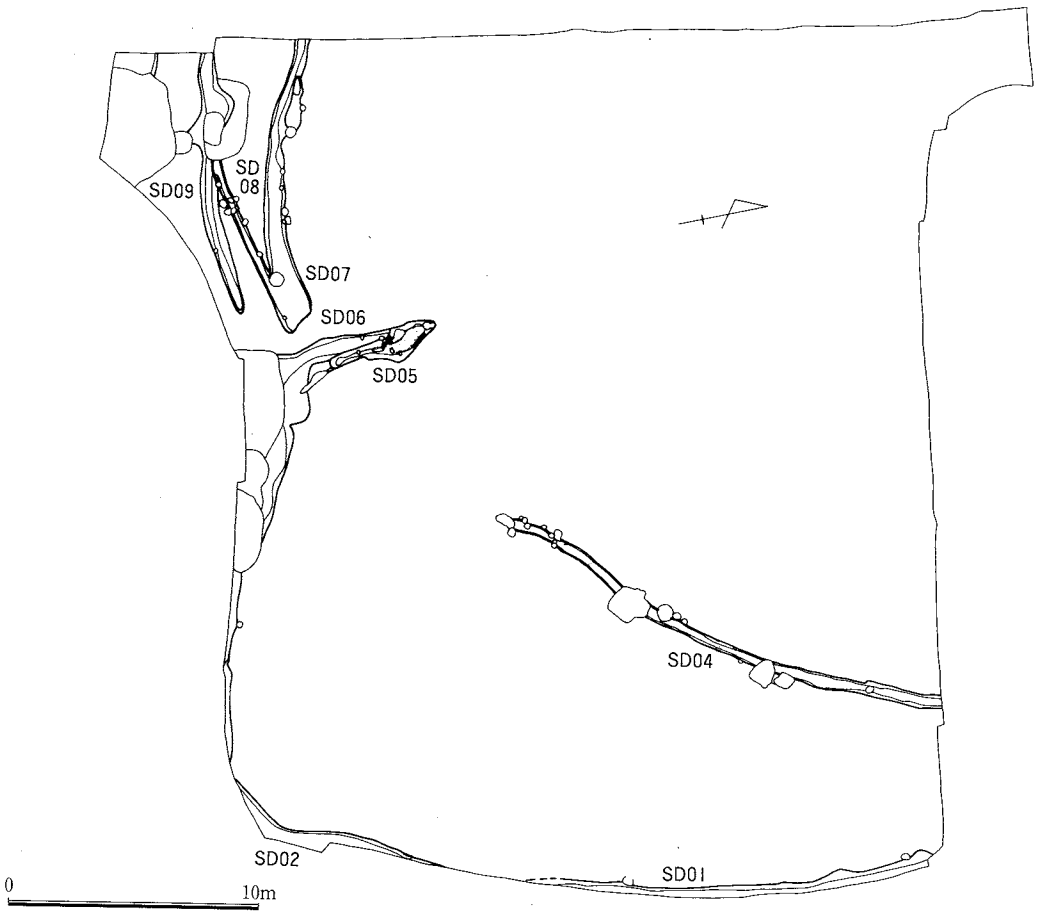
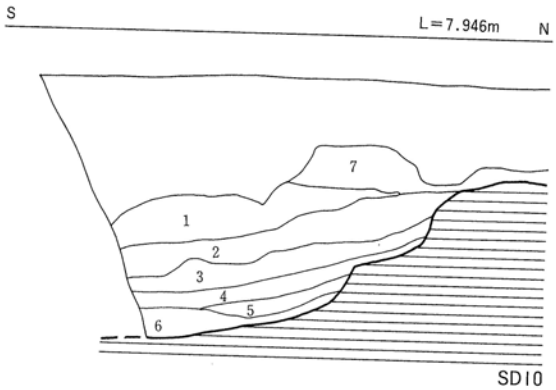
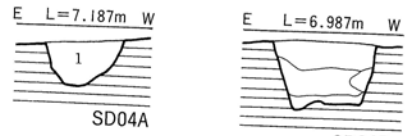


Fig.37 第74次調査溝配置図（縮尺1/300）



0 2m (1/40)

SD10土層名称
1.暗茶褐色粘質土　褐色土を少し含む
2.茶灰色粘質土
3.灰色粘質土に茶褐色土の鉄分粒子、八女ブロック含む
4.3より暗く　八女ブロック少し含む
5.灰色粘質土　八女ブロックを含む
6.青灰色粘質土　地山
7.茶灰色粘質土



SD04-A-土層名称
1.黒色土にブロックを含む

溝SD04（北から）

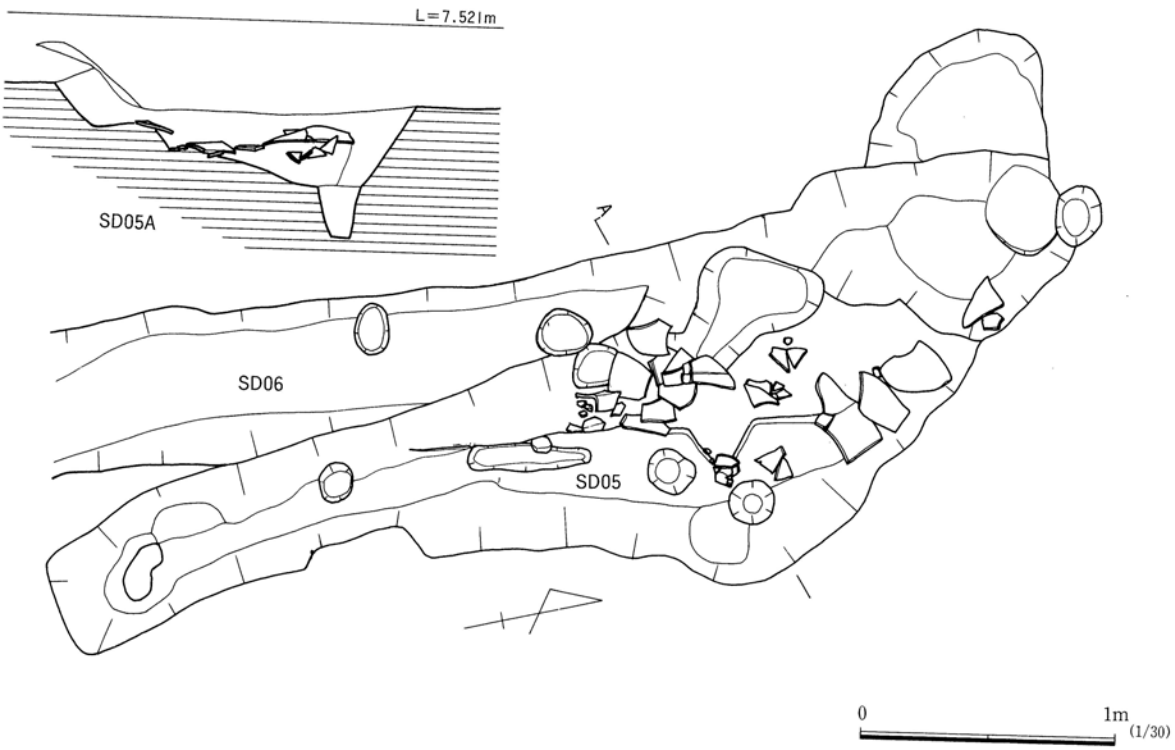


Fig.38　溝SD04・05・10実測図（縮尺1/30・1/40）

溝SD06（北から）

溝SD05・06（北から）

溝SD05・06遺物出土状態（東から）

溝SD07～10（東から）

おり、戦国時代の遺構と考えられる。溝SD01に接合するものと考えられる。

SD03(Fig. 8) 調査区の北側に位置している。住居跡SC03の周溝である。詳細は住居跡の項を参照願いたい。

SD04 (Fig.38) 調査区の東側に位置しており、削平が著しく、西側は消失している。長さ約19.5mまでを確認した。大略西方向から北方向の溝で、西寄り部分が一部途切れている。断面形は逆梯形を呈し、溝の上面の幅は50cm、深さは最大で20cmを測る。覆土は黒色粘質土に八女粘土を含んだ土を主体としている。覆土から弥生土器、土師器坏、壷、甕、須恵器等が出土しており、古墳時代の遺構と考えられる。

SD05(Fig.38) 調査区の南側境界に位置しており、上部を溝SD06から切られている。削平を受けており、長さ約7.5mまでを確認した。大略、南方向から北方向の溝で、切れ切れになりながら南へ流下する。断面形は逆梯形を呈し、溝上面の幅は50～120cm、深さ10～50cmを測る。溝の北側は最大幅120cmを測り、水溜状の袋部を形成している。この部分の両側壁には、須恵器甕片を貼付た状況がみられた。又、底部には最大幅が約80cmの焼土面が広がっていた。

覆土は黒灰色粘質土を主体としている。覆土から土師器、須恵器甕、杯、鉄滓等が出土しており、古墳時代末の遺構と考えられる。

SD06(Fig.38) 調査区の南側境界に位置しており、溝SD05を切っている。北側は現代の建物の基礎で削平されており、長さ約7.4mまでを確認した。大略、北方向から南方向に流下する溝で、排水溝の役目を持っている。断面形は逆梯形を呈し、溝上面の幅は70cm、深さ20cmを測る。覆土は灰褐色粘質土を主体としている。覆土から土師器片、須恵器甕片等が出土しており、古墳時代以降の遺構と考えられる。

SD07(Fig.37) 調査区の南側境界に位置しており、溝SD08を切っている。長さ約12mまでを確認した。大略、西方向から東方向に流下する溝で、東側は幅広くなって、自然に消失する。排水溝の役目を持っているのであろう。断面形は逆梯形を呈し、溝上面の幅は西側で53cm、東側の幅は170cm、深さ17～20cmを測る。覆土は暗茶灰色土を主体としている。覆土から土師器、陶器片、染付、瓦類等が出土しており、江戸時代の遺構と考えられる。

SD08 (Fig.37) 調査区の南側境界に位置しており、溝SD07、09、SK10に切られているため、長さ約５mまでを確認した。大略、東方向から西方向に流下する溝で、東側は削平のため消失する。排水溝の役目を持っていると考えられる。断面形は逆梯形を呈し、溝上面の幅は30cm、深さ17～23cmを測る。覆土は暗い茶灰色粘質土を主体としている。覆土からの遺物の出土はない。江戸時代の遺構と考えられる。

SD09 (Fig.37) 調査区の南側境界に位置しており、溝SD08を切り、土壙SK10に切られる。長さ約11.5mまでを確認した。大略、西方向から東方向に流下する溝で、東側先端を削平により消失する。排水溝の役目を持っているものと考えられる。断面形は逆梯形を呈し、溝上面の幅は60～70cm、深さ5～30cmを測る。覆土は暗い茶灰色粘質土を主体としている。

覆土から土師器、瓦質土器、甕、陶器片、七輪片、瓦類等が出土しており、江戸時代の遺構と考えられる。

SD10 (Fig.38) 調査区の南側境界に位置しており、全体形は不明だが、調査区の東側で検出した溝SD01、02が矩形に連続するもので、同一溝と考えられる。井戸SE04（土壙SK13）と切り合い関係にある。長さ2.5mまでを確認した。大略、東西方向の溝である。断面形は逆梯形と考えられる。溝上面の幅は最大90cm、深さ30cm以上を測る。

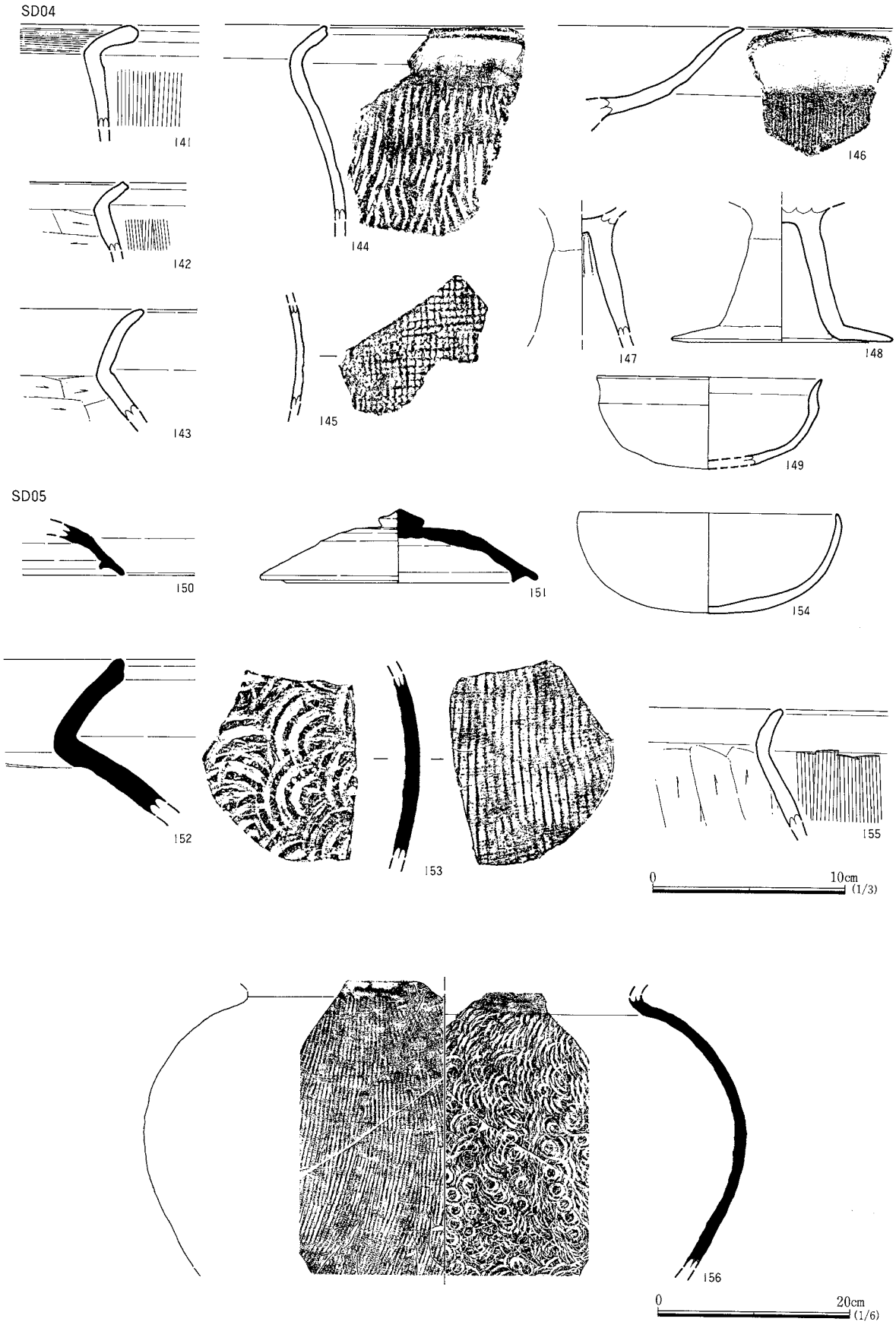


Fig.39　溝SD04・05出土遺物実測図（縮尺1/3・1/6）

Fig.40　溝SD05出土遺物実測図（縮尺1/3・1/1）

覆土は暗い茶灰色粘質土を主体としている。覆土から須恵器、土師器、瓦質土器、伊万里染付、国産陶器、鉄滓、瓦類等が出土している。江戸時代の遺構と考えられる。井戸SE04を切っているものと考えられる。

(11)　溝出土遺物　(Fig.39～43)

SD04出土遺物(141～149)　141は弥生時代後期の甕の口縁部、142～149は土師器で、142～145は甕である。142・143の胴部内面はヘラケズリ調整、144の外面は平行叩き調整、145は須恵器の調整と同じ格子目叩きである。146～148は高坏で、146は坏部、147・148は脚部片である。149は丸底の坏である。141を除き、いずれも6世紀代の所産である。

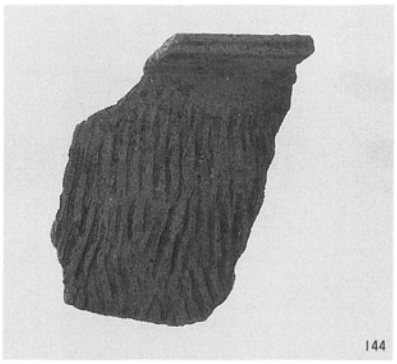
SD05出土遺物（150～158）　150～153・156・157は須恵器である。150・151は坏蓋で、151は擬宝珠形のつまみを有する。152・153・156は甕で、外面はいずれも平行叩き、内面は152・153は青海波の叩き、156は同心円の叩きである。157は横瓶の破片で、胴部外面は細かい平行叩き、底部はカキ目を施す。内面は青海波の叩きである。158は黒曜石製の石鏃未製品である。

SD07出土遺物（159・160）　159は初期唐津焼の碗で、内底見込と畳付に目痕がある。160は軒平瓦片である。瓦当文様の唐草文は退化している。

SD09出土遺物（161・162）　161は唐津系の摺鉢である。162は瓦質土器の甕片である。

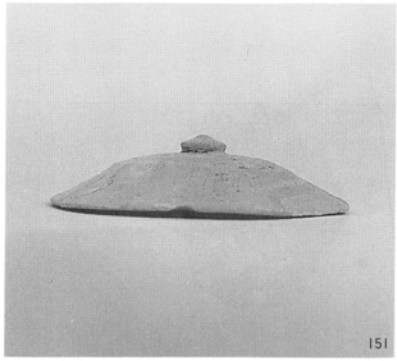
SD10出土遺物（163～189）　163は弥生土器の器台、164・165は須恵器高台付の坏である。167は須恵器甕で、外面に格子目叩き、内面は同心円の叩きである。166は土師器の甑の把手、168は瓦質土器の湯釜である。168の外面上部には印花文がある。169～173は伊万里焼の染付で、169は皿、170～172は碗、173は花瓶である。174～180は国産陶器で、174・175は高取系の碗、176は皿、177～179は摺鉢、180は甕である。181～183は瓦質土器で、181は足鍋、182は花瓶、183は鍋である。182の外面は丁寧に研磨し、上から順に四ツ菱文、菊花文、梅花文を3段に押印する。184・185は平瓦で、185の内外面は粗目のハケ調整を行う。186は丸瓦で、内面に布目が残る。187・188は砂岩製、189は滑石製の砥石である。

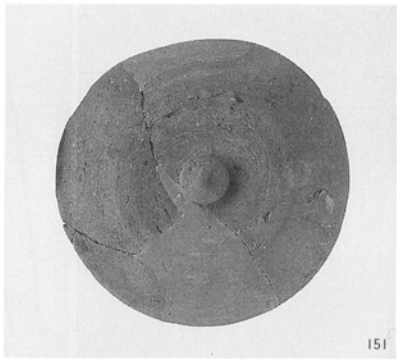
SD12出土遺物(190～193)　190は弥生土器の甕底部片、191は土師器の高台付椀の完形品、192は瓦質土器の足鍋、193は土師器の高坏の脚部片である。


144

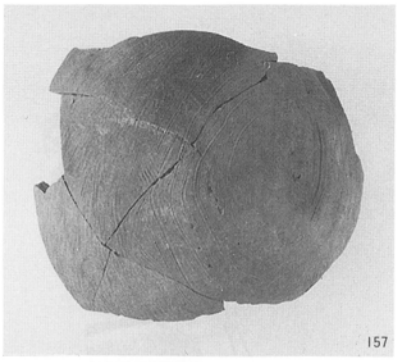
141

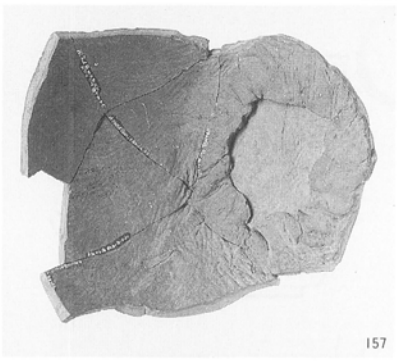
148


151

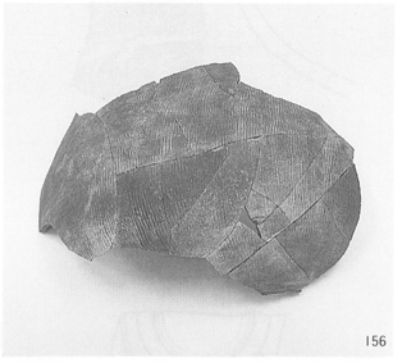

151

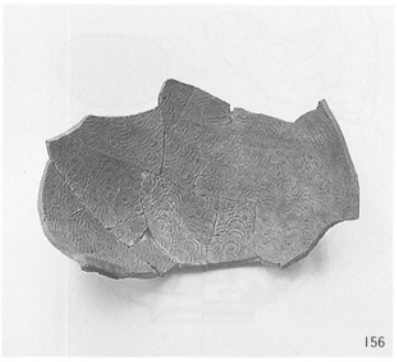
154

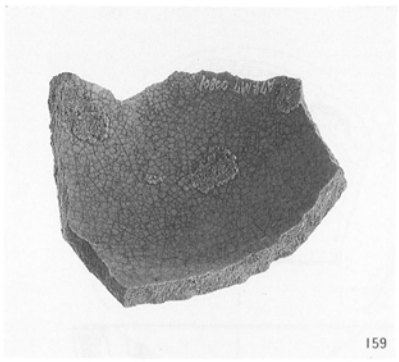

157


157

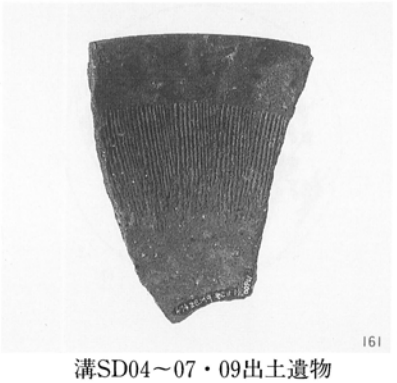
158

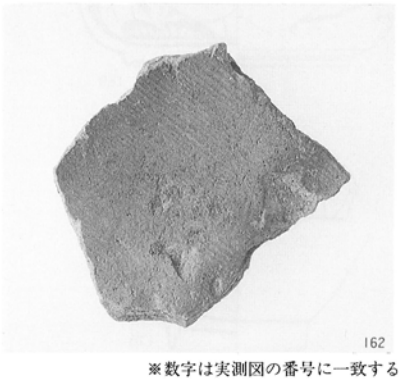

156


156


159

160


161


162

溝SD04～07・09出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する

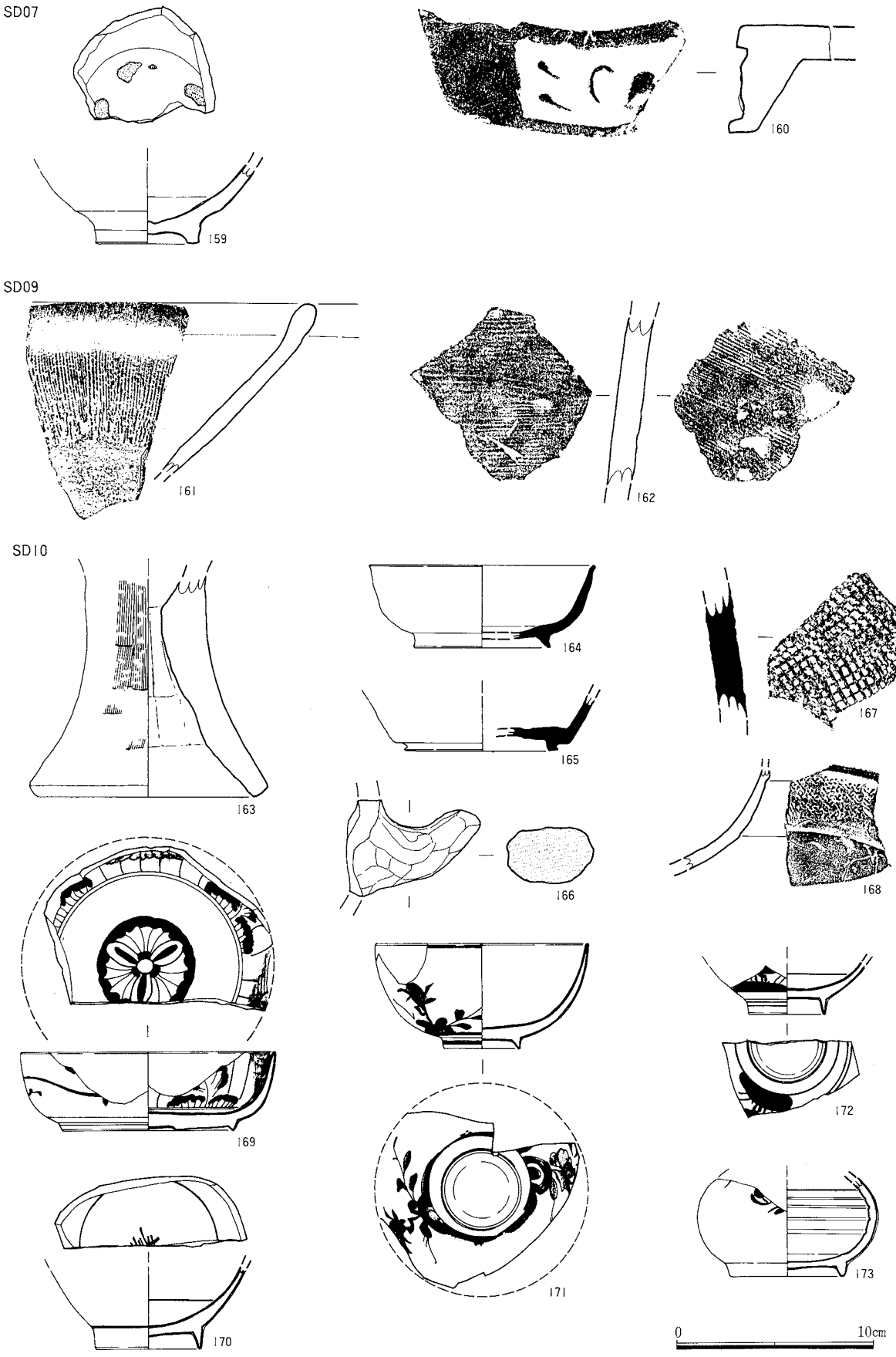


Fig.41　溝SD07・09・10出土遺物実測図（縮尺1/3）

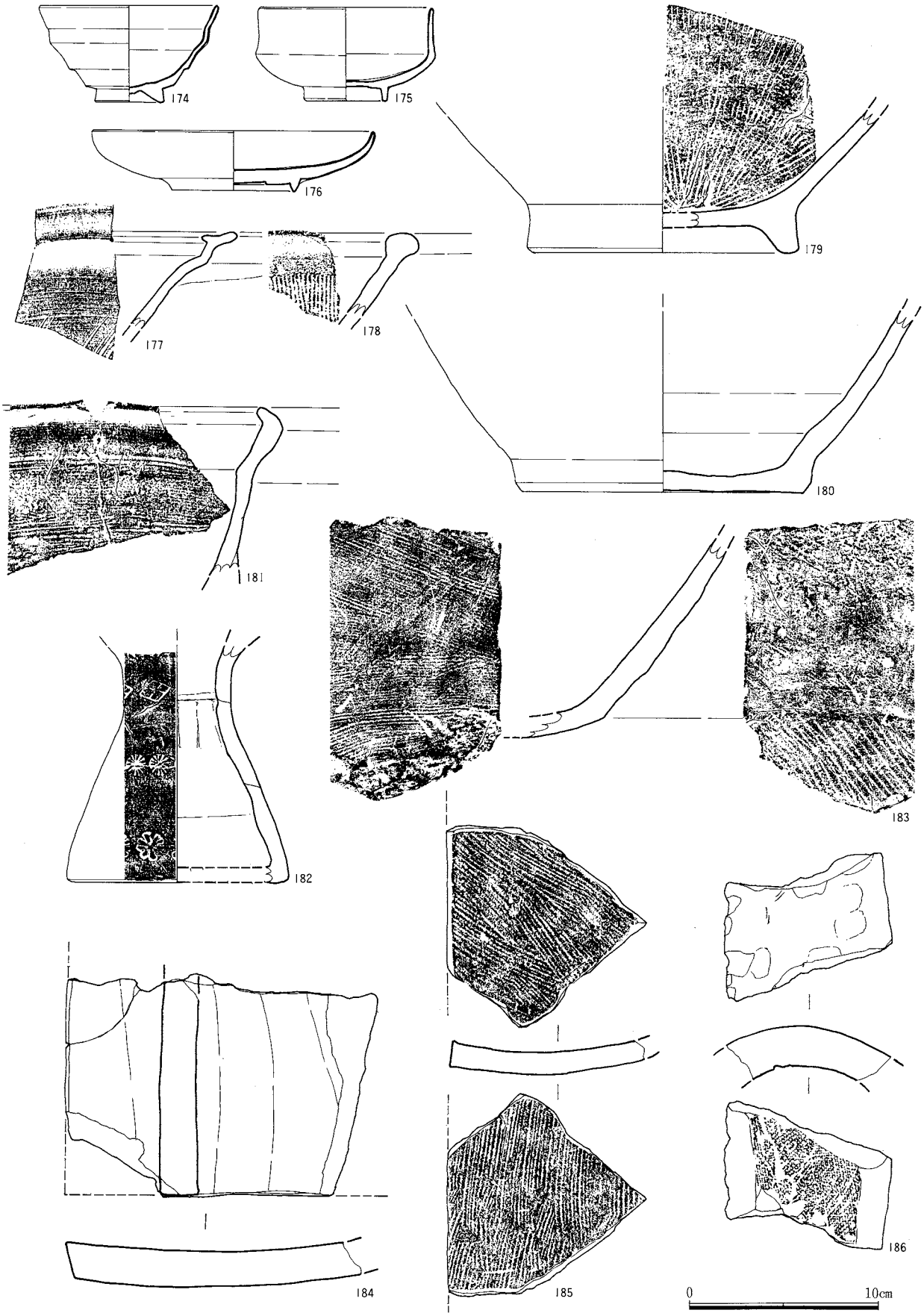
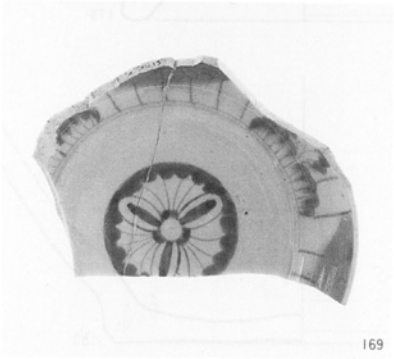


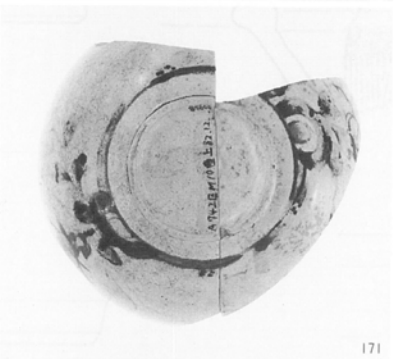
Fig.42　溝SD10出土遺物実測図（縮尺1/3）

164

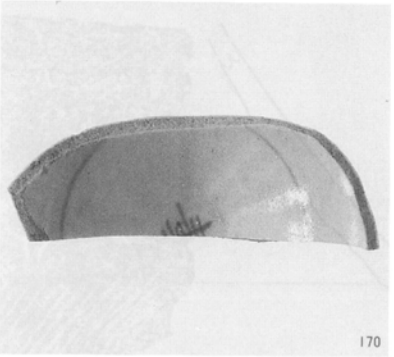
165

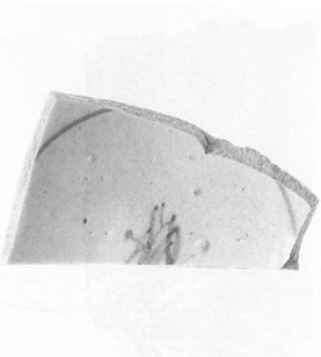
168

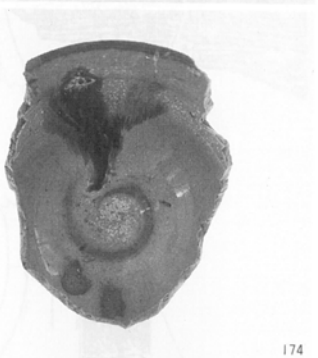

169


171

166


170


172


174

176

175

177

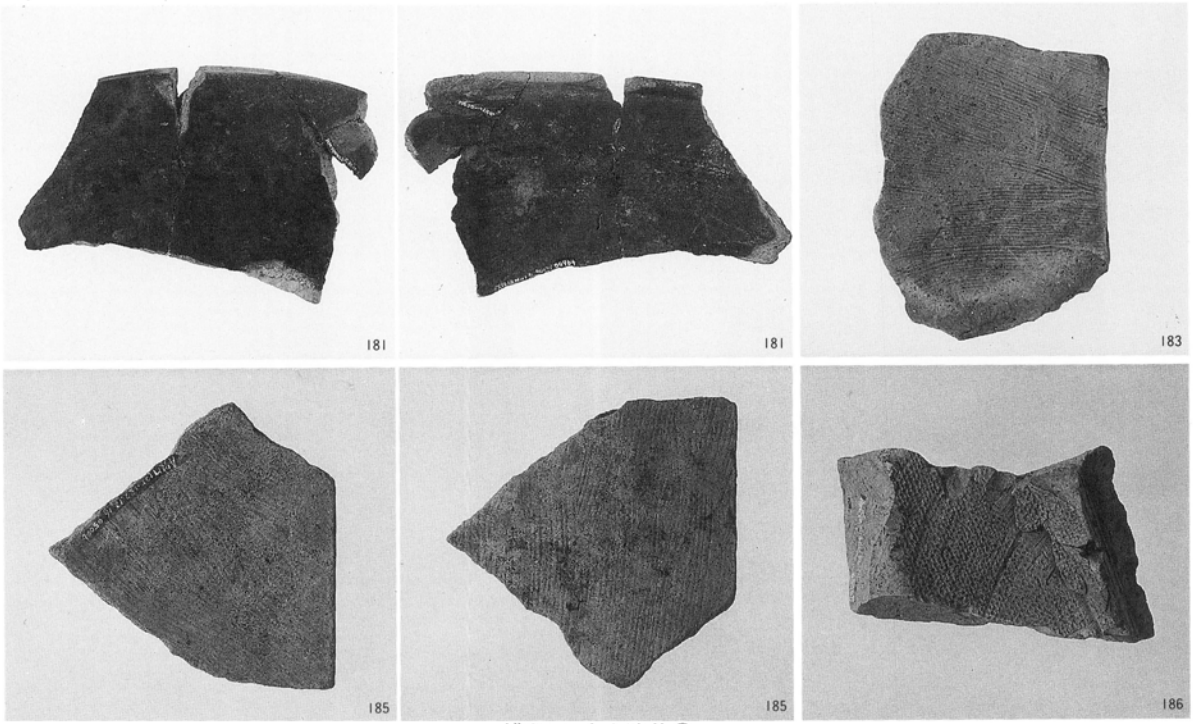
178

179

182

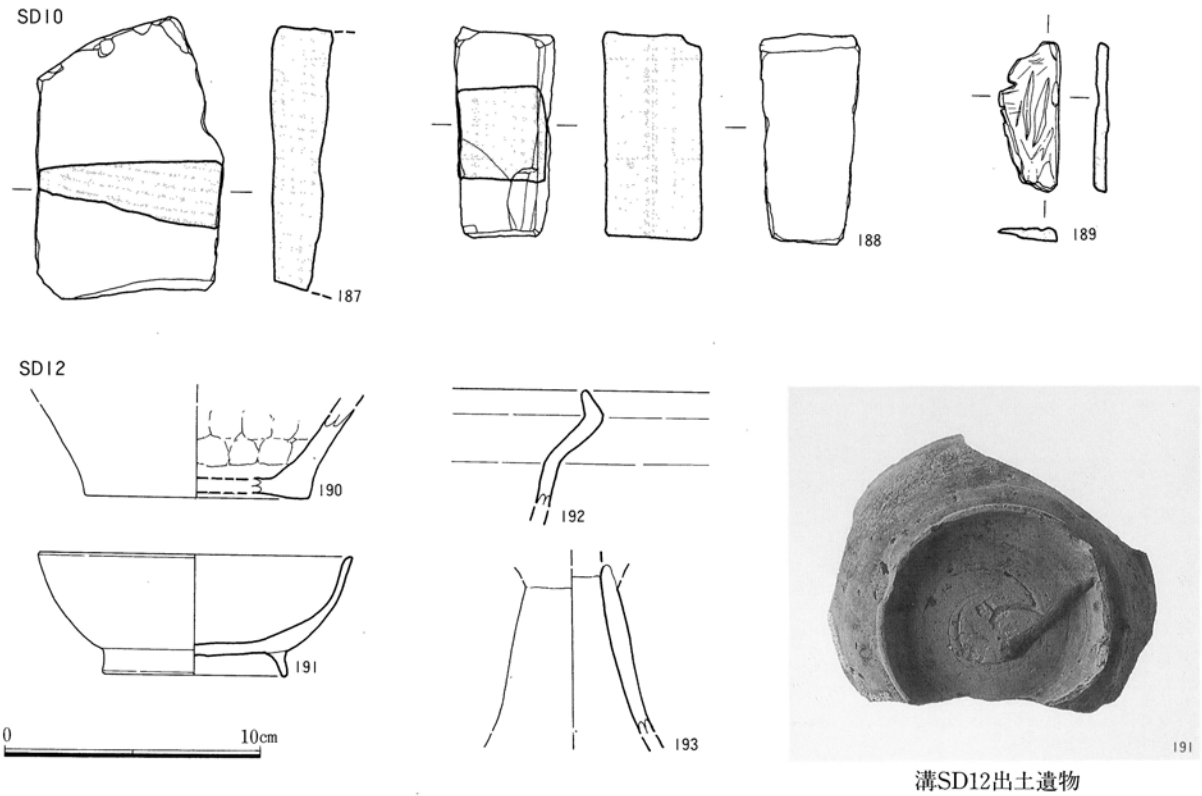
溝SD10出土遺物①

※数字は実測図の番号に一致する



溝SD10出土遺物②

※数字は実測図の番号に一致する



溝SD12出土遺物

Fig.43　溝SD10・12出土遺物実測図（縮尺1/3）

SP232（北から）

SP60遺物出土状態（北から）

SP60遺物出土状態（南から）

SP60遺物出土状態（西から）

(12) 小穴 (SP)

径15～17cmを測るPitを多数検出した。いずれも柱穴と考えられるが、建物として把握することができたのは14棟にとどまった。SP232・SP637からは鎮めとしての遺物が出土している。今回検出したPitの作られた時期は、弥生時代から江戸時代までの幅をもっている。

SP232 (P80) 調査区の南側に所在する。柱穴と考えられ、平面形は隅丸長方形を呈する。長さ45cm、幅33cm、深さ35cmを測る。穴底に土師器皿1枚、坏2枚が地鎮として入れられていた。土師器は糸切り底であり、形状より14世紀頃の所産と考えられる。

SP637 (P80) 調査区の南側に所在する。地鎮のためのPitと考えられる。上面は削平を受けている。平面形は不整円形を呈し、最大径45cm、深さ36cmを測る。Pit内は弥生時代の甕の破片を、面を外にして包み込むように置き、その内側には、器台を入れていた。弥生時代中期後半の土器である。

(13) 小穴 (SP) 出土遺物 (Fig.44・45)

各SP出土遺物 (201～241) 201・208～210は縄文時代晩期の甕片で、201は突帯文土器の口縁部、208～210は底部である。201はSP403、208はSP415、209はSP557、210はSP66出土。202～204は弥生時代中期の壷の口縁部で、202がSP539、203がSP96、204がSP571出土。205～207は甕の口縁部で、205はSP456、206はSP45、207はSP668出土。211～216は弥生時代の甕の底部で、211はSP373、212はSP167、213はSP538、214はSP96、215はSP97、216はSP181出土である。

SP637出土遺物 (217～222) 217～222はSP637から一括して出土した。弥生時代中期後半の土器群で、217～219は甕、221・222は器台、220は蓋である。

223～226は須恵器で、223はSP482、224はSP588、225・226はSP462出土。223は高坏で、高台の脚裾は大きく開く。224は瓶又は小型平瓶の胴部、225・226は甕片である。

SP232出土遺物 (227～229) 227～229はSP232から出土。地鎮具である。いずれも糸切り底で、227は皿、228・229は坏である。小型化しており、坏は口径と底径の比が大きくなりつつある。

230は土師器坏で、SP173出土。231・232は土師器の鉢で、いずれも丸底である。231はSP618出土で、238の砥石が伴う。232はSP540出土。233は白磁碗で、SP152出土。234は瓦質土器の摺鉢で、内面に下し目がある。235は越州窯系青磁碗で、SP719出土。236は滑石製石鍋で、口縁外面の突帯は小さく低い。外面のケズリ痕は幅が狭い。240は玄武岩製の磨製石斧片で、SP513出土。239は敲石で、角が磨滅し、丸みをもつ。SP615出土。241はサヌカイト製の石鏃で、先端を欠く。SP567出土。237は鉄釘片で、SP538出土である。

(14) 包含層出土遺物 (Fig.46)

(251～257) 遺構面上に堆積していた第2層の暗い茶褐色粘質土から出土した遺物で、2次堆積の遺物である。251は須恵器の坏、252は越州窯青磁碗、253は土師器の高坏、254・255は土師器の甑の把手部分である。256は国産陶器の摺鉢、257は砥石である。

(15) 遺構面出土遺物 (Fig.46)

(258～262) 258は備前焼IV類の摺鉢である。259・260は弥生土器で、259は後期の甕形土器、260は壷である。261は形状不明の滑石未製品で、粗い研磨痕がある。262は滑石製の臼玉である。半分欠損している。

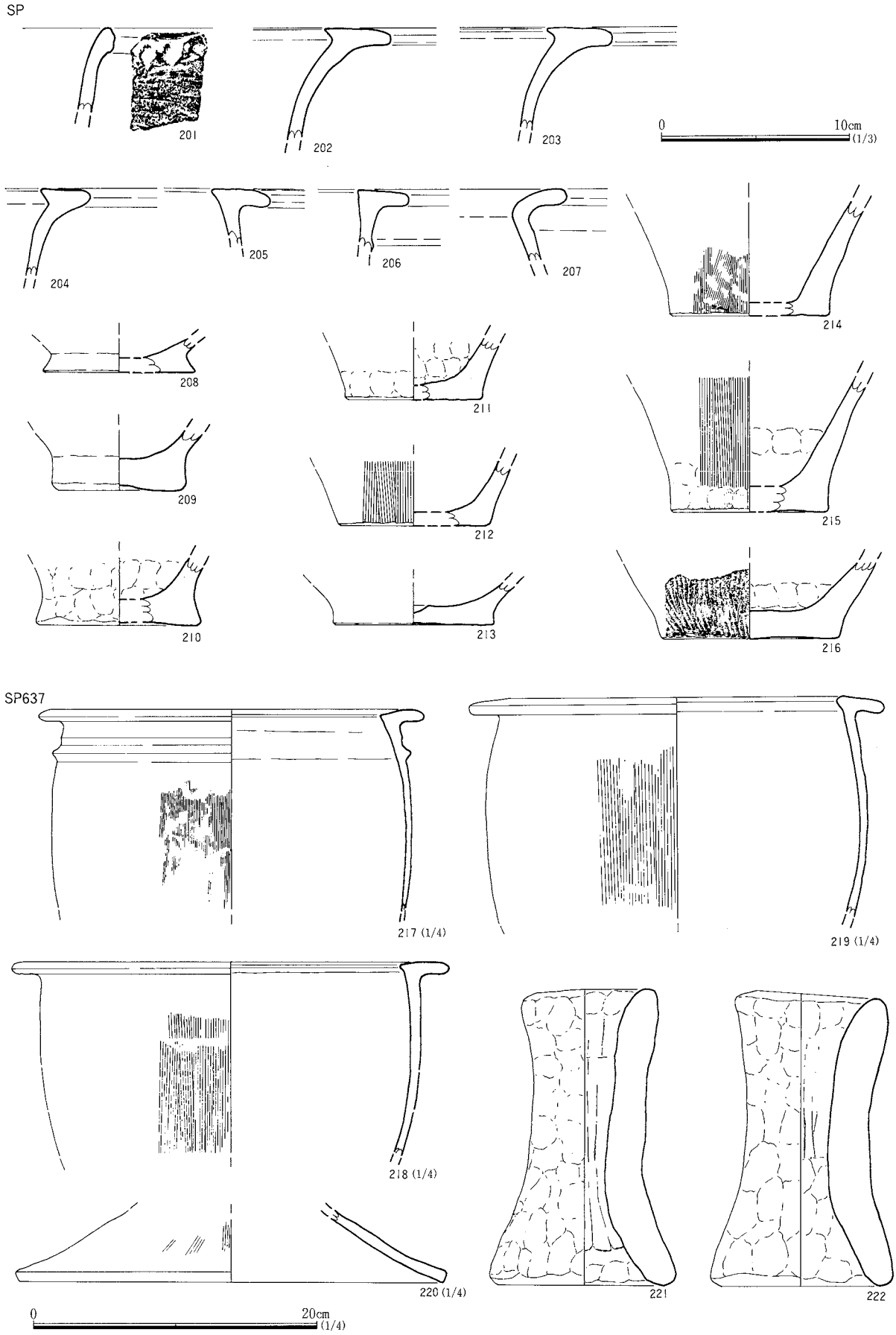


Fig.44　SP出土遺物実測図①（縮尺1/3・1/4）

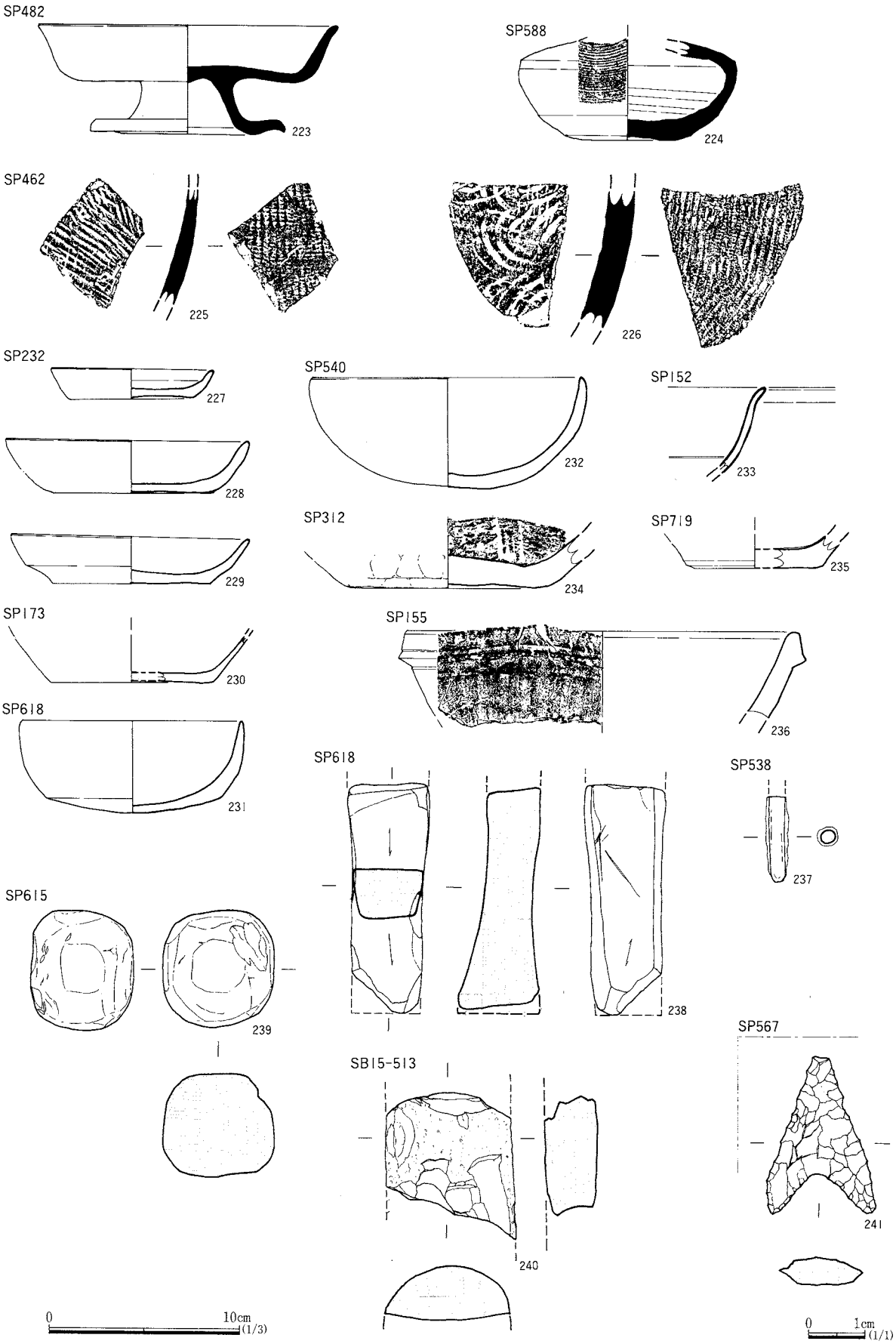


Fig.45　SP出土遺物実測図②（縮尺1/1・1/3）

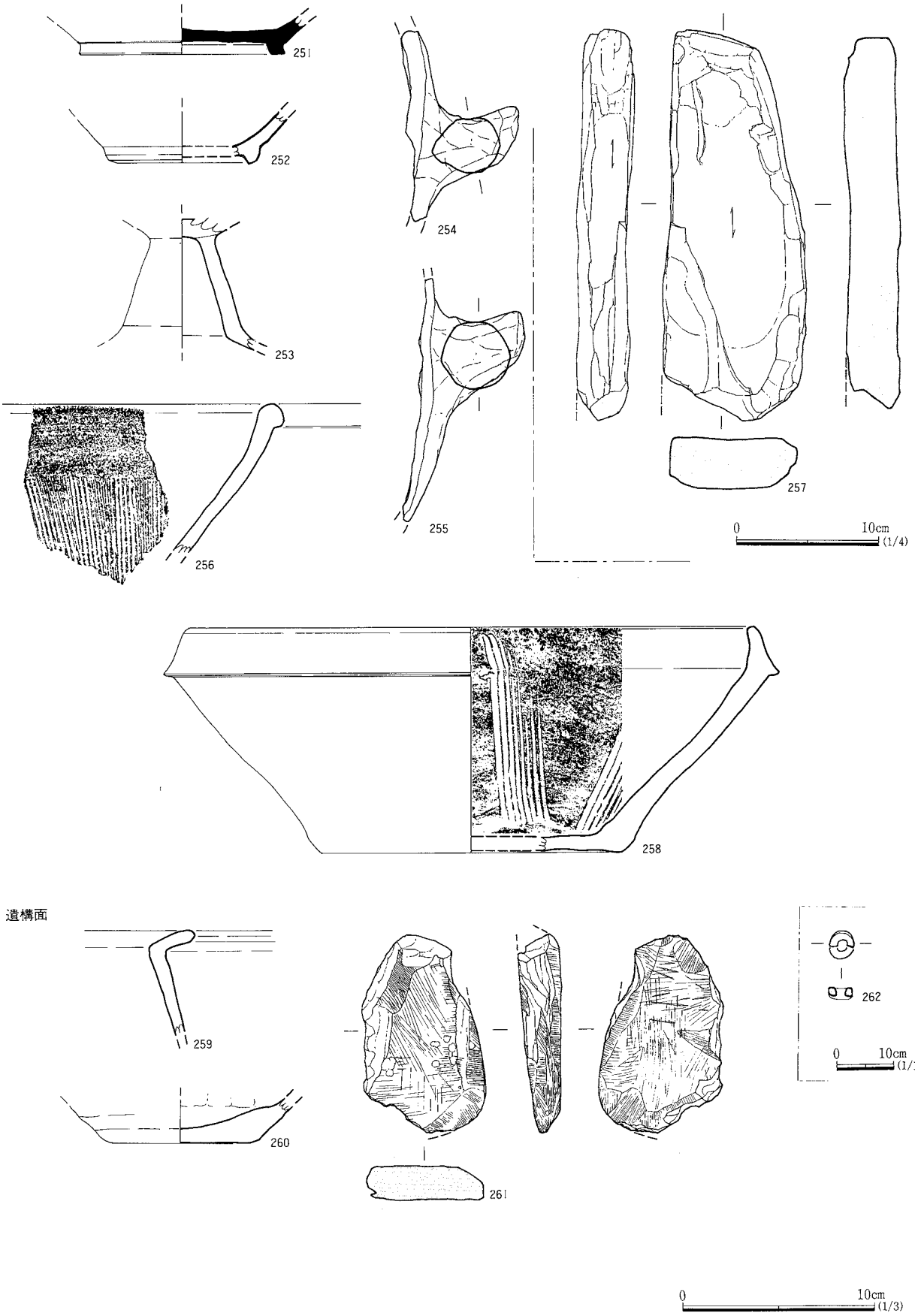
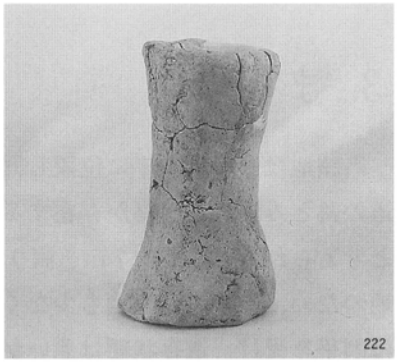
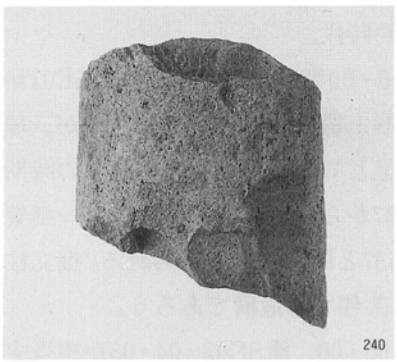


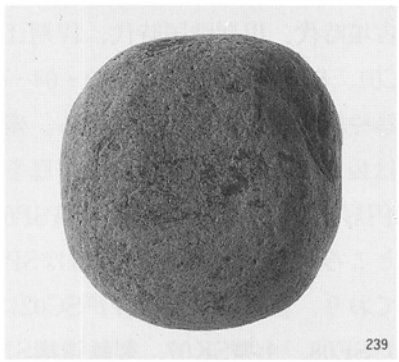
Fig.46　包含層・遺構面出土遺物実測図（縮尺1/1・1/3）

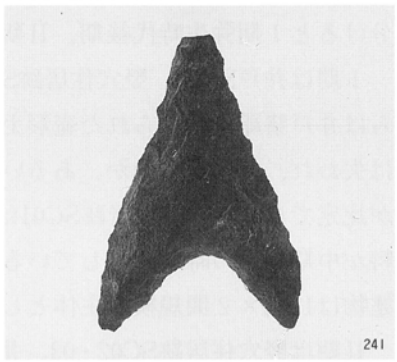
207

208

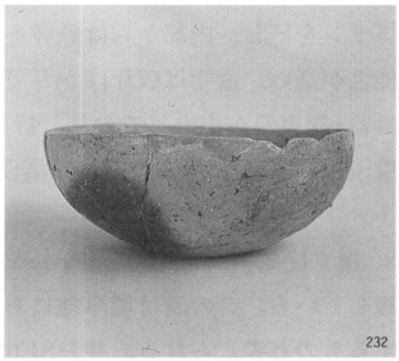

222

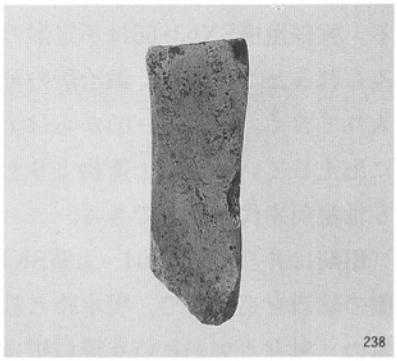

240

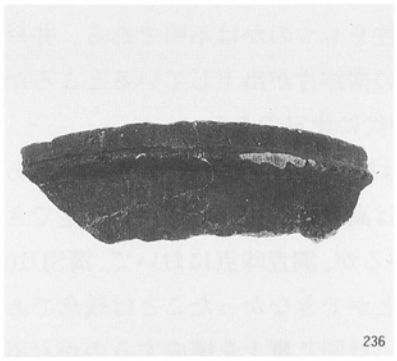

239

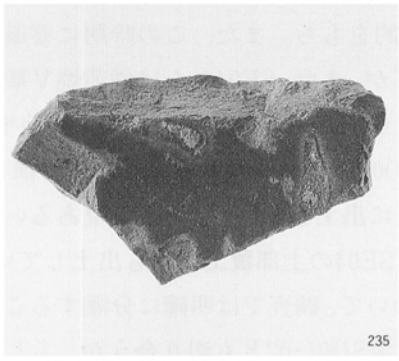

241

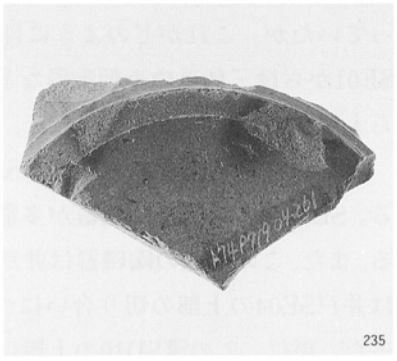
223

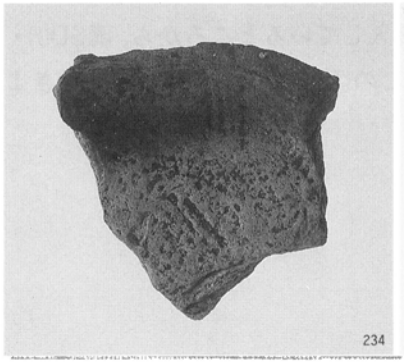

232

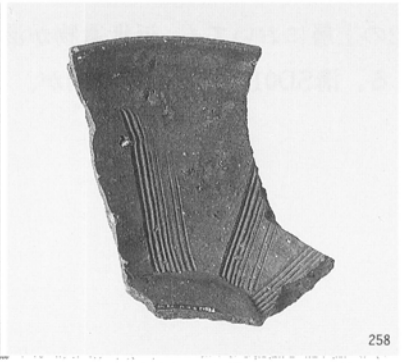

238


236


235


235


234


258

252

SP・包含層・遺構面出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する

3．まとめ

当該地は金屑川左岸に位置し、金屑川の開析により、段丘を形成している。当該地の東側には旧河道の跡とみられる水路が存在する。この水路は地元の伝承では「鬼丸ホゲ」という濠に相当するものと考えられる。標高約７ｍを測り、周辺の水田との比高差は0.4mを測る。この周辺は古くからの集落地のため、従来の調査例も少なく、どの時代の遺構が分布しているのか不明な地域でもある。遺構面は削平を受け、遺存状態は悪いが、弥生時代から江戸時代に亘る遺跡であることが判明した。大きく分けるとⅠ期弥生時代後期、Ⅱ期古墳時代、Ⅲ期戦国時代、Ⅳ期江戸時代。

Ⅰ期は井戸SE02、竪穴住居跡SC01、掘立柱建物SB01・03・04・06・09等が相当する。井戸SE01からは井戸祭祀に用いられた壷形土器や甕形土器が出土している。壷形土器は袋状口縁部をもつが、稜は失われ、丸みをもつか、あるいは袋部の退化がみられる。平底を呈しており、弥生後期後半の時期が比定できる。竪穴住居跡SC01は円形を呈している。祭祀土壙SP637から出土した弥生土器の一括資料が中期後半の時期を示しているところから、この住居跡はほぼSP637と同時期と考えられる。掘立柱建物は17間×２間規模を主体としており、住居跡または井戸SC02に共伴する遺構であろう。

Ⅱ期は竪穴住居跡SC02・03、井戸SE08、土壙SK07、製鉄遺構SX03・06、溝SD03・04・05が相当する。製鉄遺構SX03・06は不定形のプランを呈し、内部からは鉄滓を多量に出土した。鉄滓は鍛冶滓とみられるところから、鍛冶炉の可能性が高い。遺物は破片ばかりで時期比定は困難であるが、Ⅱ期に入れておく。溝SD04・05からは土師器・須恵器が出土しており、特に溝SD05からは大型の甕片が大量に出土している。出土遺物より土壙SK07・溝SD04は６世紀代、溝SD05は７世紀後半代、井戸SE08は５世紀前半代に比定できる。

Ⅲ期は井戸SE01～04、土壙SK12、掘立柱建物SB07等が相当する。溝SD01は調査区の南西から北東側の縁辺を巡る溝で、現水路と重複している。この溝は境界地にあるため規模等は不明であるが、伝承の「鬼丸ホゲ」という濠に相当するものと考えられる。井戸SE01は杵・臼を埋納する井戸祭祀を行っていたが、これがどのように目的をもち、また、この時期に普遍性をもつのかは不明である。井戸SE01からは三島手の李朝陶器などが、また、SE04からは備前焼Ⅴ期の摺鉢片が出土しているところから大略16世紀代の遺構といえる。土壙SD12は足鍋等から16世紀前半代に比定できる。

Ⅳ期は江戸時代であるが、溝SD06～10が相当する。これらの溝は排水溝的な役割をもつものである。SD10からは国産陶磁器が多量に出土している。伊万里焼あるいは高取焼から18世紀代が比定できる。また、この時期の陶磁器は井戸SE04の上部覆土からも出土しているが、調査時点において、溝SD10は井戸SE04の上部の切り合いについて、調査では明確に分離することができなかったことは残念であった。更に、この溝SD10の上層は溝SD01・02とも切り合うか、もしくは同じ覆土を構成するのかも不明である。調査区東側の溝SD01・02の上層においても、近世遺物が混入しているところから、溝SD01・02とSD10は同一遺構とも考えられる。溝SD01・02の埋設時期が、この頃にあったことが推測できよう。

Tab. 3　第74次調査遺構一覧表

（単位：cm）

遺構名	旧遺構名	遺構種類	平面形	断面形	長	幅	深	出土遺物	時期	備考
SK04	D4	土壙	不整楕円形	逆梯形	230	177	40	土師器高坏・甕、須恵器		
SK05	D5	土壙	不整隅丸長方形	逆梯形	130	98	47	土師器、鉄滓、石製品		
SK07	D7	土壙	不整隅丸長方形	逆梯形	430	270+α	37	弥生土器高坏・甕、土師器甕・甑、須恵器、砥石、黒曜石		溝SD04・掘立柱建物SB11に切られる
SK10	D10	土壙	不整長方形	摺鉢状	170+α	400+α	21	土師器、須恵器、中国白磁碗、陶器皿・鉢・摺鉢、染付、土製品人形型、七輪、丸瓦、鉄滓、石製品		溝SD08・09と切り合う
SK11	D11	土壙	不整形	逆梯形	262+α	100	40	弥生土器甕、土師器蓋・甕、土師質土器		井戸SE04と切り合う
SK12	D12	土壙	隅丸長方形	逆梯形	310	275	77	土師器、土師質土器摺鉢、瓦質土器鉢・摺鉢・足鍋、中国白磁皿・碗、石臼・板碑、滑石、黒曜石		
SE01	D1	井戸	不整楕円形	2段掘り	290	245	262	弥生土器蓋・甕、土師器皿・坏、土師質土器鉢・摺鉢・鍋、須恵器甕、陶質土器、瓦質土器摺鉢、中国白磁、三島手碗、平瓦、木製品臼・杵・木札・桶、砥石・板碑、自然木、漆喰		掘立柱建物SB01と切り合う
SE02	D2	井戸	不整楕円形	截頭円錐形	145	130	210	弥生土器高坏・壺・甕・器台・杓子、手捏土器鉢、サヌカイト製石鏃、木製品、自然木、壁、スラッグ		
SE03	D9	井戸	楕円形	円筒形	75	70	77	宝篋印塔・石臼・砥石、自然木		
SE04	D13	井戸	不整楕円形	逆梯形	450	295+α	200	弥生土器壺、土師器坏・高坏・椀・甑、須恵器坏・蓋・甕、内黒土器椀、瓦質土器鉢火舎・湯釜、中国白磁碗・小碗、陶器皿・摺鉢、伊万里染付皿・碗、土製品鞴羽口、丸瓦、鉄滓、砥石・板碑・凹石、木製品桶		
SE08	D8	井戸	不整楕円形	逆梯形	355	117	120	弥生土器甕、土師器高坏・甕・甑、須恵器、土製品蛸壺、砥石・敲石、黒曜石		
SX03	D3	製鉄遺構	不整方形	2段掘り	141	135	11	弥生土器、土師器坏・甕、須恵器、瓦質土器、陶器摺鉢、染付皿・碗・猪口、平瓦・丸瓦、鉄釘、鉄滓、石製品、木炭		
SX06	D6	製鉄遺構	不整形	摺鉢状	150	125	7	土師器、須恵器、鉄滓		
SD01	M1	溝	—	逆梯形又はV字形	1500+α	100+α	90+α	中国白磁、染付	戦国時代	SD01、02は同一溝
SD02	M2	溝	—	逆梯形	800+α	100+α	90+α	中国白磁	戦国時代	SD01、02は同一溝
SD03	M3	溝	—	逆梯形	515+α	13	4	土師器		SC03の周溝
SD04	M4	溝	—	逆梯形	1950	50	20	弥生土器甕、土師器坏・高坏・壺・甕、須恵器甕、鉄製品、石製品、黒曜石	古墳時代	
SD05	M5	溝	—	逆梯形	750+α	50～120	10～50	土師器甕、須恵器坏・蓋・甕・壺・横瓶、鉄滓、石製品、石鏃	古墳時代	
SD06	M6	溝	—	逆梯形	740+α	70	20	土師器高坏・甕、陶器摺鉢		
SD07	M7	溝	—	逆梯形	1200+α	53～170	20	土師器、陶器碗、染付、平瓦・軒平瓦	江戸時代	
SD08	M8	溝	—	逆梯形	500+α	30	17～23	なし	江戸時代	
SD09	M9	溝	—	逆梯形	1150+α	60～70	5～30	土師器、瓦質土器甕、陶器摺鉢、七輪、平瓦・丸瓦	江戸時代	SD01・02と同一溝
SD10	M10	溝	—	逆梯形	250+α	90+α	30+α	弥生土器甕・器台、土師器坏・椀・甕・甑、須恵器坏・蓋・甕、瓦質土器鉢・壺・摺鉢・瓶・鍋・湯釜・火舎、白磁碗、陶器皿・碗・鉢・甕・摺鉢、染付皿・小碗・碗・瓶、七輪、平瓦・丸瓦、鉄滓、砥石、木製品	江戸時代	
SD12	M12	溝	—	—	—	—	—	弥生土器甕、土師器碗・高杯、瓦質土器足鍋		削平されている

Tab. 4　第74次調査遺物一覧表

（単位：cm）

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	器種	口径	底径（高台径）	器高（現存高）	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備　考
15	1	SE01	弥生土器	蓋	—	—	(4.9)	底部は深い上げ底で、高台状を呈する。内面はナデ調整。	胎土に1～2mmの砂を含む。焼成良好。明茶褐色。	つまみ部径6.9cm
15	2	SE01	陶質土器	甕	—	—	(5.5)	外面は縄蓆文の叩きで、2状の沈線を施す。内面はナデ調整。	胎土に1～4mmの砂を少し含む。焼成良好。青灰色。	
15	3	SE01	陶器	碗	—	—	(2.9)	内外面に白象嵌を施す。	素地は精緻。焼成良好。	李朝三島手
15	4	SE01	瓦質土器	摺鉢	—	—	(4.2)	口縁部内面を肥厚させる。内面はナナメ方向のハケ、外面は粗いナデ調整。	胎土に1～3mmの砂を少し含む。焼成良好。	
16	13	SE02 中位	弥生土器	甕	21.0	8.7	26.8	口縁はくの字形に強く外反し、外面は9本単位のタテハケ調整、内面タテ方向のナデ調整	胎土に1～2mmの白い砂を含む。焼成良好、体部外面に煤付着。	完形品
16	14	SE02 下位	弥生土器	壺	14.5	8.1	26.0	稜がつよい。袋状口縁部を有す。体部外面はタテハケ調整。口縁部はヨコナデ調整。頸部はタテナデ調整。	胎土に白い砂を含み、精緻。焼成良好。茶褐色。肩部に黒斑。	完形品
16	15	SE02 底部	弥生土器	壺	11.0	7.4	21.1	袋状口縁部。口縁部外面はヨコナデ調整。体部外面はハケ調整。	胎土に1～3mmの白い砂を多く含む。焼成良好。淡茶褐色～茶褐色。	完形品
16	16	SE02 井戸底	弥生土器	壺	10.7	7.2	21.1~21.3	逆くの字形の袋状口縁部を有し、体部は球体に近い。体部上位はタテハケ調整、体部下位と頸部はタテ方向のナデ調整である。体部に黒斑がある。	胎土に白く細かい砂を含む。焼成良好。やや赤みを帯びた灰色。	完形品
16	17	SE02	弥生土器	壺	13.2	—	14.0	袋状口縁部だが、上位は直口気味。頸部に三角突帯。外面はタテハケ調整。口縁部外面はヨコナデ調整。	胎土に2～3mmの白い砂を多く含む。焼成良好。明茶褐色。	
16	18	SE02	弥生土器	壺	—	7.0	9.0	体部上位を欠く。球体に近く、上げ底である。外面はヘラミガキ痕がある。	胎土は精緻。焼成良好。外面は淡灰茶色、内面は暗灰色。	
16	19	SE02	弥生土器	壺	—	7.4	(3.7)	平底で、内外面はナデ調整。	胎土に1～2mmの砂を含む。焼成良好。淡茶褐色。	
17	20	SE02	弥生土器	甕	13.5	7.5	26.4~26.8	体部は長胴で、平底である。口縁部は、如意形を呈し、端部は丸みをもつ。体部内外面は粗いタテナデ調整。口縁部内外面はヨコナデ調整。	胎土は精緻。焼成良好。体部下位に黒斑。	完形品
17	21	SE02 底部	弥生土器	壺	9.6~10.5	7.8	21.8~22.0	口縁部は直口気味の袋状を呈する。体部外面はタテハケ調整で、口縁部内外面・体部内面は粗いナデ調整。	胎土に2～3mmの白い砂を含む。焼成良好。茶灰色。	
17	22	SE02 底部	弥生土器	壺	15.0	8.6	28.9~29.1	口縁部は直口するが、端部が袋状に内弯する。頸部に三角突帯。外面はタテハケ調整。底部に焼成後の穿孔1ヶ所あり。	胎土は精緻。焼成良好。	完形品
17	23	SE02	弥生土器	鉢	—	8.8	(8.0)	平底で、体部の立ち上がりが丸みをもつ。外面はタテハケ調整。	胎土に1～4mmの砂を少し含む。焼成やや不良。淡灰褐色。	
17	24	SE02	弥生土器	器台	—	—	(8.7)	筒部片。外面はヘラミガキ、内面にはしぼり痕が残る。	胎土に1～2mmの砂を少し含む。焼成は堅緻。淡灰褐色。	
17	25	SE02	弥生土器	器台	—	10.0	(6.9)	脚端部を若干肥厚させる。内面はタテハケ調整、内面はナデ調整。	胎土に1～2mmの砂を含む。焼成良好。淡茶褐色。	
17	26	SE02	手捏土器	小型鉢	5.2	2.4	(4.1)	平底で、口縁部は小さく外反する。内外面はナデ調整。外面上位に指頭圧痕。	胎土に1mmの砂を少し含む。焼成良好。淡褐色。	
17	27	SE02	弥生土器	杓子	—	—	—	木杓子の柄。断面形は不整円形で、外面はナデ調整。	胎土に1～3mmの砂を少し含む。焼成やや不良。灰褐色。	把手長さ6.2cm、径1.8cm
20	39	SE04 第14層上	弥生土器	壺	—	—	(3.5)	平底で、外面はタテハケ調整、内面はナデ調整。	胎土に1～3mmの砂を多く含む。焼成良好。淡茶褐色。	
20	40	SE04 中層	内黒土器	椀	—	(7.2)	(2.2)	高台は外へ強く張る。内外面は磨滅している。	胎土に1～3mmの砂を少し含む。焼成やや軟。外面は淡褐色、内面は黒灰色。	

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	器種	口径	底径(高台径)	器高(現存高)	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
20	41	SE04	白磁	小碗	—	(2.8)	(2.7)	高台は細く、内側の削りは深い。高台外面まで施釉。	素地は淡灰色で精緻。焼成良好。透明釉、淡灰色。	伊万里
20	42	SE04 中層	須恵器	坏	—	(8.8)	(1.9)	高台は高く、直立気味。体部と高台内外面はヨコナデ調整。	胎土に1mm前後の砂を少し含む。焼成良好。青灰色。	
20	43	SE04 中層	須恵器	坏蓋	—	—	(1.4)	口縁部内側のかえりは直立し、口縁部端より下に出る。内外面はヨコナデ調整。	胎土に1～2mmの砂を含む。焼成良好。黒灰色。	
20	44	SE04	染付	碗	10.0	(4.0)	(4.9)	体部は半球体を呈し、高台は細く、低い。外面に呉須で草花文を描く。	素地は白灰色で精緻。焼成良好。わずかに青みを帯びた半透明釉。	伊万里
20	45	SE04 中層	須恵器	甕	—	—	—	外面に平行叩き痕。内面は平行の当て具痕がある。	胎土に細かい砂を少し含む。焼成やや軟。灰色。	
20	46	SE04	陶器	皿	19.2	(10.0)	4.4	蛇ノ目高台。体部は丸みをもち、端部は内弯する。外面の体部下位まで施釉。内面見込みは輪状に釉を掻き取る。	素地は精緻。焼成良好。黄灰白色釉。	福岡産か
20	47	SE04 上層	染付	皿	14.0	(7.0)	2.9	断面が三角形の高台で、内外面に施釉。高台畳付のみ削りとる。内面には斜格子文を施す。内底にコンニャク版あり。	素地は白灰色。焼成良好。わずかに青みを帯びた半透明釉。	伊万里
20	48	SE04 中層	陶器	摺鉢	—	—	(6.1)	口縁部外面を肥厚させ、直口させる。下し目は4本以上。	素地に1～2mmの砂を少し含む。焼成良好。暗灰色～茶灰色。	備前Ⅴ期16C前
20	49	SE04 第10層	瓦質土器	鉢	60.0～	—	(10.9)	直口気味の口縁部を肥厚させ、丸みをもたせる。口縁部外面はヨコハケ調整。外は磨滅している。	胎土に1～2mmの砂を多く含む。焼成不良。淡黒灰色～茶褐色。	
20	50	SE04 中層	瓦質土器	湯釜	—	—	(7.9)	口縁部は直口し、肩部は耳を貼り付ける。体部内面に指頭圧痕がある。耳の孔径は0.8cmである。	胎土に1～2mmの砂を少し含む。焼成良好。淡茶褐色。	
20	51	SE04 中層	土製品	鞴羽口	—	—	—	現存長7.6cm、径5.5cm、孔径2.2cm。外面に指頭圧痕がある。	胎土に砂粒を含む。灰褐色。二次火を受け、部分的に褐色を呈する。焼成良好。	
24	78	SE08	土師器	甕	18.8	—	(6.4)	口縁部は外反し、端部は薄くなる。口縁部と体部の境は内面に強い段をもつ。外面はタテハケ調整。口縁部内面はヨコハケ調整。体部内面はヘラケズリ調整。	胎土に砂を殆ど含まない。焼成良好。茶褐色。	5C代
24	79	SE08 第1層	土師器	甕	—	—	(13.7)	口縁部はくの字形に外反し、内面に強い稜をもつ。体部内面はヘラケズリ調整。口縁部内外面はナデ調整。	胎土に1～3mmの砂を含む。焼成やや軟。外面は褐色、内面は茶褐色。	5C代
24	80	SE08 第2層	土師器	高坏	—	—	(6.6)	脚部片で、ラッパ状に広がる。裾部の屈折は強い。内外面ナデ調整。	胎土は精緻。焼成やや軟。淡茶褐色。	5C代
24	81	SE08	土製品	蛸壺	6.0	—	8.5	内面下部はヘラによる掻き取りを行う。1.4cm×1cmの孔を1ヶ所もつ。外から内への穿孔。外面に指圧痕が残る。	胎土に1～2mmの砂を多く含む。焼成やや軟。淡褐色。	
27	101	SK07	土師器	甕	—	—	—	外面に格子目叩き、内面は不整方向のナデ調整。	胎土に砂を含み、やや細かい。焼成良好。外面は茶褐色、内面は暗褐色。	須恵器の成形手法6C代
27	102	SK07	土師器	甕	—	—	—	外面はタテ方向の平行叩き、内面はナデ調整。	胎土に砂を含み、やや粗い。焼成やや軟。明茶色。	須恵器の成形手法6C代
27	103	SK07	土師器	甑	—	—	(17.7)	底部は丸底気味で、体部は直線的に立ち上がる。底部に径2cmの穿孔がある。また、体部上位に把手を付ける。内面はヘラケズリ調整、外面はハケ調整である。	胎土に大粒の砂を含み、やや粗い。焼成軟。外面は暗灰色、内面は茶褐色。	6C代
27	105	SK10	白磁	碗	—	(4.6)	(2.3)	高く細い高台、釉は高台外面まで施し、内底見込みは輪状に掻き取る。	素地は白灰色で精緻。焼成良好。青色を帯びた透明釉。	中国白磁碗Ⅴ類
27	106	SK10	陶器	摺鉢	—	(13.8)	(4.8)	高台は直立し、内外面に施釉する。内面の下し目は7本単位である。	素地に大粒の砂を含み、やや粗い。焼成良好。露胎は褐茶色で、濃茶色釉。	江戸時代

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	器種	口径	底径(高台径)	器高(現存高)	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
27	107	SK12	瓦質土器	足鍋	25.0	—	(10.5)	脚を欠く。口縁部はくの字形に外反し、内面に強い稜をもつ。口縁端部は肥厚させ、平坦部をつくる。	胎土に砂を少し含み、やや細かい。焼成やや軟。外面は灰茶色、内面は灰色。	16C代
27	108	SK12	瓦質土器	摺鉢	26.8	—	(9.0)	体部は直線的に開き、口縁部内面を肥厚させ、平坦部をつくる。内外面はナデ調整。内面には11～13本の下し目がある。	胎土に砂を多く含み、やや粗い。焼成良好。淡灰茶色。	16C代
36	121	SB01-674	縄文土器	甕	—	—	—	突帯文の口縁部で、刻目を施す。内外面磨滅。	胎土に白い砂を多く含む。焼成良好。外面は淡茶灰色、内面は暗灰茶色。	晩期
36	122	SB03-646	弥生土器	壺	—	—	—	口縁部外面を肥厚させ、緩い段を形成している。	胎土に白い砂を多く含む。焼成良好。茶褐色。	
36	123	SB03-67	弥生土器	壺	30.0	—	(3.6)	L字形の口縁部で、内側の稜は丸みをもつ。外面はタテハケ調整、内面はナデ調整。	胎土に2～3mmの白い砂を含む。焼成良好。淡茶褐色。	
36	124	SB05-614	弥生土器	甕	—	—	—	鋤形の口縁部で、内側を肥厚させる。内外面はヨコナデ調整。	胎土は精緻。焼成良好。茶灰色。	
36	125	SB06-19	須恵器	甕	—	—	—	外面は細い平行叩き。内面は同心円状の当て具痕。	胎土は精緻。焼成良好。青灰色。	
36	126	SB06-107	須恵器	甕	—	—	—	外面は柄子目叩き。内面は青海波の当て具痕。	胎土は精緻。焼成良好。灰色、外面はやや暗め。	
36	127	SB06-19	須恵器	甕	—	—	—	外面は浅い格子目叩き。内面は青海波の当て具痕。	胎土に砂を少し含む。焼成良好。淡灰色。	
36	128	SB08-457	弥生土器	壺	—	—	(5.4)	袋状口縁部片で、開口部が大きい。内外面はヨコナデ調整。	胎土に大粒の砂を含み、粗い。焼成やや軟。明茶褐色。	
36	129	SB10-489	須恵器	甕	—	—	—	外面は格子目叩き。内面は青海波の当て具痕。	胎土に砂を含み、精緻。焼成良好。外面は淡灰茶色、内面は褐茶色。	
36	130	SB12-496	弥生土器	甕	—	—	—	くの字形口縁部片で、外側が肥厚する。	胎土に大粒の砂を含み、やや粗い。焼成良好。明茶褐色。	
36	131	SB12-47	土製品	有孔円盤	—	—	—	現存長4.3cm、現存幅3.2cm、現存厚0.6～0.8cm。復原径は約5.5cmと考えられる。中央が厚く、端部は徐々に薄くなり、丸みをもたせていることから、容器の蓋とは考えられない。孔径0.45～0.25。	胎土は大粒の砂を多く含み、精緻。焼成軟。明茶褐色。	
36	132	SB11-608	弥生土器	甕	—	—	(2.0)	くの字形口縁部片で、外側が肥厚する。	胎土に大粒の砂を含み、やや粗い。焼成良好。外面は茶色、内面は明茶褐色。	
36	133	SB11-676	弥生土器	甕	22.0	—	(13.6)	口縁部はくの字状に外反する。脚部上位に三角突帯を貼り付ける。口縁部端部と突帯に刻目を施す。外面の体部下位はタテハケ調整、上位はヨコナデ調整。体部の内面はナデ調整。	胎土に大粒の砂を多く含み、粗い。焼成軟。暗茶色。	
39	141	SD04	弥生土器	甕	—	—	(5.4)	くの字形の口縁部。外面はタテハケ調整。口縁部内側はヨコハケ調整。	胎土に1～2mmの砂を少し含む。焼成良好。淡褐色。	
39	142	SD04	土師器	甕	—	—	(3.6)	くの字形の口縁部で、内側に強い稜がある。体部外面はタテハケ調整、内側はヘラケズリ調整。	胎土に1～2mmの砂を少し含む。焼成良好。褐色。	
39	143	SD04 北	土師器	甕	—	—	(5.9)	口縁部は外弯する。体部内面はヘラケズリ調整。	胎土に1～2mmの砂を多く含む。焼成やや不良。明茶褐色。	磨滅
39	144	SD04	土師器	甕	—	—	(10.3)	如意形の口縁部で、体部外面は平行叩き、口縁部はヨコナデ調整である。口縁端部に沈線がある。内面は磨滅。	胎土に1～2mmの砂を含む。焼成やや不良。褐色。	須恵器の調整方法
39	145	SD04 北	土師器	甕	—	—	—	外面は格子目叩き、内面は磨滅。	胎土に1～2mmの砂を少し含む。焼成良好。外面は淡明茶褐色、内面は淡褐色。	須恵器の調整方法
39	146	SD04 北	土師器	高坏	—	—	(5.0)	坏部片で、底部はタテハケ調整、口縁部はヨコナデ調整である。	胎土に1mm前後の砂を少し含む。焼成良好。明茶褐色。	

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	器種	口径	底径(高台径)	器高(現存高)	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
39	147	SD04	土師器	高坏	—	—	(6.2)	筒部片である。体部中位はふくらみをもっている。内面はヘラケズリ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。淡茶褐色。	磨滅
39	148	SD04	土師器	高坏	—	11.6	(7.1)	坏部を欠く。裾部は水平に強く屈折する。内外面ヨコナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。明淡茶色。	
39	149	SD04	土師器	坏	11.8	—	(4.6)	体部は半球体を呈し、口縁部を小さく外反させる。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成不良。淡明茶褐色。	
39	150	SD05	須恵器	坏蓋	—	—	(2.7)	口縁部内側のかえりは小さく、断面三角形状を呈する。内外面はヨコナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。青灰色。	
39	151	SD05	須恵器	坏蓋	14.6	—	3.8	天井部は平坦に近く、擬宝珠形のつまみが付く。口縁部内側のかえりは小さい。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成不良。淡茶褐色。	須恵器生焼け。つまみ部径2.4cm。
39	152	SD05	須恵器	甕	—	—	8.2	くの字形に外反した口縁端部をつまみ出す。体部外面は平行叩き、内面は青海波の当て具痕。口縁部内外面はヨコナデ調整。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成不良。白灰色。	須恵器生焼け
39	153	SD05	須恵器	甕	—	—	9.7	外面は平行叩き、内面は青海波の当て具痕。	胎土に1～2㎜の砂を含む。焼成不良。濃灰色。	須恵器生焼け
39	154	SD05	土師器	坏	13.5	—	5.3	体部は半球体に近く、口縁端を内側に折り込む。底部はヘラケズリ調整、内外面はナデ調整。	胎土に1～4㎜の砂を含む。焼成やや軟。淡明茶褐色。	5C中磨滅
39	155	SD05	土師器	甕	—	—	(6.2)	体部は卵形状。口縁部は小さく外反する。体部内面はタテ方向のケズリ、外面はタテハケ調整。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好。淡明茶褐色。	
39	156	SD05	須恵器	甕	—	—	(28.4)	外面はタテ方向の平行叩き、内面は同心円の当て具痕。	胎土に砂を少し含み、精緻。焼成良好。小豆色を帯びた暗灰色。	
40	157	SD05	須恵器	横瓶	—	14.6	13.0	口縁部・体部の大部分を欠く。底部の貼り合わせは外部から押し当てる。外面は粗い平行叩きとカキ目、内面は青海波の当て具痕。	胎土に砂を殆ど含まない。焼成良好。外面は暗青灰色～茶褐色、内面は暗青灰色。	
41	159	SD07	陶器	碗	—	(4.8)	(4.1)	断面コの字形の削り出し高台。内底と畳付に目痕。畳付は釉の掻き取り。	素地は淡茶色で、やや粗い。焼成良好。淡緑灰色～淡茶灰色。	初期唐津焼
41	161	SD09	陶器	摺鉢	—	—	(8.7)	口縁端部を丸く肥厚させる。内外面の釉は薄い。内面の下し目は11本単位。内底部は使用により磨滅。	胎土に1～3㎜の砂を少し含む。焼成良好。褐色。	唐津焼
41	162	SD09	瓦質土器	甕	—	—	—	内外面ともに粗めのハケ調整。	胎土に砂を少し含み、やや細かい。焼成良好。外面は淡灰色、内面は濃灰色。	
41	163	SD10上層	弥生土器	器台	—	11.0	(11.5)	裾部は強く開く。外面はタテハケ調整。磨滅著しい。	胎土に1～3㎜の砂を多く含む。焼成良好。淡灰褐色。	
41	164	SD10上層	須恵器	坏	11.4	(7.0)	4.3	断面三角形の高台で、底部と体部の境は丸みをもつ。内外面はヨコナデ調整。	胎土に1～2㎜の砂を多く含む。焼成やや不良。灰色。	
41	165	SD10直上	須恵器	坏	—	(7.8)	(2.9)	断面コの字形の低い高台。底部と体部の境は強い稜をもつ。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。暗青灰色。	
41	166	SD10上層	土師器	鍋	—	—	—	把手で、断面形は楕円形を呈する。 全長6.8cm、幅4.4cm、厚さ2.9cm。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成やや軟。淡灰褐色。	
41	167	SD10直上	須恵器	甕	—	—	(7.0)	外面に格子目叩き、内面に同心円文の当て具痕。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。青灰色。	
41	168	SD10直上	瓦質土器	湯釜	—	—	(5.2)	体部は丸みをもち、中位に小さな突帯を貼り付ける。突帯下半に花文のスタンプ。内面はヨコナデ調整。	胎土は精緻で、灰褐色。焼成やや軟。黒灰色。	
41	169	SD10直上	染付	皿	12.9	(8.6)	4.1	低い高台の内側をさらに円形に削り込む。体部外面は唐草、内面は花文、見込みに花文を描く。	素地は白灰色。焼成良好。透明釉。	伊万里17C後半
41	170	SD10上層	染付	碗	—	(5.2)	4.3	細く高い高台から、体部はやや直線的に立ち上がる。内底見込みに沈線1条。内面に寿文。	素地は白灰色でやや粗い。焼成良好。わずかに青みを帯びた透明釉。	伊万里

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	器種	口径	底径(高台径)	器高(現存高)	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
41	171	SD10 上層	染付	碗	10.8	(3.8)	5.5	小さく低い高台。体部は半球体を呈す。外面に草花文を施す。	素地は白灰色。焼成やや軟。透明釉。	伊万里
41	172	SD10 下層	染付	碗	—	(4.0)	(2.7)	高台は細く、高い。体部は丸みをもつ。外面に草花文を配する。	素地は淡茶色。焼成良好。白色釉。	伊万里
41	173	SD10 上層	染付	瓶	—	(5.8)	(5.1)	断面三角形の高台で、体部は球体を呈する。畳付を除き、外面に施釉。外面に呉須文様。	素地は淡灰色で精緻。焼成良好。灰色。	伊万里
42	174	SD10 上層	陶器	碗	9.4	(3.6)	5.2	鉢形に開く器形で、腰は稜をなす。高台の削りは深く、断面三角形を呈する。釉は、体部外面下位まで施す。	素地は白茶色で精緻。焼成良好。白灰色釉。口縁部には鉄釉を塗布。露胎部は褐色に発色。	高取系
42	175	SD10 下層	陶器	碗	9.2	(4.2)	5.0	胴部は筒形で、腰は中位にある。釉は畳付を除き、全面に施釉。	素地は暗茶褐色で精緻。焼成良好。下地には、緑味をもった茶灰色。内底・口縁部外面は草木灰をかける。	高取系
42	176	SD10 上層	陶器	皿	15.0	(6.4)	(3.2)	蛇ノ目高台状に、高台内側を円形に削り込む高台は低く、口縁部は内弯する。釉は高台外側まで施す。	素地は淡茶色で精緻。焼成良好。白灰色釉。	伊万里17C後半
42	177	SD10 直上	陶器	摺鉢	—	—	(5.3)	口縁部は2段に屈折させ、端部内側に粘土を貼り付けてT字形をなす。内面の下し目は4本以上の単位である。	素地は精緻。焼成良好。褐色釉が薄くかかる、露胎部は茶褐色。	
42	178	SD10 直上	陶器	摺鉢	—	—	(4.5)	口縁端部を丸く肥厚させる。内面の下し目は8本以上の単位である。	素地に1～2㎜の砂を少し含む。焼成やや軟。明茶褐色釉。	
42	179	SD10 上層	陶器	摺鉢	—	(13.6)	(7.8)	外開きの高台は厚い。体部内面は使用により磨滅している。下し目は6本以上の単位である。	素地に1～3㎜の砂を少し含む。焼成良好。暗褐色釉。内面は茶色で、釉は使用により磨滅している。	
42	180	SD10 上層	陶器	甕	—	15.2	(9.7)	平底で、体部は開く。内底と外底に輪状の砂目がある。	素地に1～3㎜の砂を少し含む。焼成良好。茶褐色釉。	
42	181	SD10 上層	瓦質土器	足鍋	—	—	(9.0)	外反した口縁部の内側をつまみ出している。内面はヨコハケ調整。	胎土に1～3㎜の砂を含む。焼成良好。暗灰色。	
42	182	SD10 上層	瓦質土器	瓶	—	12.0	(12.8)	底部は平底。フラスコ状を呈し、くびれは緩い。外面に菊花・梅花文、四菱文のスタンプあり。	胎土に1～2㎜の砂を少し含む。焼成良好。明茶褐色、内面下部は黒灰色。	
42	183	SD10 直上	瓦質土器	鍋	—	—	(10.5)	丸底で、外面底部には粗めのハケ調整。体部上位はナナメハケ調整、下位はナデ調整、内面はヨコハケ調整。	胎土に1～3㎜の砂を少し含む。焼成やや不良。淡灰色。	
43	190	SD12	弥生土器	甕	—	8.8	(3.6)	上げ底。内外面磨滅。	胎土に砂を多く含み、やや細かい。焼成良好。淡茶褐色。	
43	191	SD12 直上	土師器	椀	12.4	(7.2)	4.8	外開きの細い高台。体部は丸みをもつ。内外面はヨコナデ調整。	胎土は精緻。焼成良好。外面は茶灰色・淡茶色、内面は淡茶色。	
43	192	SD12	瓦質土器	足鍋	—	—	(4.7)	くの字形口縁部端部を内側に長くつまみ出す。内外面はヨコナデ調整。	胎土は精緻。焼成良好。濃灰色。	
43	193	SD12	土師器	高坏	—	—	(6.7)	脚部片で、筒部は開く。内外面は磨滅している。	胎土は精緻。焼成やや軟。明茶褐色。	
44	201	SP403	縄文土器	甕	—	—	(4.5)	口縁部外面に突帯貼り付け。刻目を施す。外面は条痕。	胎土に砂を含み、精緻。焼成やや軟。淡黒灰色～淡茶灰色。	
44	202	SP539	弥生土器	甕	—	—	(6.0)	鋤形の口縁部で、口縁部内側に肥厚させる。内外面はヨコナデ調整。	胎土に砂を含み、精緻。焼成良好。淡茶褐色。	
44	203	SP96	弥生土器	甕	—	—	(5.1)	鋤形の口縁部で、内外面はヨコナデ調整。	胎土に砂を含み、精緻。焼成良好。淡茶褐色。	
44	204	SP571	弥生土器	甕	—	—	(4.7)	鋤形の口縁部片で、端部は丸く仕上げる。	胎土は砂を含み、やや粗い。焼成やや軟。茶褐色～暗黒灰色。	
44	205	SP456	弥生土器	甕	—	—	(2.4)	逆L字形口縁部の内側を肥厚させる。内外面はヨコナデ調整。	胎土は粗い。焼成やや軟。茶褐色。	
44	206	SP45	弥生土器	甕	—	—	(3.3)	逆L字形口縁部で、内外面はヨコナデ調整。	胎土は砂を含み、やや粗い。焼成良好。茶褐色。	

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	器種	口径	底径(高台径)	器高(現存高)	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
44	207	SP668	弥生土器	甕	—	—	(3.8)	くの字形口縁部片で頸部の下位に突帯状の小さな段を形成。	胎土に大粒の砂を含み、やや細かい。焼成良好。淡茶色。	
44	208	SP415	縄文土器	鉢	—	8.0	(2.8)	平底で、端部が強く外へ張り出す。内外面はナデ調整。	胎土は粗い。焼成やや軟。淡茶灰色。	
44	209	SP557	縄文土器	甕	—	6.5	(3.25)	上げ底で、厚みがある。内外面はナデ調整。	胎土は粗い。焼成軟。淡茶褐色～淡茶灰色。	
44	210	SP66	縄文土器	甕	—	8.5	(3.6)	上げ底で、厚みがある。端部が外へ張り出す。外面に指頭圧痕が残る。	胎土は粗い。焼成やや軟。暗茶灰色。	
44	211	SP373	弥生土器	甕	—	7.0	(3.3)	平底。内外面は磨滅。	胎土に砂を含み、やや細かい。焼成やや軟。淡茶白色。	
44	212	SP167	弥生土器	甕	—	7.9	(3.5)	平底。外面はタテハケ調整。内面は磨滅。	胎土に微砂を含む。焼成やや軟。外面は淡茶灰色、内面は黒灰色。	
44	213	SP538	弥生土器	甕	—	8.3	(2.3)	平底。外面はタテハケ調整。	胎土は粗い。焼成やや軟。	
44	214	SP96	弥生土器	甕	—	8.2	(6.1)	平底で、外面はタテハケ調整、内面はヨコナデ調整。	胎土は粗い。焼成やや軟。外面は淡茶褐色、内面は淡茶灰色。	
44	215	SP97	弥生土器	甕	—	8.2	(7.3)	平底で、外面はタテハケ調整。	胎土は粗い。焼成やや軟。外面は淡茶褐色、内面は淡茶灰色。	
44	216	SP181	弥生土器	甕	—	9.0	(4.1)	平底で、外面は粗いタテハケ調整、内面には指頭圧痕がある。	胎土は粗い。焼成やや軟。外面は茶褐色、内面は暗茶灰色。	
44	217	SP637	弥生土器	甕	27.3	—	(14.1)	逆L字形口縁部で、脚部上位に断面三角形の突帯を貼り付け。外面はタテハケ調整、内面はナデ調整。	胎土に砂を多く含む。焼成やや軟。外面は暗灰茶色、内面は赤みを帯びた茶灰色。	
44	218	SP637	弥生土器	甕	31.0	—	(13.6)	逆L字形口縁部で、端部は丸みをもつ。外面はタテハケ調整、内面はナデ調整。	胎土に細かい砂を多く含む。焼成やや軟。外面は灰茶色、内面は暗茶褐色。	
44	219	SP637	弥生土器	甕	29.5	—	(15.5)	逆L字形口縁部で、内側を肥厚させる。外面にタテハケ調整、内面はヨコナデ調整。口縁部は内外面ヨコナデ調整。	胎土に大小の砂を多く含む。焼成良好。茶褐色。	
44	220	SP637	弥生土器	蓋	—	30.5	(5.0)	開いた口縁端部はやや肥厚し、平坦部を形成する。	胎土は精緻。焼成良好。茶灰色、内面は茶灰色。	
44	221	SP637	弥生土器	器台	7.2	10.0	16.0	下端は大きく、上端は小さく開く。内外面に指頭圧痕がつく。ナデ調整。	胎土は精緻。焼成良好。赤みを帯びた茶灰色。	
44	222	SP637	弥生土器	器台	8.1	9.7	16.0	下端は大きく、上端は小さく開く。内外面に指頭圧痕がつく。ナデ調整。	胎土に細かい砂を少し含む。焼成良好。赤みを帯びた茶灰色。	
45	223	SP482	須恵器	高坏	16.0	5.6	10.4	坏部体部は外弯気味に外反する。脚部は低く、裾部は大きく屈折し、端部は内弯する。内外面はヨコナデ・ナデ調整である。	胎土は精緻。焼成良好。茶灰色。	
45	224	SP588	須恵器	平瓶	—	—	(5.2)	扁平球体で、肩部が張る。やや上げ底である。頸部から肩部外面はカキ目を施す。肩部に浅い沈線が1条ある。	胎土は精緻。焼成良好。暗青灰色。	最大胴部径11.6cm
45	225	SP462	須恵器	甕	—	—	—	外面は格子目叩き、内面は平行の当て具痕である。	胎土は精緻。焼成良好。暗茶灰色。	
45	226	SP462	須恵器	甕	—	—	—	外面は格子目叩き、内面は青海波の当て具痕がある。	胎土に砂を含み、精緻。焼成良好。淡灰色。	
45	227	SP232	土師器	皿	8.8	6.8	1.6	糸切り底。内外面はヨコナデ調整。	胎土は精緻。焼成やや軟。淡茶褐色。	
45	228	SP232	土師器	坏	13.1	8.6	2.8	糸切り底で、板目痕がある。内外面はヨコナデ調整。	胎土はやや粗い。焼成やや軟。	
45	229	SP232	土師器	坏	12.7	8.4	2.5	糸切り底。内外面はヨコナデ調整。	胎土は精緻。焼成良好。	
45	230	SP173	土師器	坏	—	8.6	(2.5)	ヘラ切り。内外面はナデ調整。	胎土は精緻。焼成良好。淡茶褐色。	
45	231	SP618	土師器	鉢	11.7	—	(4.95)	体部は丸みをもち、丸底の底部との境に段がある。	胎土に砂を含み、精緻。焼成良好。淡茶褐色。	

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	器種	口径	底径(高台径)	器高(現存高)	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
45	232	SP540	土師器	鉢	14.3	—	(5.8)	半球体を呈し、内外面はナデ調整。	胎土に砂を含み、精緻。焼成やや軟。淡茶褐色。	
45	233	SP152	白磁	碗	—	—	(4.5)	体部は丸みをもち、口縁部は外反する。厚めの釉を施す。内底見込みに沈線1条。	素地は精緻。焼成良好。淡緑灰色。	
45	234	SP312	瓦質土器	摺鉢	—	9.9	(2.8)	やや上げ底で、外面はナデ調整。内側の下し目は4本単位である。内底にも下し目を入れる。	胎土に砂を含み、精緻。焼成良好。淡茶灰色～淡黒灰色。	磨滅著しい
45	235	SP719	青磁	碗	—	6.4	(1.7)	平底。内面のみ施釉。内底と外底部に目痕がある。	素地は精緻。焼成軟。外面は淡茶白色、内面は淡緑灰色。	越州窯系
46	251	南側包含層	須恵器	坏	—	(10.8)	(2.0)	コの字形高台は、底部と体部の境に付く。内外面はヨコナデ調整。	胎土は精緻。焼成良好。灰色。	
46	252	トレンチ	青磁	碗	—	(7.0)	(2.8)	低い輪高台体部外面に縦の沈線がある。全面施釉で、畳付は掻き取る。	素地は茶灰色で、精緻。焼成良好。暗いオリーブ色釉。	越州窯系I類
46	253	黒色土包含層	土師器	高坏	—	—	(7.0)	脚部片。裾部を欠く。裾部は大きく開き、内面に強い稜がある。内外面はナデ調整。	胎土に砂を少し含み、やや細かい。焼成やや軟。明茶褐色。	
46	254	トレンチ	土師器	甑	—	—	—	把手部分で、断面形は不整形を呈する。	胎土に大粒の砂を多く含み、粗い。焼成良好。淡茶色。	
46	255	黒色土包含層	土師器	甑	—	—	—	把手部分で、断面形は不整円形を呈する。	胎土に大粒の砂を含み、やや細かい。淡茶褐色。	
46	256	南側包含層	陶器	摺鉢	—	—	(8.1)	口縁端部を丸く肥厚させ、外面に段を付ける。内側の下し目は9本単位。	素地は淡茶色で砂を含み、やや粗い。焼成良好。暗い小豆色釉。	
46	258	遺構面	陶器	摺鉢	30.2	16.1	11.9	平底で、内湾した口縁部の外面を肥厚させて、平坦面を形成する。	胎土に大粒の砂を含み、やや粗い。焼成良好。口縁部は、小豆色、体部は、褐茶色。	備前焼IV類
46	259	遺構面	弥生土器	甕	—	—	(5.6)	くの字形口縁部で、端部は丸みをもつ。内外面は磨滅。	胎土に砂を多く含み、やや粗い。焼成良好。淡茶色。	
46	260	遺構面	弥生土器	壺	—	7.3	(2.4)	平底で、体部の立ち上がりは丸みをもつ。	胎土に大粒の砂を多く含み、やや粗い。焼成やや軟。明茶褐色。	

Tab. 5　第74次調査軒平瓦計測表

(単位cm)

挿図番号	遺物番号	出土遺構	文様	計測値(単位cm)							色調	胎土	焼成	形態・製作技法	備考
					上外線		下外線		脇区幅	顎厚さ					
				厚さ	厚さ	高さ	厚さ	高さ							
41	160	SD07	均整唐草文	5.4	1.0	0.5	0.5	0.6	4.3	1.4	黒灰色	精緻	良好	ナデ調整	

Tab. 6　第74次調査丸瓦計測表

(単位：cm)

挿図番号	遺物番号	出土遺構	長さ		幅		高さ	弧深	色調	胎土	焼成	形態・製作技法	備考
			玉縁部	筒部	前端部	後端部							
20	52	SE04	—	—	—	—	—	—	灰色	精緻	良好	背部はナデ調整、谷部は布目痕	現存長9.8cm、現存幅6.7cm、厚さ1.7cm
42	186	SD10上層	—	—	—	—	—	—	淡白茶色	1～2mmの砂を少し含む	良好	背部はナデ調整、谷部は細かい布目痕	現存長9.0cm、現存幅7.9cm、厚さ2.2cm

Tab. 7　第74次調査平瓦計測表

(単位cm)

挿図番号	遺物番号	出土遺構	長さ(現存長)	厚さ(現存厚)	幅		弧深	色調	胎土	焼成	形態・製作技法	備考
					前端部	後端部						
15	5	SE01第5層	(11.8)	1.7	—	—	—	黒灰色	1～2mmの砂を少し含む	良好	ナデ調整	現存幅20.3cm
42	184	SD10上層	(11.9)	1.9	—	—	—	灰色～黒灰色	1～3mmの砂を少し含む	良好	ナデ調整	現存幅15.9cm
42	185	SD10上層	(10.8)	1.2	—	—	—	淡茶褐色	1～2mmの砂を少し含む	良好	背部・谷部ともにハケ調整	現存幅10.7cm

Tab. 8　第74次調査鉄製品一覧表

(単位：cm)

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	長(現存長)	幅(現存幅)	厚(現存厚)	備考
45	237	SP538	釘	(4.5)	1.0	1.0	

Tab. 9　第74次調査木製品一覧表

（単位：cm）

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	樹種	長さ	幅	厚さ	径	木取り	備考
15	7	SE01	樽(側板)		(16.3)	3.4	0.3		板目	
15	8	SE01	樽(側板)		16.4	2.3	0.4		板目	
15	9	SE01	樽(側板)		16.3	3.2	0.4		板目	
15	10	SE01	底板		—	—	0.75	径12.2cm	板目	
15	11	SE01	杵		163					完成品
15	12	SE01	臼		高さ68.3cm	—	—	57.2～59		台高24cm、胴くびれの臼、台は台形状に開く
18	29	SE02	棒状製品		8.6	4.2	2.9		柾目	
18	30	SE02	紡錘車		—	—	0.8	径5.3cm	柾目	
18	31	SE02	板状木製品		7.6	3.7	1.5		柾目	
18	32	SE02	板状木製品		11.3	6.2	2.1		柾目	
18	33	SE02	板状木製品		14.8	2.8	0.5		柾目	
18	34	SE02	木杭		14.8	2.2	2.1		芯持ち材	
18	35	SE02	木杭		(16.4)	—	—	径2.5cm	芯持ち	
22	58	SE04	木杭		23.5	4.4	3.95		芯持ち半裁材	
22	59	SE04	木槌		14.0	6.1	6.5		芯持ち材	
22	60	SE04	樽(側板)		16.2	2.75	0.4		板目	
22	61	SE04	樽(側板)		14.0	3.5	0.8		板目	
22	62	SE04	桶の底板		11.9	2.8	0.55		柾目	
23	63	SE04	樽(側板)		14.8	3.6	0.7		板目	
23	64	SE04	樽(側板)		15.0	3.8	0.8		板目	
23	65	SE04	樽(側板)		15.5	3.2	0.7		板目	
23	66	SE04	樽(側板)		15.8	4.2	0.8		板目	
23	67	SE04	樽(側板)		14.2	2.2	0.8		板目	
23	68	SE04	樽(側板)		10.7	2.5	0.75		板目	
23	69	SE04	樽(側板)		14.8	3.1	0.85		板目	柄穴の切り込みがある
23	70	SE04	樽(側板)		15.3	2.2	0.4		板目	
23	71	SE04	樽(側板)		15.4	2.2	0.45		板目	
23	72	SE04	樽(側板)		15.0	2.2	0.4		板目	
23	73	SE04	樽(側板)		15.2	2.1	0.35		板目	
23	74	SE04	樽(側板)		15.2	2.0	0.4		板目	
23	75	SE04	樽(側板)		15.1	1.9	0.4		板目	
23	76	SE04	樽(側板)		15.2	2.5	0.4		板目	
23	77	SE04	樽(側板)		15.2	1.8	0.4		板目	

Tab.10　第74次調査石製品一覧表

（単位：cm）

挿図番号	遺物番号	出土遺構	器種	長(現存長)	幅(現存幅)	厚(現存厚)	重量(g)	石材	色調	特　　徴
15	6	SE01	砥石	(10.0)	(6.3)	(6.2)	—	砂岩	淡灰緑色	長方形状の面取りした石材を利用。３面を砥面。他面は粗整形。
17	28	SE02	石鏃	2.7	(1.8)	(0.4)	—	サヌカイト	灰黒色	片方のかえしの一部を欠く。丁寧なつくり。横長の剥片を用いる。
19	36	SE03	石臼(砥石)	19.0 (復原径)	—	(8.3)	—	砂岩	淡灰緑色	茶臼、上臼を砥石に転用。芯棒孔径は2.4cm、挽き木孔の径4.8cm、深さ2.5cm。擦り目は砥石として利用しているため磨滅。上部は、皿状にくぼませ、周縁部は幅3.7cm。
19	37	SE03	石臼	36.4 (復原径)	—	7.1	—	凝灰岩	灰色	現存1/2。粉挽き臼の下臼で、芯棒孔径2.0cm。擦り目は６分割、主溝６本、副溝８本。
19	38	SE03	宝篋印塔 (砥石)	9.5	25	(8.15)	—	砂岩	淡灰緑色	笠の部分で、隅飾突起の先端部は欠失。露段は６段遺存している。1/4残。分割面の２面を砥石として再利用。
20	53	SE04	凹石 (砥石)	(12.8)	(9.4)	(4.9)	—	砂岩	暗灰色	隅丸長方形に粗割りして、４面を敲打面取りしている。Ａ面の中央に凹みがある。側面を砥石として使用。
20	54	SE04	砥石	(18.6)	5.9	2.4	—	細粒砂岩	黒灰色	楕円形の自然石を利用。Ａ面利用。側辺も研磨。Ｂ面の一部にも使用痕あり。
21	55	SE04	板碑	(16.0)	18.6	9.4	—	砂岩	黒灰色	二次火を受ける。山形の額部のみ遺存。２条の薬研彫りの溝がある。裏面に鑿痕が残る。
21	56	SE04	板碑(砥石)	(16.0)	(16.0)	8.6	—	砂岩	淡灰緑色	塔身の一部。頭部・基部を欠く。砥石に転用し、４面の一部を使用。梵字はタラーク(地蔵菩薩)を刻む。
22	57	SE04	砥石	(33.4)	(15.0)	(9.2)	—	砂岩	淡茶灰色	Ａ面と１側面を砥石とする。Ａ面に鑿痕。
24	82	SE08第2層	砥石	(9.0)	(2.4)	1.1	—	泥岩	暗灰青色	一方の小口が幅広い長方体で、両小口は面取り整形。ＡＢ両面と両側面を使用。
27	104	SK07	砥石	(6.8)	7.2	(5.3)	—	砂岩	暗灰色	欠損。上の小口は自然面を残す。両側面とＡ・Ｂ両面を砥面に使用。
28	109	SK12	板碑	(23.2)	17.3	7.5	—	砂岩	黒灰色	板碑の基部で、碑身を欠く。碑身の残存長は5cmを測る。両面に粗い鑿痕がある。二次火を受ける。
28	110	SK12	石臼	33.2 (復原径)	—	(7.2)	—	凝灰岩	暗灰色	粉挽き臼の下臼現存1/4。孔径1.0cm。多孔質の石材。８分割で、擦目は主溝８本、副溝４本。摩滅が著しい。
40	158	SD05	石鏃 (未製品)	2.4	(1.7)	0.5	—	黒曜石	黒色	縦長の剥片を用いる。三角鏃に整形するもので、粗い調整である。
43	187	SD10上層	砥石	11.4	(7.5)	2.6	—	細粒砂岩	黄灰色	裏は分離している。不整の長方形状を呈し、両小口と側面の１面、Ａ面を使用。
43	188	SD10	砥石	8.4	(4.0)	3.8	—	砂岩	灰色	長方形の立方体に面取りし、１面のみ砥面として使用。
43	189	SD10直上	砥石	6.0	(2.4)	(0.65)	—	滑石	褐灰色	一方の側面に切断面がある。Ａ面は研磨、研磨はＡ面のみであるから、製品の剥離片か。
45	236	SP155	石鍋	20.7 (復原径)	—	4.5 (現存高)	—	滑石	灰黒色	外面の口縁直下に小さな三角突帯を作り、外面にはタテ長のケズリ痕。内面は丁寧な仕上げ。口縁部は丸く仕上げる。後に金属の傷がある。
45	238	SP618	砥石	(12.2)	(4.3)	(2.5)	—	砂岩	明淡茶白色	長方形状を呈し、両小口は面取り整形しており、一部研磨。Ａ・Ｂ面、側面の４面を砥面として使用。
45	239	SP615	磨石(敲石)	5.3	6.0	5.5	—	玄武岩	暗灰青色	やや角ばった扁平球体で、一部に剥離痕がある。敲石として使用後に、擦石に転用した。
45	240	SB15-513	磨製石斧	(7.8)	(6.8)	(2.8)	—	玄武岩	灰色	破片遺存部分の表面は研磨、風化が著しい。
45	241	SP567	石鏃	2.75	1.9	0.5	—	サヌカイト	黒灰色	先端を少し欠いている。抉りは深いため、両方のかえりが長い。整形痕は、やや粗雑である。
46	257	黒色土層 (包含層)	砥石	(27.5)	(9.9)	3.5	—	硬質砂岩	暗灰褐色	扁平な礫を利用し、面取りを行う。砥面はＡ・Ｂの２面と１側面を利用する。
46	261	遺構面	滑石製品 (未製品)	(10.5)	(6.5)	(2.2)	—	滑石	灰緑色	暗青色の縦縞が入る。靴ベラ状に粗割りされた石材を、Ａ・Ｂ面と側辺の一部を粗く研磨している。上部の小口の狭い部分が肉厚で、下位は薄く仕上げる。
46	262	不明	白玉	0.45 (復原径)	—	0.2	—	滑石	灰色	半折損している。孔径0.15cm。